

〔富山県立山博物館調査研究報告書〕

六道絵の図像構成に関する研究

－六道・立山・山中他界－

鷹 巢 純

2000年3月

富山県 [立山博物館]

六道絵の図像構成に関する研究

－六道・立山・山中他界－

愛知教育大学助教授 鷹 巢 純

1: 他界の在りか

われわれは現在のこの生涯を終えた後、一体どうなるのか。およそこの世にある限り明確な回答を体験し得ないこの問いこそは、われわれを宗教的思索へと駆り立てる最大の動機の一つであろう。したがって他界の状況あるいは現世と他界との関係を知りたいという思いに応えることは、諸宗教に課せられた重要な課題でもあった。このことは仏教についても同様で、現世と他界とのかかわりを視覚化するために仏教は浄土変相図・来迎図・六道絵・十王図といった美術を創出した。なかでも六道絵および十王図は、善行のみによって生きることのできない人間存在を前提とする点で、浄土を描写の中心とした美術よりもはるかに複雑な他界を提示する。

六道とは衆生が死後にそのいずれかに転生する六つの存在形態（地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天）を指す。いずれかに転生した衆生はその存在形態としての生涯を終えたなら再び六道のいずれかに転生することになる。六道はそのいずれもがそれぞれにさまざまな苦痛を運命づけられており、この苦痛のうちに繰り返される転生こそが輪廻の実態である。したがって浄土や来迎への指向はこの輪廻からの解脱を意味する。

一方、十王とはこの転生の過程を支配する10人の裁判王である。衆生の死後7日目に生前の行いの善悪について秦広王による最初の審判がなされ、以後49日まで7日毎の審判が続き、さらに100日目、1年目、3年目の審判がなされ、それによって10人の王がそれぞれ1回ずつ担当する10回の審判が終了したとき、衆生は次の転生先を定められる。

六道と十王、このそれぞれの概念は寛和元年（985）の源信『往生要集』¹⁾ および『地藏菩薩発心因縁十王経』²⁾ の両テキストによって日本においてもことに中世以降広く普及し、六道絵および十王図の制作もこれによって盛んに行われた。

六道絵に関しては、12世紀後半に後白河院が蓮華王院宝蔵に大規模な六道絵巻を所蔵していたことが知られ、現存する地獄草紙・餓鬼草紙・病草紙がその一部ではないかとも推測されているが、六道絵としての構造が欠落なく現存する最古の作例は承久年間（1219-22）成立の承久本北野天神縁起絵巻だろう。天神縁起説話の末尾に六道絵を接続したこの作例は『往生要集』に比較的忠実な六道世界を描写してみせるが、修行のさなか山中で頓死した日

蔵が六道をめぐるという山中他界観を思わせる構成は、本来地獄しかめぐらなかつた説話の基本構成も説話の意義をなす地獄での醍醐天皇との面会に関する描写もともども無視する制作姿勢と相俟って、特異な印象を与える。承久本に続く時期の聖衆来迎寺本六道絵（13C）はしばしば日本における六道絵の代表作例として挙げられるが、やはり『往生要集』によって説明されるこの作例にしても同書が言及しない閻魔王庁に1幅をあてるなど同書を逸脱する要素を含む。

こうした六道絵の制作と並行して、中国南宋末から元代にかけて主に浙江省寧波で制作された十幅形式の十王図が日本に大量に輸入された。奈良国立博物館本陸信忠筆十王図（13C）やボストン・メトロポリタン両美術館本金大受筆十王図（13C）などがその代表的作例であろう。日本でも鎌倉時代の福岡・誓願寺本十王図（14C）を現存最古の作例として、中国作を忠実に模写したり翻案した作品が盛んに制作された⁴³⁾。一方でこのようにして日本にもたらされた十王図像は六道図像と組み合わせられ、京都・禅林寺本十界図（13C）や兵庫・極楽寺本六道絵（13C）をはじめとする独特な構成をもつ形式を生んだ。この、十王図像と六道図像との組み合わせによって他界の様相を表現した絵画を、わたしは仮に「六道十王図」と呼ぶ⁴⁴⁾が、この一群の作品こそが日本における他界観の展開を如実に示すものと考え。すなわちこの六道十王図は、中世から近世にかけてある程度まとまった量の作品が残っており、かつ六道思想や十王思想を媒介として当時の日本人の精神を取り巻くさまざまな状況がそこに投影されているからである。

2:めぐりわたるための仕掛け

2-1:転生・蘇生の説話図像

六道十王図の展開と極めて密接な相互関係をもつ代表的なテキストとしては上述の『往生要集』や『地蔵菩薩発心因縁十王経』の他にも、『十王讚歎鈔』⁴⁵⁾『十王本跡讚嘆修善鈔』⁴⁶⁾（略称『十王讚嘆修善鈔』、以下略称を用いる）『十王讚歎修善鈔図絵』⁴⁷⁾を挙げることができる。『地蔵菩薩発心因縁十王経』を解釈する体裁を取るこれら三つのテキストは、それぞれ日蓮宗・浄土宗・浄土真宗と異なる宗門環境で作られてはいるものの、宗派性を読み取り得る部分はかなり限定されている⁴⁸⁾。上、宗門に対する態度の違いにもかかわらず、共通の原テキストに基づいている点で重要である。この三つのテキストをみると、宗門を越えて原テキストが承認され、増補部分が受け継がれて行く過程をみることができる。したがって、すべてのテキストに共通の部分や、宗派を越えて受け継がれた増補部分は、日本人にとってかなり共通性の高い他界認識を示すものと考えてよい。しかもそれらは鎌倉時代、室町時代、

江戸時代と、いずれもそれぞれ成立した時期を異にしており、六道十王図をめぐる発想の歴史的展開を考えるにも適している。

ではこの共通認識のうちにみられる六道思想あるいは十王思想にはどのような傾向があるだろうか。そこでまず気づくのは説話的要素の充実ということである。その主題を列挙すれば以下のようなになる。

『十王讃歎鈔』に引用された説話

1 孟宗、雪中に筍を得る 2 王祥、氷中の魚を得る 3 丁蘭、母の木像に仕える 4 張敷、扇を身に添う

『十王讃嘆修善鈔』で増補された説話

1 叔雄、父のために江に身を投ず（『十王讃歎修善鈔図絵』で再削除） 2 董永、身を売って父を葬る 3 楊威、虎の害を免る 4 法然の生涯 5 雄俊、墮地獄を免る

『十王讃歎修善鈔図絵』でさらに増補された説話

1 釈迦、父の棺を担う 2 金棺より釈迦三身を現す 3 唐の沈季詮争わず 4 孔子、道を行うを射に喩う 5 地獄の釜の作者 6 郭巨、金の釜を掘り出す 7 漢の楊震、黄金を受けず 8 羅生門の鬼 9 隋の耿伏生の母、猪に転生す 10 長安の筆生趙の娘、羊に転生す 11 美濃国の百姓の母、雉に転生す 12 宝蓮香比丘尼、女根より火を生ず 13 隋の河南の人妻、犬頭となる 14 宋の季生の妻、狗に変ず 15 董永（大幅増補） 16 宋の豊城の民、虎に食わる

これらの説話はいずれも『地藏菩薩発心因縁十王経』にはみられなかったが、このように列挙してみると『十王讃歎鈔』以降、加速度的に数を増して引用されるようになったことが確認できる。これらの説話のうち、個別に検討を要する特殊な性格の「法然の生涯」「雄俊、墮地獄を免る」「地獄の釜の作者」の3点を除外する⁹⁾と、引用された説話は、大きく二つのグループに分けることができよう。すなわちその第一は孟宗・郭巨ら廿四孝のモチーフをはじめとした、親への孝行を扱った説話のグループであり、そして第二は悪業と結び付いた人間の転生を扱った説話のグループである。

そしてこのような性質の説話を引用する傾向は、実は六道十王図にもみられる。親への孝行を扱った説話のグループとしては、16世紀に制作されたと推定される出光美術館本六道絵に廿四孝に取材した三つの説話を確認できる。全6幅からなるこの作品の第6幅は天道・人道・畜生道からなり、その最下辺に左から、母のために雪の中でタケノコを探す「孟宗」

(見取り図4-88)、親の食いぶちを確保するために息子を埋める穴を掘る「郭巨」⁽¹⁰⁾ (見取り図4-87)、親に老いを悟らせまいと子供のふりをしてお手玉をする「老萊子」(見取り図4-86)が横一列に並んで描かれる(図01)。

一方で悪業と結び付いた人間の転生を扱った説話のグループとしては、13世紀後半の極楽寺本六道絵が『法苑珠林』や『三宝感応要略録』に基づく説話を少なくとも五種類図像化している⁽¹¹⁾。他にそれぞれ説話は特定されないものの禅林寺本十界図や出光美術館本六道絵では死者を地獄へと連行する火車が描かれるし、14世紀の茨木・水尾本六道十王図では説話は特定されないながら地藏に導かれ(悪道、恐らく地獄から)現世へ帰還する亡者(図02/見取り図2-28)が描かれ、地獄の釜が割れて亡者が昇天あるいは往生する図像に至ってはそのすべてを網羅することが不可能に近い。

さらに六道十王図では、悪道に堕ちた母を目連が救済することを主題とした目連救母説話にまつわる図像が頻繁に描かれる⁽¹²⁾。例えば極楽寺本六道絵では母が目連に阿鼻地獄での苦患を訴える場面(図03)や餓鬼道から畜生道に転生した母が目連にすがりつく場面(図04)など五場面が図像化されるし、長岳寺本六道十王図では黒縄地獄(図05/見取り図6-47)と餓鬼道(図06/見取り図6-34)での母子の再会の場面が選択され図像化される。そして阿鼻地獄における母子の出会いの一場面のみを採り上げたものまで含めれば禅林寺本十界図(図07/見取り図1-49)、水尾本六道十王図(図08・09/見取り図2-34・35)、15世紀の山梨・向嶽寺本六道十王図(図10)、出光美術館本六道絵(図11/見取り図4-22)など主要な六道十王図をほとんど網羅し得る。目連救母説話は、親への孝行を扱った仏教説話のなかでも最も名高いものの一つであると同時に、目連の母が悪道を次々と生まれ変わって行くという点で、人間の転生を扱った説話でもある。テキストに増補されていった説話の二つのグループの特徴を合わせ持つこの説話を、六道十王図が好んで採り上げていたということは、『十王讚歎鈔』をはじめとする三つのテキストと六道十王図との間に共通した発想があったことの証左となる。その発想とは一つには死後世界観を支える倫理基準としての孝行の奨励であり、もう一つは転生する世界としての六道観である。画中に目連救母説話図像をはじめとする転生を扱った図像を配することで、六道十王図は六道をめぐるものとして提示する。ほんらい単に並立される別個の世界に過ぎない六道の個々の局面でこれら転生の図像を目にするとき、我々は説話が舞台とする世界が行き来可能なものであることを知るだろう。そのうえで六道すべてが目の前に一覧して図示されるなら、この行き来の可能性が六道すべてに及ぶように感じるに違いない。六道十王図が意図していたのは、まさに他界へのこうした印象を定着させることにあったのではなかろうか。

2-2: 他界の道

他界をめぐりわたるものとして捉える態度はまた、他界に関する地理的描写のうちにも表れる。このことを最もよく示す例としては、16世紀末葉に制作された六道十王図の集大成ともいべき長岳寺本の第7幅に描かれた階段（図12/見取り図6-87）を挙げることができる。

第6幅の焦熱地獄と第7幅の阿鼻地獄との間に横たわる山岳を切り開き、それら二つの地獄を結ぶかのように設けられたこの階段は、通常的地獄観を逸脱するものである。亡者に苦しみを与えることを目的とする地獄に、本来この階段は不要なはずだ。移動せねばならぬ事情が亡者にあるのなら、そしてそこに山があるのなら、彼は急勾配に苦しみつつよじ登って越えてゆけばよかろう。にもかかわらずこの授苦の機会を放棄して切り通しを開き階段を設けることは、亡者の通行の便宜を取り計らったかのような印象を与えて奇妙である。同じことは第6幅の大叫喚地獄と焦熱地獄とを結ぶ位置に設けられた道（図13/見取り図6-74）についても言える。また自らのやむにやまれぬ衝動や獄卒に追い立てられて動くことを常とする地獄の亡者が、第7幅の階段の上では取り立てて切羽詰まった様子もなく地獄から地獄へと行き来することにも、やはり同じような奇異を感じる。

このことは、長岳寺本がこの悪道世界を描くにあたって、苦しみの救いのなさを表現することよりもめぐりわたるという仕組みを表現することを優先したのだとみることもできる。長岳寺本にとっては、八大地獄の最悪処であるはずの阿鼻地獄ですら閉塞した極苦の世界ではない。階段を渡ってやってきた阿鼻地獄の向こうの第8幅には、あたかもそれが出口であるかのように今度は橋（図14/見取り図6-96）が現れる。現に橋上には阿鼻地獄に背を向けて歩く亡者（見取り図6-97）が描かれるし、その行く手には蓮台を持参した観音（見取り図6-98）がやってくる。そして世界のはざまにあって橋の上を移動する亡者の姿は、長岳寺本ならずともあらゆる六道十王図で最も見慣れた光景である。とするならば、六道空間をめぐりわたりの場として捉える発想は、長岳寺本に最も濃厚に表れるものの、六道十王図に通底するものとみてよかろう。

3: 境界的モチーフ

世界と世界がそれぞれ単に併置されたに過ぎない孤立したものではなく、それらが一連のめぐりわたる対象であるという発想をもつとき、世界と世界の結合部分が重要になる。階段にせよ道にせよ、それらもまた結合部分とみることができる。そしてめぐりわたる他界観にとって最も重要な結合部分は、現世と他界との結合部分だろう。この結合部分こそは我々の知覚し得る世界と日常的な知覚を超越した世界との境界である。したがって他界に関するイ

メージの現実性や信憑性はひとえにこの境界のイメージの存在感より生じると言ってよいかもしれない。

3-1:境界としての野辺

おそらく現世と他界との境界を最も直接的に視覚化するなら、野辺ほどふさわしいものがあるまい。野辺に放置された死体が徐々に土へと帰ってゆく様は、現世から他界へのゆるやかな移行を想起させる。また『十王讃歎鈔』に

「又莊嚴論に命尽終時見大黒闇如墮深岸独逝広野無有伴侶と云て、正く魂の去時は目に黒闇を見て高き処より底へ落入るが如して終。さて死してゆく時、唯独渺渺たる広き野原に迷ふ。此を中有の旅と名也。」⁽¹³⁾

とあるような、生と死との中間領域たる中有を殺伐とした広野とみなす発想も、境界としての野辺のイメージ形成に影響を及ぼしているに違いない。

もちろん、死体の朽ちてゆく場である野辺は、六道表現にあって常に一義的な描かれ方をしていた訳ではない。それは例えば河本家本餓鬼草紙(12C)のように死肉を食らう疾行餓鬼の跳梁する場(図15)であり、承久本北野天神縁起絵巻(13C)のように天人が五衰の末に朽ちてゆく場(図16)でもあり、聖衆来迎寺本六道絵(13C)のように人道の不浄さを示す場(図17)でもある。このうち聖衆来迎寺本は、さらに別の幅で野辺へ向かう途上の野辺送りによって人道の死苦を表現してもいる(図18)。これらの表現では野辺はそれぞれ単独の意味内容を展開する場に過ぎないが、六道十王図の文脈の中で野辺はしだいに現世と他界との境界としての性格を明確にしてゆくこととなる。

禅林寺本十界図(13C)で野辺(見取り図1-18)は、死苦における臨終(見取り図1-15)に始まり野辺送り(見取り図1-17)を経る線上に位置し、現世から離脱する過程を暗示してみせる。このように近隣の図像と有機的に連携して現世と他界とを結び付けようとする野辺の扱いは、極楽寺本六道絵(13C)でさらに明確化されることになる。極楽寺本右幅右端には下より順に生苦、老・病苦、死苦のそれぞれの苦相図像が縦列をなして並ぶ(図19)。これらは単に人道における四苦の羅列ではなく、下から順に迎えることで人の一生をも形成する。死苦の上方には野辺送りが描かれ、この図像が死苦とさらに上方の野辺とを結び付ける。野辺では死体の腐乱してゆく過程が向かって右から左へと並び、その先には奈河津が描かれる。このように垂直方向に現世での人生が、そして水平方向に他界への旅立ちが描かれる。そしてこの現世と他界との相異なるベクトルがまさにそこで直交することによって、野辺は極楽寺本におけ

る両世界の結節点としての機能を果たしているのである¹⁴⁾。

水尾本六道十王図(14C)に至って、野辺はさらに現世と他界との境界としての磁場を強めることになる。水尾本における野辺は人道不浄相(図20/見取り図2-29)を中心的に描くが、もちろんこれは単に人道における厭うべき三つの相のうちの一つを他の相とともに羅列的に描いたものではない。右幅に人生の起点である生苦(図21/見取り図2-7)が配され、左幅に人生の終焉を示す死苦(図22/見取り図2-27)が老苦(図23/見取り図2-28)・病苦(図24/見取り図2-26)を脇に従えて配されるのは、ここでも人道における四苦を人生の諸段階と踏まえた配置とみてよい。そして八苦の残り四つも、現状では求不得苦(見取り図2-8)と愛別離苦(見取り図2-30)の二つまでしか確認できないものの、こうした四苦の配置に矛盾しないように配されたとみるべきだろう。もちろん人生の諸段階の右から左へという進行方向は、審判期日の推移からみた十王の配置の進行方向とも矛盾しない。不浄相はこうした一連の配置の果てに死苦の左側に配され、死後に土へと還ってゆく肉体の表現として、現世における人生の諸段階の完全な終結を表明する。

この水尾本において人道八苦のうち求不得苦は生苦と老病死苦との間に挿入されるが、愛別離苦(図25)は幼い我が子を失った母親の悲しみとして表現され、嬰兒の死体を伴うことからやはり野辺に配される。このことは野辺という場が、例えば不浄相を描くための付随的な意味合いで描かれているのではなく、場のもつ吸引力がそこに不浄相や愛別離苦の図像を招き寄せたとみるべきだろう。

野辺が同様の吸引力を形作った例としては他に極楽寺本や香雪美術館本二河白道図(13C)が挙げられる。極楽寺本でも野辺は不浄相を中心として愛別離苦を組み込む(図26)。ただしここでは死ぬのは母の方で、嬰兒はいまだ死なず彼女にすがりつく。香雪美術館本では野辺は不浄相を中心として病苦を組み込む(図27)。ここでは余命いくばくもないと見限られた病人が野辺に打ち捨てられる。隣接した位置に描かれる場合でも相互に直接の干渉をもたないことの多い六道美術の諸図像の関係の中で、これらの組み込みは偶然とは言えまい。水尾本をはじめとしてこれらの作例では、図像の状況を説明する付加的な情景描写とは異なり、野辺は作品全体の構成に關与する独立した意味を担った場とされているとみなしてよい。その意味とはおそらく人々が肉体の腐敗を通じてゆるやかに現世的存在から他界的存在へと移行して行く場としての意味、現世と他界が乗り入れ合う境界としての意味と思われる。

水尾本の野辺におかれたもう一つの図像として、天道を確認しておこう。水尾本における天道は二つの様相に分割して描かれる。その第1は天の宮殿での遊樂のありさま(図28/見取り図2-31)であり、第2は天人の衰滅の相(図29/見取り図2-32)である。野辺との関連で描かれるのはこのうち後者であり、これが先に考察した愛別離苦の図像と同一の地平にお

かれていることは土坡の連続性から明らかである。そして位置的な近接性・連続性においても愛別離苦や不浄相とより深い結び付きをみせており、天の宮殿での遊樂のありさまとの間はむしろ断絶しているような印象を受ける。

天道の二つの様相を描き分けることは聖衆来迎寺本(図30・31)や北野天神縁起承久本(図32・16)などにもみられ、ことに天人の衰滅の相の図像に関しては、聖衆来迎寺本では水尾本とほぼ同一の姿態をとり、承久本では腐乱した死体を描出することで不浄相とのイメージの重ね合わせにまで踏み込んで天人の衰滅を描いている。そうした類似点をもちながらも、聖衆来迎寺本や承久本は図像の配置において天人の遊樂から衰滅までを連続的に捉えている点で、遊樂と衰滅とを隔絶する水尾本との間に決定的な態度の違いがみられる。

天人の衰滅、いわゆる「天人五衰」と呼ばれる相を野辺に結び付ける発想は、不浄相との同一視をおこなった承久本に既に萌芽的な形で存在していたろう。しかし水尾本では天人の衰滅を天道という枠組みから外して野辺という枠組みの中に組み入れ直すという奇妙な処理がなされている。このことは日本人の六道美術における天道のイメージが、一方で阿弥陀浄土と並ぶ善処としてのものへと傾き¹¹⁵⁾、その一方で穢土としてのイメージを野辺という場へ吸引させてゆく過程をも示している。六道十王図において天道が穢土としての存在から脱却してゆく過程にあって、行き場を失った穢土としての天道のイメージは、愛別離苦図像やさらには後述(3-3-4)のいささか特殊な刀葉樹林図像がそうであるように、存在が転生する場である野辺に引き寄せられてゆく。野辺にこうした重要性を付与し、この吸引力豊かな場の象徴する境界を結節点として、水尾本は現世と他界との関係を規定しようとしているのである。

3-2:境界としての橋

死後世界とこの世の境界として十王信仰が当初よりイメージしていたのは川、『地蔵菩薩発心因縁十王経』に言うところの奈河津すなわち葬頭河、いわゆる三途の川である。

「葬頭河の曲、初江の辺において官庁相連なって渡る所を承く、前の大河は即ちこれ葬頭なり。亡人の渡るを見て奈河津と名づく。」¹¹⁶⁾

この川は『預修十王生七経』ですでに十王の第2である初江王の王庁に付随するモチーフとして語られ¹¹⁷⁾、その記述はすべて『地蔵菩薩発心因縁十王経』に引き継がれ増補される。こうした扱いはテキストの上では19世紀の『十王讚歎修善鈔図絵』に至るまで大差なく続く。ただしここで注意しておかねばならないのは、川が初江王の王庁と十王の第1である

秦広王の王庁との間に位置しているということである。川に到達する前に死後裁判の第1審が終了してしまうということは、この奈河津の境界性をかなり減じている。

一方視覚イメージとしてはどうだろうか。敦煌本十王経図巻の挿図では奈河は秦広王と初江王とを隔てる位置に描かれ(図34)、テキストの示すイメージに一致する。しかし日本にあっては、十王同士を隔てる位置に奈河津を描くことをせず⁽¹⁸⁾、むしろ十王に限定されない死後世界全体を現世と隔てる位置に描くことが一般的である。したがってここでは、『預修十王生七経』や『地藏菩薩発心因縁十王経』とは別個のイメージソースが想定されねばならない⁽¹⁹⁾。

13世紀の禅林寺本十界図では、十王および地獄道・餓鬼道を描いた左幅の右端に奈河津(見取り図1-48)を描くが、この位置は左右両幅を並べたとき人間世界を描いた右幅の左端の死苦(見取り図1-15)と隣り合い、彼岸と此岸との境界として機能するよう配置されている。同じく13世紀の極楽寺本六道絵でも人間が腐乱した果てに奈河津を置き、その向こうにあるもっぱら悪道世界として強調された死後世界との間を隔てている。

10世紀の敦煌本十王経図巻(図34)から禅林寺本(図35/見取り図1-46)や極楽寺本(図36)に至るまで、描かれた奈河津にはいずれも橋が添えられる。『預修十王生七経』には記述がなく『地藏菩薩発心因縁十王経』でようやく「有橋渡」という一語で簡単に触れられるに過ぎないこの橋は、視覚的イメージがテキストに先行した例と言えようか。敦煌本十王経図巻以来、橋の上にはそこを渡り死後世界へ向かう人物⁽²⁰⁾が描かれ、この橋が現世から死後世界へと参入するための入り口として、いわば一方通行的な機能を強調したものであることがわかる。

ところが14世紀の旧前田家本(現出光美術館本)十王地獄図(もっともこれは正確には六道十王図とは言えないかもしれないが)、15世紀の山梨・向嶽寺本六道十王図、16世紀の出光美術館本六道絵といった南北朝時代から室町時代にかけての六道十王図では、橋の示す方向性が以前ほど単純なものではなくなっている。たとえば出光美術館本六道絵では、橋の此岸側に奪衣婆が配され、橋はそこからやはり地獄の方へ向かって伸び、その上を渡る亡者も足を地獄へ向ける(図37/見取り図4-8)。それらはほとんど禅林寺本や極楽寺本を踏襲するイメージだが、橋を渡る亡者が地藏菩薩に先導されるという一点において決定的な差異を示している。悪道からの救済者である地藏が亡者を地獄へと導く可能性はあり得ない。しかも亡者は地藏に対して合掌礼拝しており、その身なりも地獄の罪人にふさわしい姿となり、もはや禅林寺本や極楽寺本のような正装ではない。したがってここでなされているのが悪道からの救済であることは明白である。つぶさに観察するなら、実は地獄へ向かって伸びる橋の先端が湧雲によって此岸とも地獄とも隔てられていることに気づくだろう。日本の絵画表現

において湧雲がしばしば相異なる世界を隔てる役割を果たすことを思えば、橋が方向的には悪道へ向かって伸びていても、ここで地藏と亡者とが目指しているのは此岸でも悪道でもない救済の地であろう事が推測できる。すなわち出光美術館本は、伝統的な表現にごく僅かなモチーフを加えることによって、「悪道へ向かう橋」という旧来のイメージに「悪道からの救済の橋」という新たな意味内容を付加したと考えてよいのではないか。亡者たちは画中の方向としては悪道を目指す、そして湧雲が機能することでその行程はそのまま悪道からの脱出ともなる。そこでは悪道が、入るところであると同時に出るところであるという感覚、死後に巡りわたる過程の一部であるという感覚で捉えられているように思われる。旧前田家本では「悪道からの救済の橋」としての機能がさらに強調されている（図38/見取り図3-51）。そこでは奈河津にかけられた橋を、地藏に先導された亡者が湧雲の彼方へと向かうが、そこらは画中の方角においても地獄とは反対方向、画面の外を目指している。

出光美術館本や旧前田家本のこの傾向を確認した後に鎌倉末葉14世紀の水尾本六道十王図をみると、水尾本に描かれた奈河津の橋（図39/見取り図2-5）が禅林寺本や極楽寺本の橋と出光美術館本や旧前田家本のそれとをつなぐ位置にあることがわかる。水尾本の橋を渡る男女の亡者は、禅林寺本や極楽寺本と同様に正装をまっており、その意味では水尾本は極楽寺本に至る伝統を継承するものと言える。その一方で、水尾本のこの男女の亡者は先導する存在に伴われており、その意味では旧前田家本以降の新しい傾向の先駆けともなる。ただし水尾本で亡者を先導するのは外見的には男女の亡者より一回り小柄な僧侶に過ぎない。もちろん、地藏による悪道救済を記した説話の中ではしばしば地藏が「小僧」の姿として描写される⁽²¹⁾ので、この小柄な僧侶を地藏とみなすことは十分に可能である。ただ、そうであったとしても、ここに描かれた悪道からの救済は、旧前田家本や出光美術館本のそれが示すあからさまに比してはるかに控えめな印象を与える。先導者の存在によって、死後世界への参入という伝統的な方向性が弱められ、先導者が地藏の姿をあからさまにせず亡者も正装で描かれることによって、悪道からの救済という新たに加えられた方向性もまた明確に主張されるに至らない。まさしく水尾本の橋は、両者の間にあって過渡的な状態にあると言えよう。

16世紀末葉の長岳寺本六道十王図は、橋をめぐるこうした動向の延長線上に制作された。長岳寺本にあって特徴的なのは、橋が2本架けられているということである。このうち1本は第2幅に通例どおり奈河津を渡すものとして描かれ（図40/見取り図6-14）、死後世界へ向かう橋として機能している。もう1本は第8幅、悪道の向こうに再び現れた川に架けられ（図14/見取り図6-96）、悪道を出て行く方向に向かう亡者がその橋の上で今まさに阿弥陀聖衆の来迎を受ける。南北朝時代から室町時代にかけての六道十王図において一つの橋に込められていた二つの意味を、長岳寺本では別々に描かれた2本の橋に振り分けてより明瞭に提

示する。それだけでなく、2本の橋を悪道の両端に配したことで、悪道はめぐりわたり通過されてゆくものとして明確に意識されるようになる。この発想は長岳寺本のみにもみられる孤立したものではなかったらしく、以後江戸時代を通じて大量に制作される六道十王図の多くで、より省略的で観念的な表現となりつつも、悪道の両端に1本ずつの橋を配するという同様の構成が採用されることとなった。

3-3:境界としての山

3-3-1:「死出の山」、あるいは「死天山」

山はもともとにそれ自体が他界としての性質を有している。山に他界があるならば、死後の道行きとして最初になさねばならないのは登山であろう。ここに、死後最初に登るべき「死出の山」という概念が生ずる。

六道十王図の文脈において「死出の山」のイメージが最初にコスモロジカルな文脈で詳細に示されたのは『地藏菩薩発心因縁十王経』においてである。

「一切の衆生の命終に臨む時、閻魔法王は閻魔卒を遣す。一を奪魂鬼と名づけ、二を奪精鬼と名づけ、三を縛魄鬼と名づく。即ち三魂を縛して門関の樹下に至る。樹に荆棘有り。宛ら鋒刃の如し。二鳥栖み掌る。一を無常鳥と名づけ、二を跋目鳥と名づく。(中略)然して樹門を通る。閻魔王国の境⁽²²⁾、死天山の南門なり。亡人の過重ければ両茎相逼り、腠を破り膚を割き、骨を折り髓を漏らす。死して天に死を重ぬ。故に死天と言う。此より亡人向かいて死山に入り、険坂に杖を尋ね、路石に鞋を願う。然れば即ち男女葬送するに於て三尺の杖を具え、頭に地藏の状並びに随求陀羅尼を書し、鞋一具を具し、魄神の辺に置く。軽過の亡人は大穴を通るが如し。微善の亡人は両茎も礙げず。死天は冥途の間、五百叟繕那なり。」⁽²³⁾

死天山をめぐるこの描写には既に山中での責め苦と裁きのイメージが明確に示される。『地藏菩薩発心因縁十王経』が日本の六道十王図に与えた影響は計り知れないものがあるが、しかしここで説かれた豊かなイメージが直接的に絵画化された形跡はほとんどない。わずかに長岳寺本六道十王図が、詳細に経意をなぞるに過ぎない。一方、鎌倉時代に成立した『十王讚歎鈔』は『地藏菩薩発心因縁十王経』を下敷きにしつつも、死天山にいくつかの重要なイメージを新たに加える。

「こは如何せんと思ふ処に、程もなく羅刹の形を見る。今までは僅かに名をこそ聞つるに、今親り此を見る怖しさ云計なし。其後は前後に付そひ、息をもくれず責かくれば、心ならず

行程に死出の山にいたる。此山高して又嶮し。いかかして越行べしとも覚えねども、獄卒どもに驅催されて泣泣山路にかかる。岩のかど剣の如くなれば、歩んとすれども歩まれず。其時獄卒鉄棒を以て打さく、息もつづかず絶入ぬ。さらば其まま消もせで、面かはりせずやがて活。依之此山を死出の山とは云なり。足のふみどころも覚えねば、嶮き坂に杖を求れども与ふる人もなく、路の石に履を願へども、はかする人もなし。此山の遠き事、八百里。嶮しき事、壁に向へるが如し。嶺より下す嵐はげしく吹て膚を徹し、骨髓に入事剣の如し。」²⁴⁾

実はイメージの具体性という点では『十王讃歎鈔』は『地藏菩薩発心因縁十王経』よりもむしろ後退している。羅刹は既に個別の名前を失っているし、亡者を裁く樹門も描写されない。しかし死出の山の山路の険しさについては『地藏菩薩発心因縁十王経』の描写を援用しつつ、さらに「剣の如し」という言い回しを繰り返してみせる。また獄卒が亡者を責め立てて登山をさせるという描写も『十王讃歎鈔』に初めてあらわれる。これらは地獄に関する記述にしばしばあらわれる「剣の山」のイメージと重なる。そして『十王讃歎鈔』の示した死出の山のイメージはほぼ同文のまま『十王讃嘆修善鈔』に引き継がれてゆき、さらに『十王讃歎修善鈔図絵』では「死出の山路」と題された挿絵(図41)が添えられる。死出の山のイメージを具体化してゆくテキストにおけるこうした展開は、図像における剣の山のイメージの展開とも呼応する。

3-3-2: 「死出の山」と「剣の山」

剣の山のイメージを死出の山に重ねてゆく動きは、図像からも確認できる。たとえば室町時代の向嶽寺本六道十王図を見てみよう。三途の川の岸辺に配された山には、剣のような鋭い岩先が描かれる(図42)。また、兵庫県馬場町本十三仏図や名古屋市長福寺本・愛知県稲沢市宝林寺本といった江戸時代に制作された六道十王図でも、三途の川のわきに剣の山をおき、鬼卒に責め立てられこの山を上らされる亡者を描く。三途の川という明らかに死後世界とこの世との境界的な領域に配されたこれらの剣の山が死出の山の機能を担っていることは疑う余地がない。

また東京個人蔵の15世紀²⁵⁾の往生要集絵巻では絵の冒頭、等活地獄の右端に『往生要集』本文にも詞書にも明確な対応箇所をもたない剣の山の情景が描かれる(図43)。ここには亡者を責め立てる鬼卒の姿もあり、『十王讃歎鈔』における死出の山の記述と重なる要素を備えている。しかも図像の配された箇所は絵巻の巻頭、絵巻の内容を死後における六道巡歴とみるならばまさしく死出の山のあるべき位置である。

さらに16世紀の奈良国立博物館本矢田地蔵毎月日絵は、それぞれの図像が何を示すか一々

に墨書を付す点で重要だが、ここでは「さんづのかわ」に先だって「しでの山」(図44)と「つるぎのやま」(図45)とが連続してほぼ同一の図像で示される。いずれもが獄卒が亡者を責め立てて登山をさせるという描写であり、図像の内容・相似性・配置のいずれをとっても両者が死後世界への入り口の山として混同されていたことがわかる。

しかし初期の六道十王図において、剣の山の図像は必ずしも死出の山として機能していたわけではなかった。13世紀の作例である極楽寺本六道絵では、この図像に「大叫喚」と記された短冊形が付され、この図像を八熱地獄の第5である大叫喚地獄として機能させようとしていたことがわかる⁽²⁶⁾ (図46)。そもそも剣の山によって地獄を表現することは、日本に限らずごく一般的なことである。図像としては、大陸においてはベゼクリク第8寺院本堂に描かれた9～10世紀の壁画六道図(図47)や、「剣山解体地獄」という道教じみた墨書を伴う京都・誓願寺本(図48)をはじめとする南宋末から元にかけての十王図の多くには、地獄の一場面として剣の山が登場するし、その影響を受けた日本の十王図にあっても状況は変わらない。また韓半島においても、1570年代後半の知恩院本地蔵本願経変相図⁽²⁷⁾に「刀山地獄」と金字で傍書された図像(図49)が描かれ、十王図の多くにも中国とはいささか画面構成の展開が異なるもののやはり剣の山はしばしば登場する。

こうしたいささか無頓着な剣の山図像の多用は、剣の山が死出の山のイメージとして受容されてゆく過程を追いにくくしているが、この過程とほぼ同時に進行していたと思われる、六道図像をめぐるもう一つの変化をこれと結び付けるとき、解明の糸口をつかむことができるようになる。

衆合地獄を代表する図像の一つに、刀葉樹の女の図像が挙げられる。

「またふたび獄卒、地獄の人を取って刀葉の林に置く。かの樹の頭を見れば、好き端正嚴飾の婦女あり。かくのごとく見已りて即ちかの樹に上るに、樹の葉、刀のごとくその身の肉を割き、次いでその筋を割く、かくのごとく一切の処を劈り割いて、すでに樹に上ることを得已りて、かの婦女を見れば、また地にあり。欲の媚びたる眼をもって上に罪人を看て、かくのごとき言をなす。「汝を思ふ因縁もて我この処に到れり。汝、いま何故ぞ来りて我に近づかざる。何ぞ我を抱かざる。」と。罪人見已りて、欲心熾盛にして、次第にまた下るに、刀葉上に向きて利きこと剃刀のごとし。前のごとく遍く一切の身分を割く。すでに地に到り已るに、かの婦女はまた樹の頭にあり。罪人見已りて、また樹に上る。」⁽²⁸⁾

樹上あるいは樹下より招き寄せる美女に誘われて樹を上り下りする亡者の体を、刀のように鋭く堅い葉が刻みさいなむというこの地獄の表現は、『往生要集』に説かれた地獄のうち

でも特によく知られたもので、日本人にとっておよそ内容的な誤解の生じがたいものである。現に13世紀の聖衆来迎寺本六道絵(図50)・禅林寺本十界図(図51/見取り図1-57)・極楽寺本六道絵(図52)・立本寺本法華經金字宝塔曼荼羅(図53)、延慶2年(1309)奉納の春日権現験記絵巻(図54)、14世紀の旧前田家本十王地獄図(図55・56/見取り図3-43・26)、16世紀の出光美術館本六道絵(図57/見取り図4-26)・長岳寺本六道十王図(図58/見取り図6-60)に描かれた図像はいずれもテキストに対する正確な理解を示している。ところがその一方で、東京個人蔵の15世紀の往生要集絵巻では、『往生要集』に由来する詞書をもちながらも、テキストから逸脱した図像が描かれる。

「又獄卒地獄の人をとらへきたりて、刀葉樹の中におきける。此林しのこずえをはるかにみあぐれば、容顔美麗にして、よそほひかざりたる女房あり。実もいにしへこひしかりし人也。うれしやとて其俣木にのぼれば、枝も木の葉も皆剣にて、身をきりさき骨をとをし筋をたつ。こはそもをそは(ろ?)しきとおもひながらも、業にひかれて猶こひしく剣をしのきて、こずえに上り、かの女房をみれば、また地にありて、なつかしげに媚をふくめる目もとにて木の上なる罪人を見て云けるは、われ汝を思ひし業により此所にきたりたり。汝今何とてわれに近づかざるや、いかにちぎりをこめざるやと、木のもとになまめきたり。男いよいよ愛念さかんにして又木の上よりをるとき、剣の木の葉は上に向ひて又一身をあまねくきりやぶり、つきつらぬかれて、すでに地にいたれば、かの女房又木末にあり。男こがれもだへて又木に上る。」²⁹⁾

詞書に見られるのは『往生要集』の記述同様、樹木としての明確なイメージだ。しかしわざわざ「衆合地獄」と記された題籤とともに描かれたその図像(図59)は、方々に伸びた枝と、女の坐る茂みのような場所とからそれが樹木を表現していることがわかるものの、樹の幹はあたかも山裾のような異様な裾広がりを見せ、全体の印象を樹というよりもむしろ山に近いものにしてしている。同じく15世紀の二尊院本十王図に描かれた類似の図像では、往生要集絵巻にわずかに残されていた樹木としてのイメージは完全に払拭され、美女が亡者を招き寄せる場がすっかり剣の山に転化してしまっている(図60)。

美女のあり所が刀葉樹から剣の山へと切り替えられたことの意味を考えねばなるまい。そもそも刀葉樹と剣の山はどのような意味上の類縁性を抱えているのだろうか。現存作例のいずれもが近世の作とされる熊野観心十界図では、刀葉樹と剣の山がともども描かれることが通例である。そこでは刀葉樹の図像は両婦地獄や石女地獄・血盆地獄と一群をなして愛欲および女性に関連したセクションを構成する。一方、剣の山の図像は老ノ坂と三途の川の間

挟まれ、死出の山として現世と他界との境界に関連した図像群の一翼を担っている。ところが30例以上を数える熊野観心十界図にあって唯一の例外として、16世紀に制作されたと推定され最も古様な構成を示す³⁰⁾六道珍皇寺旧本のみは両者を二つに分けず剣の山の女として一つの図像にあらわす(図61)。本来一組で扱われるべき三途の川と奪衣婆とが全く切り離されて配置されるなど、比較的図像同士の有機性に無頓着な構成の目立つ同本にあって、剣の山の女の置かれる位置が三途の川の手前ではないにしろ川辺であることは重要である。そこは彼岸と此岸との境界であると見てよい。刀葉樹ではなく「劔山」とははっきり短冊形を付したうえで、六道珍皇寺旧本はこの図像を死後世界への境界的位置に配しているのである。

おそらく剣の山をめぐる図像の展開は、山岳信仰美術との関連を抜きにしては語り得まい。立山曼荼羅は現存する作例がいずれも近世以降のものであるとはいえ、そうした意味では極めて示唆に富む存在である。立山曼荼羅においては剣の山は劔岳という現実の山として、立山連峰の最北端に描かれる。そしてこの劔岳の頂には、来迎寺本をはじめとして³¹⁾、端正嚴飾の女性がしばしば描かれる(図62)。刀葉樹の場合と同様ここでも亡者たちは彼女の方へ血みどろになりつつ登りゆくわけだが、その亡者の中には女性も混じっていることから、刀葉樹の場合のように端正嚴飾の女性が男性亡者の性欲を刺激する誘惑者として描かれているのではないことがわかる。それどころか相真坊A本では、彼女は別の峰に立つ盛装の男性(明らかに亡者ではない)とつつましやかに目を見交わしてすらいる(図63)。おそらく、彼女は立山という異界の北の境界にそびえる劔岳に鎮座する女神ではなかったか。現存する作例が少ないため他の山岳信仰において類似の事例があったかは定かではないが、立山信仰の母体となった白山信仰にあっては、白山曼荼羅に「劔之嶽」と短冊形の付された山岳が描かれており、類似の事例があった可能性を残している。

神を戴く剣の山を他界の境界に置くという構想は、六道十王図のうちにもみられる。滋賀県甲賀郡・長寿寺本六道十王図は、全10幅のうち第1幅と思われる幅に剣の山を描き、第2幅に三途の川を配す。この剣の山の頂には角髪を結った盛装の童子が立つ(図64)が、鬼卒に追い立てられて山を登る亡者たちは童子に対して一様に無関心であり、やはり彼が誘惑者ではないことがわかる。

刀葉樹そのものも境界的性格を担わされていたことも確認しておこう。刀葉樹は一般には衆合地獄の図像として知られているが、14世紀の水尾本六道十王図の左幅にみられる図像(図65/見取り図2-41)はそうした伝統をそのまま当てはめることを躊躇させる2点の特徴をもつ。その第1は図像の置かれた位置的な問題である。水尾本は地獄の図像を序列に即して配置することを原則としているが、もしこの刀葉樹が八大地獄の第3である衆合地獄を表す図像であるとするならば、現状のように第8である阿鼻地獄を描く左幅に置くよりは、むしろ

ろ右幅に描かれた第2である黒縄地獄の脇がふさわしい。もう1点は樹上の女性の扱われ方である。衆合地獄においては厳飾した美女がその容色の力によって罪人を樹上へ誘うとされるが、ここでは樹上の女性はただ朱袴を身につけるのみで、しかも自らも袴の裾を刀葉に裂かれ掌に傷を負っている（図66）。また、樹下より彼女の後に続こうとしているのは女性かあるいは稚児で、彼女の容色に惑わされる対象とは考えにくい（図66）。

考えられる一つの可能性としてはこの刀葉樹林を『往生要集』で阿鼻地獄に続いて記述される鉄設枳末梨林とする見方が挙げられる。

「鉄設枳末梨の林あり。かのもろもろの有情、舎宅を求めんが為に、便ちここに来り趣き、遂にその上に登る。これに登る時に当たって、一切の刺鋒、悉く廻りて下に向き、これを下らんと欲する時、一切の刺鋒、また廻りて上に向く。」⁽³²⁾

鉄設枳末梨林では衆合地獄の刀葉樹林とほぼ同じ責めが行われるが、罪人が木を上り下りする動機は容色美しい女性を追ってではなく自らの住処を求めてであり、その点で樹上あるいは樹下に誘惑者としての女性を必要としない。またこれは所属不定の一別処であり、左幅の阿鼻地獄の脇に描かれることも一応の説明がつく。

『往生要集』にも記述がある以上、この鉄設枳末梨林は典拠的には決して普及率の低いものではない。しかし刀葉樹林を鉄設枳末梨林として描いた例は現在のところ他に知られておらず、この同定には不安が残る。ただここでひとつ確実に言えることは、この図像が鉄設枳末梨林を表すものであるとしてもそのイメージの源泉は衆合地獄にあるということである。水尾本の刀葉樹が置かれる位置は、阿鼻地獄の脇であるとともに現世と他界との境界であるところの野辺の脇でもある。中世において衆合地獄の刀葉樹がしばしば剣の山とイメージ的に同一視される傾向があったこと、さらに剣の山はしばしば死出の山と同一視されていたことはすでに述べた通りだが、そうした一連の同一視の過程で、刀葉樹図像には死出の山としての剣の山のイメージが混入していったと思われる。おそらくは水尾本の刀葉樹も、死出の山的なイメージ、すなわち人間が死後に他界へと向かう境界的なイメージを担わされていたのではなかろうか。そうした目的があって刀葉樹は野辺のかたわらに置かれ、結果として衆合地獄的な要素が抹消されたとみてはどうだろうか。水尾本においては野辺が強力な磁場を形成しており、そのこともこの推測を裏付ける。

このようにみてゆくのなら、境界の山岳神を媒介として剣の山と刀葉樹とが融合し、死出の山の視覚的イメージ創出に影響を及ぼしたと考えることもあながち不可能ではあるまい。ただし、死出の山を視覚化してゆく過程は決して単線的なものではない。次項では死出の山

に影響を及ぼしたもう一つのファクターについて検討してみたい。

3-3-3: 「死出の山」と「おいのさか」

『地藏菩薩発心因縁十王経』の「死天山」に関する記述と長岳寺本六道十王図の描写とがよく一致することは先に指摘した通りである。長岳寺本の第1幅・第2幅には死出の旅路をあらわす図像が、両幅にまたがって描かれた峨々たる山を中心とした景観の中に充填され、山のふもとでは野辺の白骨に「三尺の杖」と「鞋一具を」添えられ(図68/見取り図6-1)、登り口では「奪魂鬼」「奪精鬼」そして死者を捕縛した「縛魄鬼」が「荆棘有る」「門関の樹下に至る」(図69/見取り図6-2)。

さてこの死天山には細々とした山道が巡らされているが、目をこらすならこの山路をゆく亡者の姿(見取り図6-4)が確認できる。ここで注目すべきは、山路を登りゆく亡者とともに、下りゆく亡者までもが描かれていることである。確かに、3人の鬼卒に牽きだてられた亡者が死天山に至り、死天山の南門をくぐって山路をゆくという経典の記述には、山を登るというニュアンスが感じられる。しかし山を下ることに関する記述は、『地藏菩薩発心因縁十王経』のどこにも存在しないのである。経典によれば亡者はこの後、十王のうち最初に審理を執り行う秦広王の王庁や「奈河津」すなわち三途の川などを巡歴するのだが、これらの場所と死天山との間の地理的關係は明示されない。したがってそれらの關係は長岳寺本が示すような、死天山をひと山越えて奈河津や十王庁に至るというものに特定され得まい。振り返ってみるなら、中国における十王の祖型の1人であった泰山府君は東嶽泰山に鎮座していたのだし、10世紀の敦煌本十王経図巻の挿図でも十王庁はしばしば山岳内にあるかのような描写がなされていた(図70)。そして何よりも、長岳寺本そのものが、全幅にわたって山岳的な景観を維持している。奈河津や十王庁は、あるいは死天山にそのまま続く山中にあったとしても、経典の記述との間に何の齟齬も生じないはずである。とするならば、そこを敢えて登って下りるとしたこの長岳寺の死天山のイメージには、『地藏菩薩発心因縁十王経』の記述以外にも源泉があるに違いない。

死出の山を、死後世界に入るために登り、そして下りねばならない山として捉え直してみよう。この発想に立つなら、人生の諸段階を象徴した山越え、いわゆる老ノ坂の表現と死出の山とは一つの範疇に括られる。老ノ坂を描いた現存最古の作例は15世紀に制作されたと思われる東京国立博物館本おいのさか図(図71)である。この老ノ坂を単独で描いた小幅は六道表現を全く含まない穏やかな作風を示すが、にもかかわらず高く切り立った山の形状や山頂手前で背後へ回り込んで隠れる山路の造作は長岳寺本の死天山と共通する。もちろん、死天山が死の向こうに存在するものであるのに対し、老ノ坂は死の手前に存在するものである

という違いはある。しかし16世紀の六道珍皇寺旧本（図72/見取り図7-4）をはじめとする熊野観心十界図にあって老ノ坂が三途の川へと連結されているのを目にするなら、死天山が奈河津へと連結される長岳寺本との類似を強く感じざるを得ない。とはいえ熊野観心十界図もやはり六道十王図ではないし、作例の現存状況を見る限り六道十王図よりも後発のジャンルであることも気にかかる。冥府へ至る前段階として人生の諸段階を配するという発想は、六道十王図の中である程度展開をたどることができるだろうか。

六道十王図の現存最古例である13世紀の禅林寺本十界図では、各図像を相互に関連づけて配置する意識は希薄だが、それでも悪道世界を中心とした地藏幅の地獄門（見取り図1-49）・三途の川（見取り図1-48）と現世を中心とした阿弥陀幅の人道死苦（見取り図1-15）とが、両幅併置されたときに隣り合うよう配慮される。しかもその死苦図像には、死者を地獄へと連行する火車（見取り図1-16）が描き添えられてさえいる。それはあたかも人道を、単なる六道の一つとして捉えるのではなく、三途の川を渡って死後世界へ向かう前段階として捉えているかのようである。

禅林寺本にわずかに遅れる極楽寺本六道絵では、この傾向は一層明瞭になる。人道は右幅右端に、下から順に生苦・病苦と老苦（一つの屋形に併置される）・死苦・野辺送り・不浄相の各図像が積み上げられるように配置され（図19）、さらに不浄相における死体の腐乱してゆく過程を右から左へと追ってゆくと、奪衣婆のいる三途の川へと至る¹³³。そこにはおそらく、人道の四苦と不浄相とを人生の諸段階として把握しようとする意識があったとみてよい。なるほど四苦は人道における苦の単なる列挙ともみえるが、それらを一連の継時的現象とみなすなら、まず生苦、続いて病苦あるいは老苦、最後に死苦といった具合に、人間がその生涯において順次経験してゆく諸段階でもあるわけだ。極楽寺本ではこの発想を強調するために、順序を特定し得ない病苦と老苦とを一つの屋形の中にまとめて描いたり、死苦の先に野辺送り・不浄相を延長として配したのである。

14世紀の水尾本六道十王図では右幅に人生の起点である生苦（図21/見取り図2-7）が配され、左幅に人生の終焉を示す死苦が老苦・病苦を脇に従えて配される（図22・23・24/見取り図2-27・28・26）。これはとりもなおさず人道における四苦を人生の諸段階と踏まえた配置とみてよい。そして八苦の残り四つも、現状では求不得苦と愛別離苦の二つまでしか確認できないものの、あばら家での窮乏生活として表現される求不得苦（図73/見取り図2-8）は、生苦と老病死苦との間に挿入され、幼い我が子を失った母親の悲しみとして表現される愛別離苦（図25/見取り図2-30）は、嬰兒の死体を伴うことから野辺に配され、人生の諸段階としての四苦を補完している。もちろん水尾本における人生の諸段階の右から左へという進行方向は、審判期日の推移からみた十王の配置の進行方向とも矛盾しない。不浄相はこうした一連の配

置の果てに死苦の左側に配され、死後に土へと還ってゆく肉体の表現として、現世における人生の諸段階の完全なる終結を表明する。そしてこの不浄相や愛別離苦が配された野辺は悪道世界と隣接し、地蔵に連れられて現世に蘇生する亡者の描写などによって現世と他界との境界としての機能を示している。

室町時代になると、六道十王図に老ノ坂そのものを描く作例が現れる。16世紀の和歌山・総持寺本六道十王図には、ごく小さく簡略なものではあるが、そして死後世界への導入としての機能を必ずしも果たしていないものの、老ノ坂であることが明らかな図像（図74/見取り図5-115）が描かれる。完本であれば少なくとも10幅はあったはずの零本が3幅現存するきりの状態では、これがどのようなプログラムの一環をなしていたのかを確言することは難しい。しかし総持寺本が先駆的に示した老ノ坂と六道十王図との結び付きは例外的な事例ではなかったとみえ、近世の六道十王図へと確実に受け継がれる。17世紀末の兵庫・松禅寺本六道十王図は第1幅に老ノ坂を配し（図75）、これが第2幅に描かれた三途の川へ至る導入となっている。

長岳寺本の死天山もこうした系譜の中に位置づけられるべきである。長岳寺本では葬送の場面と死天山とを描くのみで人道の苦相も不浄相も描かないが、先に述べた長岳寺本の死天山と「おいのさか図」の老ノ坂との形態的類似を考慮するなら、そして極楽寺本での人道の扱いを知るなら、葬送が不浄相、死天山の登り下りが人生の諸段階としての四苦と対応すると考えても不自然ではあるまい。そしてこのように考えてこそ、総持寺本において六道十王図に導入された老ノ坂が松禅寺本にみられるように死出の山としての機能を果たすに至った事情が理解できるのである。

3-4:境界的悪道

以上のように六道十王図では、野辺・川・山といったモチーフが結節となって現世と他界とを一連のめぐりわたりのうちに結び付けているが、この結び付きをより自然で滑らかなものとするために、さらにいくつものモチーフが現世と他界との境界をなす領域に配される場合がある。

その最も顕著な例は長岳寺本六道十王図であろう。長岳寺本においては第1・2幅にまたがる死天山を越え奈河津を渡った向こうには、まず第3・4幅にわたって餓鬼道（見取り図6-33～35）・畜生道（見取り図6-23～32）・阿修羅道（見取り図6-45）といった比較的軽微な悪道、または八大地獄のヒエラルキーから外れるために位置づけできない石女地獄（見取り図6-19）・血盆地獄（見取り図6-36）・両婦地獄（見取り図6-21）といった周辺的な地獄が配され、その後によりやく八大地獄が順次展開することとなる。長岳寺本は奈河津越えまでを

『地藏菩薩発心因縁十王経』に、そして阿修羅道と八大地獄とを『往生要集』に、それぞれ極めて忠実に依拠して絵画化しているが、その間に挿入された軽微な悪道や周辺的な地獄は、両テキストにそれぞれ依拠する図像同士が直接接続されることを回避するクッション材のような機能を担っているといえよう。

人生に見立てられた人道と悪道の代表としての地獄とが上下で2層をなす水尾本六道十王図にもまた、両者の結び付きを滑らかなものとするための図像が挟まれる。二つの層の間には、現世と死後世界との境界をなす奈河津や野辺といったモチーフのみならず、地獄道よりも悪業の軽微な餓鬼道（見取り図2-9～11）・畜生道（見取り図2-12～14）（そして失われた中幅には恐らく阿修羅道があったろう⁹⁴⁾）といった悪道にまつわる図像や、転生あるいは悪道からの救済を主題とした説話的なおもむきのある図像が配される。そしてこれらの図像の多くは、第2層あるいは第3層の各図像と親和性をもつように選択・配置される。例えば、地獄の釜が割れて亡者たちが蓮華化生を遂げて極楽へ向かう図像（図76/見取り図2-18）は黒縄地獄の左上に描かれあたかもその一部をなしているかのような趣をもち、畜生道は生苦の屋形の庭先に放たれた家畜として（図77/見取り図2-13）、あるいは屋形の住人の狩りの対象として（図78/見取り図2-14）描かれる。目連救母説話図像では、地獄での母との再会を経典どおり阿鼻地獄の上端に配置する。また不浄相をはじめとする野辺に集められた諸図像が老・病・死苦の描かれた屋形と連続する感覚のあることは先に指摘した通りである。地藏に手を引かれ野辺を目指す亡者の姿（図2/見取り図2-33）も、位置的にはその下に描かれた地獄を地藏の加護により脱し、彼の肉体の放置された野辺へ蘇生のために向かっているが如き風情である。

さて水尾本において奈河津・野辺といった境界的な色彩の濃厚な図像が現世と他界とを取り結ぶ結節点として機能していることは言うまでもないが、転生あるいは悪道からの救済を主題とした説話的なおもむきのある図像は単に境界的であるという点だけではなく、現世と他界とを往還するという点においてさらに積極的な意味をもつ。

例えば目連救母説話は母を訪ねて現世と他界を往還する目連の説話であり、かつ最終的な救済を目指して悪道から悪道へと転生する母の説話でもある。そしてそのような説話を図像化する際に、長大な説話の中から目連母子の出会いばかりが2場面選択されたことは注目に値する。すなわち母子の出会いの場面とは、目連の往還運動と母の悪道転生とが合流する場面だからである。このことは母子関係に相互的な情愛を指向する情緒上の伝統とともに、母子がそれぞれ転生し往還するという二つの移動的な要素に、この説話に対する水尾本の関心があったということを示している。

また、地藏に手を引かれ野辺を目指す亡者の図像（図2/見取り図2-33）も、何らかの靈験

記的な説話を背景にもつと思われる。ここでもそうした説話を図像化するにあたって個々の説話の差異が最も濃厚に現れるはずの主人公の生前の行いに関する場面や救済の瞬間に関する場面は選ばれず、蘇生説話にとってむしろ共通性の方が強い蘇生へのいざないの場面が選ばれていることに注目すべきである。このこともまた個々の説話の語り分けよりも蘇生説話全般がもつ現世と他界との往還という移動的な要素に、水尾本の関心が向けられていたことを示していよう。極論するならばここに配置される図像は、蘇生説話における蘇生へのいざないの場面であればどの説話でもかまわないのかもしれない。同じことは地獄の釜が割れて罪人が往生する図像についても言えよう。そしてこちらの図像については、典拠がいかに多様であろうとも図樣的にはさして変わり映えしないことが、聖衆来迎寺本（図79/見取り図1-45）や極楽寺本（図80）などで確認できる⁽³⁵⁾。さらに説話的な背景をもつとしてよいかは微妙であるが、奈河橋を渡る人々の図像もこうした往還のイメージをもつ。すなわち水尾本において現世と地獄とは、両者を親和的に結び付けるのみならず両者間の往還を積極的に誘導する諸図像によって、強く関連づけられていたと思われる。

4:六道図像の構成

大きく区分するなら六道十王図は三つの部分の組み合わせによって成り立っているといっ
てよい。すなわち十王の王庁に関する部分、現世での人生に関する部分、他界巡歴に関する部分、の三つである。それらはそれぞれ十王齋日として規定された3年間、人生の期間としての数十年間、悪道での贖罪に費やされる極端に長い時間と、時間の長さの感覚を異にする世界である。以下では六道十王図にとって最も重要な問題であった、こうした三つの世界の何と何をどう組み合わせるかということの、歴史的な展開を追ってみたい。

4-1:並行する十王と悪道

六道十王図の先駆的形態をなすものは、10世紀の敦煌本十王経図巻あるいは中国及び日本の十幅本十王図といった最も基本的な十王図の形式に残存する。十幅本十王図では十王が各幅の上部の同じ位置に配され、全幅を並べると十王が横並びに一列になり、その下に特に順序はないが地獄⁽³⁶⁾あるいはそれに類する責め苦の情景が並ぶ。十王経図巻も基本的には同様の構成をとるが、『預修十王生七経』のテキストと一具である場合が多いため、テキストに基づく描写が地獄⁽³⁷⁾や責め苦を描く下部の描写に方向性を与える。十王経図巻ではさらに十王のすべてが登場し終えた果てに地藏による破地獄の様が必ず添えられており、六道十王図の展開される他界観の萌芽のようなものもうかがえる。

十幅本十王図や十王経図巻では、現世の描写を欠いた十王と悪道のみで2層構造をとる。六道十王図の構造はいずれの場合もこの基本構造に何かを挿入したり付加することによって構成されるとみてよい。

4-2:直列する現世と悪道、それらに並行する十王

4-2-1: 絵画での展開

こうした環境の下で六道十王図の構造がどのような傾向をもって展開していったかは、それぞれ13世紀の禅林寺本十界図・極楽寺本六道絵と16世紀末葉の長岳寺本とをみることでおおよそ確認できる。

2幅からなる禅林寺本は、現世を中心とした阿弥陀幅と地獄を中心とした地藏幅とが対比的に扱われる。ただ、既に述べたように両幅は死苦の場面と奈河津の場面とで連結される構成をとり、不明瞭ながらも現世と悪道が往還可能な構造となっている。十王は地藏を取り巻くように地獄の上方に配され、悪道と十王との関係は後の六道十王図に近いが、十王は斎日順に横並びにはされずその継時的序列はやはり不明瞭である。

極楽寺本は全3幅のほとんどを悪道と十幅本十王図に通例の十王とを2層に並列させる構成をとっているが、既に述べたように右幅の右端に下から上へと人生の諸段階としての四苦・不浄相がいわゆる現世として挿入され、奈河津によって悪道と連結している。左右に直列された現世と悪道との間に明確な分離帯は与えられないものの、長岳寺本で完成するところの現世と悪道とが直列しその上を十王が並行して走るという構造の原型はこの極楽寺本において形成されたといつてよい。

出光美術館本では第1幅に死出の山（見取り図4-7）と奈河橋（図37/見取り図4-8）を配し、第6幅で阿弥陀三尊の来迎（見取り図4-69）が現れる。第2幅から第5幅までの継時性は不明瞭ながら、このように悪道の入り口と出口を全幅の左右両端に用意すること、そして悪道を巡った果てに阿弥陀による救済が用意されていることは、長岳寺本のプランを先取りする要素として注目される。

長岳寺本においてはこの構造がさらに明確化する。全9幅からなる長岳寺本は第2幅までに荼毘の情景（見取り図6-1）や人生の諸段階を思わせる死天山が描かれ、これが現世のようなものを形成する。そして第4幅から本格的に『往生要集』に基づく八大地獄が向かって右から左へと順次降下してゆくように描かれ、悪道世界を形成する。両者の間にはまず奈河津（見取り図6-8）が、それに引き続いて餓鬼道（見取り図6-33）・畜生道（見取り図6-23～32）・阿修羅道（見取り図6-45）の諸図像が挿入され、分離帯を形成する。その際この分離帯には『往生要集』に拠らない両婦地獄（見取り図6-21）・石女地獄（見取り図6-19）・血盆

地獄（見取り図6-36）の図像が混じり、八大地獄を描く部分との親和性を保つ。また奈河津は、経典の記述を無視して秦広王庁に先立つかのように配されていることから、現世と他界とを隔てる分離帯として機能していたことは間違いない。十王は、奈河津を越えたあたりから八大地獄が終結するまでの間に、向かって右から左へと斎日の順序に沿って一列にそれらの上方に配置される。地獄を過ぎると再び橋の架けられた川が現れ、天人や阿弥陀聖衆の来迎に出会い、最終幅上方に阿弥陀浄土が遠望される。

長岳寺本は図像の細部において経典の記述に対する極端なきまじめさを発揮する⁽³⁸⁾が、図像を構成する際にはこの忠実さは大胆に破られる。例えば『地藏菩薩発心因縁十王経』で秦広王庁と初江王庁との間に位置すると記述された奈河津が、長岳寺本において秦広王庁に先立って描かれていることは既に述べたとおりである。しかしより根源的なテキストとの構成上の齟齬は『往生要集』との関係のうちに立ち現れる。

『往生要集』が記述する六道世界は、地獄の個別描写については、地獄こそ八大地獄の第1である等活地獄から始まって最悪処である阿鼻地獄へと降下しつつ語り進む構造をとるものの、全体としては最底辺の地獄に始まり、餓鬼・畜生・阿修羅・人・天と上昇して語り進む、ついにはこれら穢土を離れ浄土へ到達する構造をとる。すなわち、大観的に見るならば『往生要集』の叙述順序は底辺からの上昇を基本としており、地獄と浄土とは叙述の冒頭と末尾に切り離され対極的な位置で記述されることになる。長岳寺本の図像の読み取り順序は、十王の配列が示しているとおりに画面向かって右から左へと進むものである。これが死後世界の旅路として読み解かれるべきものであることは既に述べた。この長岳寺本が提示する六道世界は、『往生要集』の世界を転倒させたものといってよい。すなわちまず人道を経験し終え、次いで餓鬼・畜生・阿修羅といった業の軽い悪道を経た後に地獄を等活地獄から阿鼻地獄へと向かう、全体として降下してゆく構造をとるのである。そして『往生要集』とのさらに決定的な違いは、この下降の果ての阿鼻地獄を経過すると一転、浄土からの阿弥陀聖衆の来迎（天道の描写もこの情景に全く紛れてしまっている）と出会うことだろう。ここでは阿鼻地獄と浄土とが、まさに隣り合う。

4-2-2: テキストでの展開

長岳寺本に代表される六道十王図の図像構成の展開は、テキストにおいても同様のものが確認できる。『地藏菩薩発心因縁十王経』にみられる構成は、人間の死後、死天山の道行きから説き起こし、十王の裁きを順次記述し、最後には迷妄を解くために釈迦が説法して終わるというものだった。これに対し、『十王讃歎鈔』では十王を順次めぐるときの地理的な情報がかかなり増補され、十王に関する記述を終えた後で、五道転輪王に地獄の構成および等活地

獄と無間地獄に関する詳しい解説をさせている。このように『十王讚歎鈔』では『地藏菩薩発心因縁十王経』にみられた釈迦による説法という枠組みは既に取り払われ、構成の主眼が死後の道行きを疑似体験させる方向に向かっていることが分かる。そしてこの道行きに地獄を加えたこと、しかも等活地獄と無間地獄という八大地獄の第1と第8を詳しく描写し、地獄道を下ってゆく趣を加えたことは、六道十王図の基本要素である悪道降下と対応する。

『十王讚嘆修善鈔』および『十王讚歎修善鈔図絵』ではこの地獄に関する描写の後に、さらに阿弥陀の来迎に関する描写を増補する。この増補部分では、まず来迎の根拠である阿弥陀の四八大願が示され、次いでその大願によって墮地獄から一転して極楽へ迎えられることになった人物の説話、念仏行者への阿弥陀の来迎と浄土の様子が連想形式によって並べられる。これらの記述は基本的には相互に独立した関係にあるが、地獄の描写以降をうっかり読めば、読者は次のような一連のストーリーを見いだしてしまうに違いない。すなわち五道転輪王の裁判を終え、地獄を下って行く亡者がいたが、阿弥陀が大願を発し、亡者を地獄から救済し、阿弥陀聖衆の来迎によって、浄土へ迎え入れられた、という一連のストーリーである。しかもどうやらテキストの作者自身、読者にそうした錯覚を期待していた可能性が強い。というのも例えば『十王讚嘆修善鈔』阿弥陀来迎（極楽の情景）のくだりで、極楽における生活のすばらしさに感嘆した行者が、

「昔炎魔の庁庭に禁られて、鎮に呵嘖の語を聞て、陳方舌を巻し悲、今は弥陀の宝前に跪きて、親子憐愍の語ひを蒙て、歓喜身に余悦ひ今情思比に何計の違そや」（下27ウ）

と独白する⁽³⁹⁾のだが、「昔炎魔の庁庭に禁られて」と彼が言うような事実はこのテキストには記されていないのである。これは明らかに本来それぞれ独立して描写されたこのテキストの末尾の部分、全体を通して一連の過程として錯覚させようとする、テキスト作者のアクロバティックな作為を示したものと言えよう。

思うに十王思想にあっては十王による裁判は亡者の六道転生に先行し、六道思想にあっては六道は亡者がそのうちのいずれか一つに転生すべき所であったはずである。しかしこのテキストの作者は十王の裁判に並行して、複数の地獄を経て極楽へと亡者に六道を巡りわたらせようという意図をもっていただと思われる。そうした作者の意図と矛盾する『地藏菩薩発心因縁十王経』を前提としたうえでその意図を実現しようとするれば、当然このように前後の因果関係を明示せず配列順序によって暗示するにとどめるという手法に頼らざるを得なかっただろう。『十王讚嘆修善鈔』や『十王讚歎修善鈔図絵』の作者は、十王思想における『地藏菩薩発心因縁十王経』の権威を利用しつつ、あらたな他界観を構築しようとしていたとみて

よかろう。

彼らが構築しようとしていた他界観は近世の六道十王図に通じる。16世紀の出光美術館本六道絵では十王の裁判と並行して六道の情景が描かれ、最後の第6幅に阿弥陀来迎が描かれ、六道巡りをした亡者が最終的に阿弥陀によって救済されたかのような印象を与える構成をとる。しかしここでも注意深くみると、阿弥陀の来迎を受けているのは念仏行者であり、亡者ではない(図84/見取り図4-70)。すなわち、出光美術館本にあっても『十王讚嘆修善鈔』や『十王讚歎修善鈔図絵』と同様に、悪道をめぐりわたった後に極楽へと向かう図式を関連づけたい図像同士の併置という形で辛うじて実現しているのである。16世紀末に制作された長岳寺本六道十王図ではこの構造はもっと積極的に主張される。長岳寺本では死後の悪道めぐりが明確に示され、阿弥陀の来迎を受けるのも念仏行者ではなく亡者となり、もはやこの流れはいかなる隠蔽をも伴わない明白なものとして提示されている。

4-2-3: 山中他界観との関係

こうした六道十王図の構造は、おそらく山中他界観と密接な関係を持っていると思われる。ことに長岳寺本にみられる他界の構造は、立山信仰にみられるような山岳信仰が示す山中他界観と類似性が強い。

長岳寺本に地獄間を結ぶ通路が描かれていることは先に述べたとおりである。悪道をめぐりわたる亡者のために便宜を図るかのようなこの通路は、亡者に滅罪の業苦を課す場であるはずの悪道の理念と矛盾する。しかし同じような通路は、立山における山中他界観を表した立山曼荼羅にも共通して描かれる(図85)。こうした通路は、制作時期が17世紀に溯る可能性を有し現存最古の立山曼荼羅の一つである坪井龍童氏本にすでにみられ、そこでも階段状の通路は山中に複雑に張り巡らされる。立山信仰をはじめとする山岳信仰にあっては、地獄などの悪道はそのまま現実の山中に存在するとされる。信徒が山中の悪道を巡歴するとなれば、教団が山中に通路を開いたとしても不思議はない。

しかも山岳信仰において入峯修行と呼ばれる宗教儀礼での六道めぐりは、まさに長岳寺本とよく符合する。その最も一般的な形式では、修行者はひとたび擬死し、滅罪をなしつつ山中の悪道世界を降下してゆき、阿鼻地獄での修行を終えると山中の他界を脱し再生する。そして滅罪を終えた修行者はやがて訪れる真の臨終において浄土へ往生する資格を得るのである。立山曼荼羅の諸本を見るとこの入山に先立って越えるべき川の存在が確認できるし、また芦峯寺系の立山曼荼羅に描かれたもう一つの擬死再生儀礼である布橋灌頂(図86)でも擬死と再生に際して渡るべき川と橋の機能は特に強調されている。この、橋を渡り参入した悪道を順次降下し、阿鼻地獄を経験した後に再び橋を渡り悪道を脱し、次いで浄土へと往生す

るという構造は、長岳寺本でみた構造そのままである。しかも長岳寺本においても悪道は山岳の景観の中に展開されている。

わずかな、しかも近世以降の絵画資料から問題を源流に溯らせたり普遍化することは危険だが、長岳寺本に至る六道十王図の示す悪道めぐりの後の極楽往生という図式には、山岳信仰が連綿と培ってきた他界観の陰が色濃く投影されているのではあるまいか。山岳信仰における他界観と長岳寺本における他界観とに共通する構造は、その後も兵庫・松禅寺本十界図⁴⁰⁾などの江戸時代の六道十王図において概念がさらに単純化された形で継承されてゆくのである。

4-3: 並行する十王・現世・悪道

六道十王図の構造として最も普及したものは、現世と悪道・浄土が直列しそれらに十王が並行するというものだった。しかしそれは唯一の構造ではなく、六道十王図の発展史の中で別の可能性が試みられることもあった。例えば14世紀の水尾本六道十王図においては現世と悪道とは直列しない。

水尾本は中幅を欠き左右2幅のみが現存するに過ぎないが、それでも全体の図像構成はおおよそ復元可能である。水尾本は全3幅を通し、最上層に画面向かって右から斎日の順に即して十王を配する。この十王との間を霞によって明確に区切られてその下の層には人道図像によって構成された現世が描かれる。右幅の画面向かって右端には他界との境界である奈河津が描かれ、そのすぐ左に生苦図像によって人間の誕生が描かれる。ここを起点として現世もまた右から左へと展開し、左幅では人間の死が描かれ、他界との境界である野辺へと続いて、この層も終結する。餓鬼道や畜生道（そしておそらく阿修羅道）を間に挟んでこの層の下に展開するのは地獄道の層であり、やはり画面向かって右から左へという順序で地獄を降下してゆくように図像が配置される。

水尾本の構成がもつ独自性は十王・現世・悪道の3層がすべて並行し、かつ第2層と第3層とが積極的に往還するところにある。こうした構造は果たして単なる一変種に過ぎないのだろうか。

ここで我々は三つの層がそれぞれどのような意味を担っているのかを考えてみるべきだろう。十王の層は以下の層に対しての支配権を握る層であり、衆生の転生先として想定し得ないという意味において以下の層とは厳然と区別される。そこでは図像は斎日という時間軸に沿って構成される。現世の層では、諸図像は人間の生涯という時間軸に沿って構成される。悪道の層では、悪道降下の道行きが時間軸の機能を果たし、それに沿って図像が構成される。これら三つの層がそれぞれ有する時間軸は、相互の対応関係が明確でなく、その組み合わせ

の可能性は唯一ではない。ことに現世と悪道との組み合わせについては、少なくとも二つの大きな可能性が考えられる。

可能性の一は、現世の層において生涯を終えた人間が悪道の層での悪道巡歴へと赴くというものである。これは直列型の組み合わせで、人間は死後悪道を巡歴した果てに善処へ赴くのだという、長岳寺本と同様の発想に連なるものである。現に水尾本における善処である可能性の強い天道は左幅の左端に配され、地獄を降下した果てに目指すべき位置にあるとも解釈できる。

可能性の二は、現世の層と悪道の層とを遺族の世界と死者の世界とに当てはめるものである。死者が悪道をさまよう間にも、遺族には遺族の人生が存在する。現世の層の位置は悪道をさまよう死者を十王にとりなすのにふさわしい位置であり、現世を生きる人間に対しこの位置関係こそが供養を通じての死者の救済を呼びかけていると解釈することもできよう。人生のあるいは悪道巡歴の、さまざまな段階での相互の往還を可能にするという分離帯の性格も、死者と生者との並行関係を強調するものである。

いずれも妥当なこれら二つの可能性は相互に排除し合う性質のものではあるまい。死者が悪道を巡歴する今まさに人生を送る遺族もまた、やがて悪道を巡歴する運命にあるが、そのときには彼らの遺族が人生を送っていく。悪道の層は死せる父母の現在であると同時に自らの未来でもある。こうした重層性は供養の重要性を理解させる上で極めて効果的であつたろう。すなわち、いずれ自らもそうなる運命であるがゆえに生者は死者を供養しなければならないのである。そしてこの発想は鎌倉時代の『十王讚歎鈔』から江戸時代の『十王讚歎修善鈔図絵』に至るテキストが継続的に増幅してきた二つの内容、孝道の称揚と悪道での苦しみの強調とに合致する。孝道の称揚は遺族に供養の必要性を理解させ、悪道での苦しみの強調は当然自らの将来への不安を生じさせる。

4-4: 回転する現世と悪道

十王・現世・悪道の3要素を完備しないものの六道十王図の構造を考えるうえで看過できないものに熊野観心十界図(図87)が挙げられる。熊野観心十界図は厳密には六道十王図ではないが、人間の生涯と六道世界とを描き、さらに十王とまではゆかぬものの審判者としての閻魔王を組み込んでおり、六道十王図にかなり近似した構造をなしていることが分かる⁽⁴¹⁾。この熊野観心十界図の構造において最も注目すべきことは、現世と悪道とが両端で結び付き、一個の円環を形成していることである。現世と他界とがそれぞれ一日の半ばを占める昼と夜のように入れ替わるこの構造は、現世と他界とが我々の身をおく全世界のそれぞれ半ばであることを示している。そしてこの円環構造は水尾本の構造に通じる。すなわち水尾本にあっ

でも現世と悪道の左端は熊野観心十界図と同様の野辺によって結び付けられ、右端もやはり境界性の濃厚な奈河津によって結び付けられ、全体として一種の円環をなしているからである。ただし水尾本の十王がこの円環から分離され一種超然としているのに対し、熊野観心十界図の間魔王は現世から悪道への移行部に結節点のように配され、生涯を終えた人間がどのような世界に転生するかがこの王の審判如何によって決定されることを暗示し、円環構造にはるかに積極的に関与する。

5:むすび

以上、六道十王図を中心とした日本の他界観を表明した絵画について、そこに描かれた個別のモチーフと図像構成との歴史的展開を確認してきた。

教義的に正確な六道観によるなら六道は、衆生の死後に次の転生先として放射状に現れる六つの選択肢であったはずだ。そして阿弥陀浄土を目指そうとするならそれら選択肢とは別のベクトルを模索する必要があった。しかしこの確認作業によって立ち現れた六道は、ひと繋がりに連なるもので、選択肢の機能を果たしているとは言い難い。この六道は（たとえそれが円環をなそうとも）巡りわたるべき一筋の道であり、救済と浄土はまさにこの道の先に用意されていた。この「巡りわたる六道」を支えるために、六道十王図は目連救母説話をはじめとする説話的な要素を積極的に導入したり、他界の境界をなすモチーフのリアリティーを獲得するためのさまざまな工夫が試みられた。

六道十王図に見られるこうした他界観を、誤謬と判断してはなるまい。自己の死後を見定める思索は、常に深刻であったに違いない。日本人にとってこの思索は仏教伝来以前から存在したであろうし、その後もさまざまな宗教環境のうちで継続されていたはずだ。そのようにしてさまざま蓄積された思索を、その権威と体系性において別格であった仏教の文脈といかにすり合わせるかが、13世紀以来の六道十王図の最大の課題だったのではあるまいか。長岳寺本六道十王図と一連の熊野観心十界図こそは、この課題に対する日本人の結論であったと言えよう。

《脚 注》

- (1) 『大正新脩大蔵経』84巻pp. 33-90。
- (2) 蔵経書院版『卍続蔵経』第150冊pp. 769-776。撰述者は四川省成都の慈恩寺沙門蔵川とあるが、現行のテキストには和語も交じっており近世既に日本撰述の偽経とする説が有力であった。真鍋広済『地藏菩薩の研究』（1960年 三密堂）p. 129によれば、平安時代最末期の日本で成立した可能性が高いという。ただ

し川口久雄『山岳まんだらの世界』(1987年 名著出版) p.175によれば、敦煌本『預修十王生七経』図巻の一部に『地藏菩薩発心因縁十王経』の記述を前提にした描写が見られるため、中国において『預修十王生七経』を増補したものが原テキストとして存在していたのではないかともいう。

- (3) この間の事情については、梶谷亮治「日本における十王図の成立と展開」(『仏教芸術』97号所収 1974年)に詳しい。
- (4) 用語の初出は鷹巣純「目連救母説話図像と六道十王図」(『仏教芸術』203号 1992年)を参照されたい。
- (5) 『昭和定本日蓮聖人遺文』第3巻(1954年 総本山身延久遠寺)で三宝寺蔵本が活字化されている。以下、本論で『十王讚歎鈔』に関して引用・言及する場合はすべてこれを典拠とする。
- (6) 国会図書館に享保6年(1716)刊の2巻本の版本が所蔵されている。以下、本論で『十王讚嘆修善鈔』に関して引用・言及する場合はすべてこれを典拠とする。
- (7) 筆者架蔵中に嘉永6年(1853)再彫の3巻本の版本がある。以下、本論で『十王讚歎修善鈔図絵』に関して引用・言及する場合はすべてこれを典拠とする。
- (8) 各テキストにみられる宗門観の分析については鷹巣純「『十王讚歎鈔』系諸本と六道十王図」(『東海仏教』42輯所収 1997年)第1章第4節に詳述した。
- (9) これら3点はいずれも六道十王図の基本構造であるところの、死後の悪道めぐりを経て浄土へ至る、という仕組を読者に理解させるべく機能する。4-2-2を参照のこと。
- (10) 『十王讚歎修善鈔図絵』に、制作者も分からない地獄の釜が果たして実在するのかという問答説話が出ているが、その実在の証拠としてこの郭巨が掘り当てた金の釜が実在することが挙げられている。郭巨の釜が実在するかの検証もないこの証明は暴論と言わざるを得ないが、地獄の釜と郭巨の釜というとりあわせが生まれたきっかけは、あるいは六道十王図にしばしば郭巨の釜が描かれ、人々が両者を一緒にみる機会が多かったことに由来しているのかも知れない。出光美術館本でも郭巨はまさに金の釜を掘り当てたところで、土中から釜が半ばのぞいている様子が描かれるが、その一方で第3幅では観音の法力によって炸裂する地獄の釜が描かれている。
- (11) 菅村亨「極楽寺本『六道絵』について」(『仏教芸術』175号所収 1987年)によれば他に後述する目連救母説話と内容不明の説話一種が図像化される。極楽

寺本に採り上げられた五つの説話はいずれも蘇生説話であり厳密な意味では転生説話とは異なるが、蘇生説話とは悪業の結果悪道へ堕ちるべきところを救われて蘇生する人々の説話であり、悪業が人間を悪道に導くという根幹部分においてふたつの説話類型は共通する。そして本論で採り上げた三つのテキストや六道十王図においては、こうしたある世界から別の世界への移動という観念こそが重要であったと思われる

- (12) 六道十王図におけるこの図像の機能については鷹巣純「目連救母説話図像と六道十王図」（『仏教芸術』203号 1992年）で考察した。
- (13) 『昭和定本日蓮聖人遺文』第三巻（1954年 総本山身延久遠寺）p.1967。
- (14) 極楽寺本のこうした構造については菅村亨「極楽寺本『六道絵』について」（『仏教芸術』175号 1987年）に最初の萌芽的な指摘がある。鷹巣純 「めぐりわたる悪道—長岳寺本六道十王図の図像をめぐって—」（『仏教芸術』211号 1993年）を参照のこと。
- (15) 源信が唱えた六道思想にあっては天道ですら厭離の対象に過ぎないとされていたが、現存する鎌倉時代以降の六道美術はそうした規定から逸脱する方向で天道に関するイメージを展開させてきた。聖衆来迎寺本では天道幅とは別に優婆塞戒経所説念仏功德図幅において天道が採り上げられる。そこでは念仏の功德によって天道へ転生する主人公が語られ、天道が理想的な善処として扱われる。もちろんこの幅の典拠となった説話はそれ自体『往生要集』にあるものだが、同様の態度は極楽寺本における目連救母説話図像にもみられる。目連救母説話図像は六道十王図が特に好んで画中に取り込んだ説話である。極楽寺本が依拠したと思われる『目連救母経』によればこの説話は悪道から救済された目連の母親が最終的な救済を受けて赴く善処をやはり天道と設定しており、その昇天のありさまは実際に極楽寺本に図像化されている。これら鎌倉時代の作例とは別に、室町時代に至ると説話とは無縁に天道を善処とするイメージが六道美術に現れる。たとえば二尊院本十王図(15C)の太山王幅では二つの鳥居をくぐり善処としての天道へ赴く女性の図像(図33)がみられる。さらに室町時代末期から江戸時代初期にかけての出光美術館本(見取り図4-68)や長岳寺本(見取り図6-99)ではおそらく天道を意識したと思われる図像が数人の飛天によって表現されるが、それらはいずれも阿弥陀の来迎と隣接して描かれ、この段階に至って天のイメージと阿弥陀浄土のイメージとが混然とした状況を呈したことが分かる。

- (16) 蔵経書院版『卍統蔵経』第150冊p. 770。以下、『地藏菩薩発心因縁十王経』の書き下しには『国訳一切経』印度撰述部大集部5所収のものを参考にする。
- (17) 「二七日亡人奈河を渡る。千群万隊江波を渉る。引路の牛頭は肩に棒を挟み、行くことを催す。鬼卒は手に叉を撃す。」(蔵経書院版『卍統蔵経』第150冊p. 780)
- (18) 例外としては東寺本預修十王生七経図巻が挙げられるが、これは大陸の十王経図巻の構成に倣ったためとみてよい。
- (19) 梶谷亮治「日本における十王図の成立と展開」(『仏教芸術』97号所収。1974年)は、長久年間(1040~1044)成立の『本朝法華験記』第70を引いて、日本では十王信仰流行以前に三途の川と奪衣婆が知られ、冥土へ入る以前の情景として理解されていたことを指摘している。

「遙に冥途に向ひ、人間の境を隔つる深幽の山、陰難の高峰を超ゆ。其の途遼遠にして鳥声を聞かず、僅かに鬼神、暴悪の類あり。深山を過ぎ已て大流河あり、広深にして怖畏すべし。其の河の北の岸に一の嫗鬼あり、其の形は醜陋にして、大樹の下に住す。其の樹枝に百千種の衣を懸けたり。」『国訳一切経 和漢撰述部』史伝部24(1938年 大東出版社) p. 196

- (20) 彼らは一様に正装しており、半裸のほかの亡者と区別される。ことにペリオ将来の2870番と4523番の二つの敦煌本十王経図巻では、渡橋者は自らの作善を証拠だてる画卷や仏像を抱えており、彼らが仏道に相応の貢献をした人物であることがわかる。
- (21) 例えば『今昔物語』巻17に収められた地藏による悪道救済説話はいずれもが地藏を「小僧」の姿として描写している。
- (22) 卍統蔵経、国訳一切経は共に「塊」とするが文意が通じない。天和3年(1681)版の『仏説十王経直談』巻5に従う。
- (23) 蔵経書院版『卍統蔵経』第150冊pp. 769-770。
- (24) 『昭和定本 日蓮聖人遺文』第3巻pp. 1968-1969。
- (25) 東京個人蔵往生要集絵巻はこれまで15世紀に制作されたとする説が定説となっていたが、ごく最近刊行された西田直樹『『往生要集絵巻』詞章と絵の研究』(2000年 和泉書院)は1631年から1663年の間にこの絵巻が制作されたことを論証しているという。本稿入稿に間に合わず未読ではあるが重要な異見であるので紹介しておく。

- (26) ただし大叫喚地獄の情景として剣の山を描写するテキストを私は確認していない。極楽寺本にはこうしたテキストとの齟齬を感じさせる表現がいくつか存在する。
- (27) 西上実「地藏本願経变相図 知恩院蔵」(『学叢』5号所収。1983年 京都国立博物館)にカラー図版と詳細な作品解説がある。
- (28) 『往生要集』巻上 大文第1 (『大正新脩大蔵経』84巻p.34)。以下、『往生要集』の書き下しは石田瑞麿訳注『往生要集』上巻(1992年 岩波文庫)を参考にする。
- (29) 宮次男「和字絵入往生要集について」(『調査研究報告』第12号 1991年国文学研究資料館文献資料部)所載の翻刻に基づき、カタカナをひらがなに改め適宜濁点を加え一部句読点を省略した。
- (30) 展覧会図録『中世庶民信仰の絵画 -参詣曼荼羅・地獄絵・お伽草子-』(1993年 松濤美術館)の作品解説にみられる「本図の穏やかな賦彩や的確な形態の把握は、観心十界図の中でも比較的早期の制作を示すと考えられるが、他の作例と比べると、人生の階段が山道であらわされ、鳥居の数が少なく、日月が雲に乗らないなど細部に違いが見られる。これらは観心十界図の図様が固定化する以前の作例であることを示すものであろう。」(p.83)といった見解が美術史研究者の間では最も有力である。ただし歴史学の黒田日出男「熊野観心十界曼荼羅の宇宙」(『大系 仏教と日本人 8 性と身分』所収 1989年 春秋社)が「形成途上の構図・構成をとりながら、描写されている子どもなどの人物図像からみて、その制作年代は比較的新しい」(p.216)と発言するように、歴史学・民俗学の分野では異論もある。
- (31) 他に大徳寺本・坪井龍童氏本・相真坊A本・大江寺本など。
- (32) 『往生要集』巻上 大文第1 (『大正新脩大蔵経』84巻p.36)。
- (33) 冥界へ入る以前の情景として極楽寺本に「死→三途の川→十王の前」という図式が存在することは、菅村亨「極楽寺本『六道絵』について」(『仏教芸術』175号。1987年 毎日新聞社)で既に指摘されている。
- (34) 描かれた十王の配分のされ方から考えるに水尾本が本来3幅からなっていたことは間違いない。人道と地獄が二つの層をなしその間に軽微な悪道が挟まれる水尾本において、その現存幅で描かれていない人道は苦相の五陰盛苦と怨憎会苦である。これらを組み合わせる場合、禅林寺本(見取り図1-19・20)や出光美術館本(見取り図4-72・76)のように家屋の火災と闘争によって表現される可能性が高い。一方軽微な悪道としても現存幅に描かれていないのは阿修羅道

であり、これは阿修羅と帝釈天との闘争として描かれることが一般的である。予想される五陰盛苦と怨憎会苦そして阿修羅道の図様はすべて破壊と闘争という共通の印象を抱えており、画面印象の一貫性を念頭に中幅を描こうとするなら、これら三つのモチーフを中心に構成することが最も妥当だろう。

- (35) 地獄の釜が割れて罪人が往生するものとしては、聖衆来迎寺本は『優婆塞戒經』に基づき、極楽寺本は『三宝感応要略録』あるいは『私聚百因縁集』に基づくが、図様の面ではその図像のみによって説話を特定する要素を欠く。
- (36) 南宋で制作された十幅本十王図の一つである京都・誓願寺本十王図の責め苦表現には「鉄磨地獄」「拔舌犁耕地獄」「銅柱鉄丸地獄」「斛秤不平地獄」「火車火輪地獄」「業鏡照罪地獄」「刀山劍峰地獄」「大寒大熱地獄」といった地獄名が添えられており、当時の中国においてこれらが地獄として認識されていたことがわかる。またおそらく共に元代まで下るとされる旧森村家（現奈良国立博物館）本十王図と西教寺本十王図の十王の下に描かれた風景には、獄を思わせる城壁が巡らされたものもあり、やはり地獄として描かれただろうことを推測させる。
- (37) ペリオ将来2003番の十王経図巻では閻魔王の場面に、城壁で囲まれた地獄が明らかにそれとわかる形で描かれる。
- (38) 例えば第4幅の阿修羅道図像（図81/見取り図6-45）では阿修羅と帝釈天との間で繰り広げられる戦いを描くことが通例だが、長岳寺本では帝釈天を描かない。長岳寺本が描くのはむしろ阿修羅と雷神・諸天との戦いである。日月を持する阿修羅王率いる軍勢に襲いかかるのは、黒雲に乗ずる雷神およびその眷属と、個々の尊格の道程など到底不可能なほどに没個性的な諸天の軍勢である。実際、『往生要集』の阿修羅の条でも帝釈天については全く言及していない。

「雷鳴もし鳴れば、これ天の鼓なりと謂いて怖畏周章し、心大いに戦き悼む。また諸天のために侵害せられ、あるいは身体を破り、あるいはその命を夭す。」
(『大正新脩大蔵經』84巻p. 37)

帝釈天との戦いを描く系列の阿修羅道図像はおそらくは『正法念処經』などの記述を典拠とする、『往生要集』成立以前に溯る図像伝統に従ったものと思われる。この伝統は極めて強固なものだったが、長岳寺本は『往生要集』に記述されたもののみを描き、そうした伝統を無視している。

また第1・2幅の死天山の情景では、山の麓の茶毘に付された遺骨には杖と草鞋が備えられ(図68/見取り図6-1)、険しい山をよじ登る亡者は杖も草鞋も持たない(図82/見取り図6-4)。この二つの図様は共に『地藏菩薩発心因縁十王経』に基づく。

「これより亡人向かって死山に入り、険坂に杖を尋ね、路石に鞋を願う。然れば即ち男女葬送するにおいて三尺の杖を具え、頭に地藏の状并に随求陀羅尼を書し、鞋一具を具し、魄神の辺に置く。」(蔵経書院版『卍統蔵経』第150冊p. 770)

しかし二つの図様をとともども描いてしまったなら、杖や草鞋を供えたにもかかわらず死天山越えの際にそれらが亡者の手元にないという、前後関係の不整合が生じることとなる。そこで長岳寺本はテキストに忠実に図像を描きつつ、同時にこの不整合に調整を加える。すなわち二つの図様の間に位置する死天山の南門の傍らに、放置された杖と笠が描き加えられているのである(図83/見取り図6-3)。素足徒手で登山する亡者は、せっかく供えられた杖や草鞋を置き忘れていったのだと言いたいのだろう。この論法は今度は杖や草鞋を供えることの効果に疑問を生じさせかねないものであり、不整合は表面的に回避されたに過ぎない。しかしこうした詭弁を弄してまでもテキストの細部に従おうとしたところに、テキストに対する長岳寺本のきまじめさの傾向は端的に表れていると言えよう。

(39) 『十王讚歎修善鈔図絵』においても同所は

「昔十王の庁に禁られて、呵責の語をきゝ、申訳に舌を巻し悲み、今は弥陀の宝前に跪づきて、親子憐愍の語ひを蒙りて、歎喜身に余る喜びを今傭思ひ比ぶるに何計の違ぞや」(下44ウ)

とほぼ同様の表現をとる。

(40) 展覧会図録『地獄－鬼と閻魔の世界－』(1990年 兵庫県立歴史博物館)に図版がある。

(41) 熊野観心十界図の図像構成に関しては黒田日出男「熊野観心十界曼荼羅の宇宙」(宮田登編『大系仏教と日本人 8 性と身分』所収 1989年 春秋社)が示唆に富む分析をおこなっている。

付録:六道十王図関連テキスト抜粋

『往生要集』より

- 01: 「初めに等活地獄とは、この閻浮提の下、一千由旬にありて、縦広一万由旬なり。この中の罪人、互いに常に害心を懐く。もしたまたま相見えれば獐者の鹿に逢えるがごとし。おのおの鉄の爪をもって互いにつかみ裂く。血肉すでに尽きて、ただ残骨のみあり。あるいは獄卒、手に鉄杖・鉄棒を執り、頭より足に至るまで、遍く皆打ち築くに、身体破れ砕けること、猶し沙揣のごとし。あるいは極めて利き刀をもって分々に肉を割くこと、厨者の魚肉を屠るがごとし。涼風来り吹くに、ついでよみがえること故のごとし。たちまちにしてまた起きて、前のごとく苦を受く。あるいは云わく、空中に声ありて云わく、「このもろもろの有情、また等しくよみがえるべし」と。あるいは云わく、獄卒、鉄叉をもって地を打ち、唱えて「活々」と云うと。」(等活地獄)
- 02: 「極熱の屎泥あり。その味、最も苦し。金剛の嘴の虫、その中に充ち満てり。罪人、中にありてこの熱屎を食らう。もろもろの虫、聚り集まりて、一時に競い食う。皮を破りて肉をはみ、骨を折いて髓をすう。」(等活地獄・屎泥処)
- 03: 「鉄の壁、周りめぐりて高さ十由旬なり。猛火熾然にして、常にその中に満つ。人間の火はこれに比ぶるに雪のごとし。わずかにその身に触るるに、砕くこと芥子のごとし。また熱鉄をふらすこと、猶し盛んなる雨のごとし。また刀林あり。その刃、極めて利し。また両刃ありて、雨のごとくに下る。」(等活地獄・刀輪処)
- 04: 「罪人を執りて鉄の瓮の中に入れ、煎り熟すること豆のごとし。」(等活地獄・瓮熱処)
- 05: 「黒闇の処にあつて、常に闇火のために焼かる。大力の猛風、金剛の山を吹き、合わせ磨り、合わせ砕くこと、猶し沙を散らすのごとし。熱風に吹かるること、利き刀の割くのごとし。」(等活地獄・闇冥処)
- 06: 「大火炎ありて昼夜に焚焼す。熱炎の嘴の鳥・狗犬・野干ありて、その声、極悪にして甚だ怖畏すべし。常に来りて食いはみ、骨肉狼藉たり。金剛の嘴の虫、骨の中に往来して、その髓を食う。」(等活地獄・不喜処)
- 07: 「嶮しき岸の下にありて、常に鉄火のために焼かる。」(等活地獄・極苦処)
- 08: 「等活の下にあり。縦広、前に同じ。獄卒、罪人を執りて熱鉄の地に臥せ、熱鉄の縄をもって縦横に身にすみうち、熱鉄の斧をもって縄に随つて切り割く。あるいは鋸をもって解き、あるいは刀をもって屠り、百千段となして処々に散らしおく。また、熱鉄の縄を懸けて、交え横たえること無数、罪人を駆りてその中に入らしむるに、悪風暴く吹いて、その身に交え絡まり、肉を焼き骨を焦がして、楚毒極まりなし。」(黒縄地獄)

- 09: 「また左右に大いなる鉄の山あり。山上におのおの鉄の幢を建て、幢の頭に鉄の縄を張り、縄の下には多く熱きかなえあり。罪人を駈り、鉄の山を負いて縄の上より行かしめ、遥かに鉄のかなえに落として摧き煮ること極まりなし。」(黒繩地獄)
- 10: 「嶮しき岸の無量由旬なるに挙げおき、熱炎の黒繩にて束ね縛り、繋ぎ已って、しかし後にこれを推して、利き鉄刀の熱地の上に墮とす。鉄炎の牙の狗にはみ食われ、一切の身分、分々に分離す。」(黒繩地獄・等喚受苦処)
- 11: 「獄卒、杖を怒らせて急に打ち、昼夜に常に走り、手に火炎の鉄刀を執り、弓を挽き、箭をつがえ、後に随って走り逐い、斫り打ってこれを射る。」(黒繩地獄・畏熱処)
- 12: 「黒繩の下にあり。縦広、前に同じ。多く鉄の山ありて、両々相對す。牛頭・馬頭等のもろもろの獄卒、手に器仗を執り、駈りて山の間に入らしむ。この時、兩の山、迫り来りて合わせ押すに身体摧け砕け、血流れて地に満つ。あるいは鉄の山ありて空より落ち、罪人を打ち砕くこと沙揣のごとし。あるいは石の上に置き巖をもってこれを押し、あるいは鉄の臼に入れ鉄の杵をもって擣く。」(衆合地獄)
- 13: 「極悪の獄鬼、ならびに熱鉄の師子・虎・狼等のもろもろの獸、烏・鷲等の鳥、競い来りて食いはむ。また熱鉄の嘴の鷲、その腸を取り已りて樹の頭に掛けおき、これをはみ食らう。」(衆合地獄)
- 14: 「かしこに大いなる江あり。中に鉄の鉤ありて皆悉く火に燃ゆ。獄卒、罪人を執りて、かの河の中に擲げ、鉄の鉤の上に墮とす。またかの河の中に熱き赤銅の汁ありて、かの罪人をただよわす。あるいは身、日の初めて出づるがごとき者あり。身沈没すること重き石のごとき者あり。手を挙げ、天に向かつて号哭せる者あり。共に相近づいて号哭せる者あり。久しく大苦を受くれども、主なく救うものなし。」(衆合地獄)
- 15: 「またふたび獄卒、地獄の人を取って刀葉の林に置く。かの樹の頭を見れば、好き端正巖飾の婦女あり。かくのごとく見已りて即ちかの樹に上るに、樹の葉、刀のごとくその身の肉を割き、次いでその筋を割く、かくのごとく一切の処を劈り割いて、すでに樹に上ることを得已りて、かの婦女を見れば、また地にあり。欲の媚びたる眼をもって上に罪人を看て、かくのごとき言をなす。「汝を思う因縁もて我この処に到れり。汝、いま何故ぞ来りて我に近づかざる。何ぞ我を抱かざる。」と。罪人見已りて、欲心熾盛にして、次第にまた下るに、刀葉上に向きて利きこと剃刀のごとし。前のごとく遍く一切の身分を割く。すでに地に到り已るに、かの婦女はまた樹の頭にあり。罪人見已りて、また樹に上る。」(衆合地獄)
- 16: 「他の兒子を取り、強いて邪行を逼り、号哭せしめたる者、ここに墮ちて苦を受く。謂く、罪人、自らの兒子を見るに、地獄の中にあり。獄卒、もしは鉄杖をもって、もしは鉄

錐をもって、その陰中を刺し、もしくは鉄鉤をもって、その陰中に釘うつ。既に自らの子のかくのごとき苦事を見て愛心悲絶して堪え忍ぶべからず。(中略) 頭面を下におき、熱き銅汁を盛りてその糞門に灌ぎ、その身の内に入れて、その熟藏・大小の腸等を焼く。次第に焼き已れば、下に出づ。」(衆合地獄・悪見処)

17:「本の男子を見れば、一切の身分、皆悉く熱炎あり。来りてその身を抱くに、一切の身分、皆悉く解け散る。死し已りてまた活き、極めて怖畏を生じ、走り避けて去るに、嶮しき岸に墮ち、炎の嘴の鳥、炎の口の野干ありてこれをはみ食らう。」(衆合地獄・多苦惱処)

18:「獄卒、これを樹の頭に懸けて、頭面を下におき、足を上におき、下に大いなる炎を燃やして、一切の身分を焼く。焼け尽きてまた生く。唱喚せんとして口を開けば、火は口より入りてその心・肺・生熟の藏等を焼く。」(衆合地獄・忍苦処)

19:「獄卒の頭、黄なること金の如く、眼の中より火出で、赭色の衣を着けたり。手足長大にして疾走せること風の如く、口より悪声を出して罪人を射る。罪人、惶れ怖れて、頭を叩き哀れみを求む。」(叫喚地獄)

20:「或いは鉄棒をもって頭を打ちて熱鉄の地より走らしむ。或いは熱きいりなべに置き反復してこれを炙る。或いは熱きかなえに擲げてこれらを煎じ煮る。或いは駈りて猛炎の鉄の室に入らしむ。或いは鉗をもって口を開いて溶銅を灌ぎ、五臓を焼き爛らせて下より直ちに出す。」(叫喚地獄)

21:「身より虫出でて、その皮・肉・骨・髓を破りて飲み食う。」(叫喚地獄・火末虫処)

22:「獄火の満つること、厚さ二百肘なり。獄卒、罪人を捉えて火の中に行かしむるに、足より頭に至るまで一切洋き消え、これを挙げればまた生く。」(叫喚地獄・雲火霧処)

23:「熱鉄の利き針にて口舌俱に刺され、啼き哭ぶことあたわず。」(大叫喚地獄・受鋒苦処)

24:「獄卒、熱鉄の鉗を以てその舌を抜き出す。抜きおわれればまた生じ、生ずれば則ちまた抜く。眼を抜くこともまたしかり。また刀を以てその身を削る。刀の甚だ薄く利きこと、剃頭の刀の如し。」(大叫喚地獄・受無辺苦処)

25:「獄卒、罪人を捉えて熱鉄の地の上に臥せ、或いは仰むけ、或いは覆せ、頭より足に至るまで、大いなる熱鉄の棒を以て、或いは打ち、或いは築いて、肉搏の如くならしむ。」(焦熱地獄)

26:「或いは極熱の鉄のいりがまの上に置き、猛き炎にてこれを炙り、左右にこれを転がし、表裏より焼き薄む。或いは大いなる鉄の串を以て下よりこれを買き、頭を徹して出し、反覆してこれを炙り、かの有情の諸根・毛孔、および口の中に悉く皆炎を起こさしむ。或いは熱きかなえに入れ、或いは鉄の楼に置くに、鉄火猛く盛んにして骨髓に徹る。」(焦熱地獄)

- 27: 「かの罪人の一切の身分に、芥子許りも火炎なき処なし。異の地獄の人、かくの如く説いて言く、「汝、疾く速やかに来れ。ここに分荼離迦の池あり。水ありて飲むべく、林に潤える影あり」と。随いて走り趣くに、道の上に坑ありて、中に熾なる火満てり。罪人、入りおわりて、一切の身分、皆悉く焼け尽く。」(焦熱地獄・分荼離迦処)
- 28: 「かの罪人、悪風に吹かれ、虚空の中において所依の処なし。輪の如く疾く転じて、身見るべからず。かくの如く転じおわるに、異なる刀風生じて、身を砕くこと沙の如く、十方に分散す。」(闇火風処)
- 29: 「炎の刀にて一切の身の皮を剥ぎ割いて、その肉を侵さず。既にその皮を剥げば、身と相連ねて熱き地に敷き在き、火を以てこれを焼き、熱鉄の沸けるを以てその身体に灌ぐ。」(大焦熱地獄・普受一切苦惱処)
- 30: 「頭面は下にあり、足は上にありて、二千年を逡て、皆下に向かいて行く。」(阿鼻地獄)
- 31: 「かの阿鼻城は縦広八万由旬にして七重の鉄城、七層の鉄網あり。下に十八の隔ありて、刀林周りめぐる。四の角には四の銅の狗あり、身長四十由旬なり。眼は電のごとく、牙は劍のごとく、齒は刀の山のごとく、舌は鉄の刺のごとし。一切の毛孔より皆猛火を出し、その烟、臭悪にして世間に喩えるものなし。」(阿鼻地獄)
- 32: 「十八の獄卒あり。頭は羅刹のごとく、口は夜叉のごとし。六十四の眼ありて鉄丸を迸り散らし、鉤牙は上に出て、高さ四由旬、牙の頭より火流れて阿鼻城に満つ。頭の上には八の牛頭あり。一々の角の頭より皆猛火を出す。」(阿鼻地獄)
- 33: 「一々の隔の間に八万四千の鉄の鱗・大蛇ありて、毒を吐き火を吹いて、身、城内に満つ。その蛇の嗥び吼えること百千の雷のごとし。大いなる鉄丸をふらして、また城内に満つ。」(阿鼻地獄)
- 34: 「五百億の虫あり。八万四千の嘴ありて嘴の頭より火が流れ、雨のごとく下る。この虫の下るとき、獄火いよいよ盛んにして、遍く八万四千由旬を照らす。」(阿鼻地獄)
- 35: 「また鉄の箕をもって三熱の鉄・炭を盛り満たしてこれをあぶり揃え、また熱鉄の地の上に置いて、大いなる熱鉄の山に登らしむ。上がりてはまた下り、下りてはまた上がる。」(阿鼻地獄)
- 36: 「その口中からその舌を抜き出し、百の鉄釘をもってしかもこれを張り、しわをなからしむるこ、牛の皮を張るがごとし。」(阿鼻地獄)
- 37: 「また更に熱鉄の地の上に仰ぎ臥せ、熱鉄の鉗をもって口をはさみて開かしめ、三熱の鉄丸をもってその口中に置くにすなわちその口および喉を焼き府蔵を徹りて下より流れ出づ。また洋銅を以てその口に灌ぐに、喉及び口を焼き、府蔵を徹りて下より流れ出づ。」(阿鼻地獄)

- 38:「炎の牙ある野干、常に来りて食いはむ。」(阿鼻地獄・鉄野干食処)
- 39:「黒き肚の蛇ありて、かの罪人に繞い、始め足の甲より漸漸に齧み食らう。」(阿鼻地獄・黒肚処)
- 40:「一由旬量の鉄山、上より下りてかの罪人を打ち、砕くこと沙揣の如し。」(阿鼻地獄・雨山聚処)
- 41:「獄卒、刀をもって遍く身分を割き、極熱の白蠟の汁をその割けたる処に入る。」(阿鼻地獄・雨山聚処)
- 42:「悪鳥あり、身の大きき像の如し。名づけて閻婆という。嘴利くして炎を出だす。罪人を執りて遙かに空中に上り、東西に遊行し、しかる後これを放つに、石の墮つるが如く、砕けて百分となる。」(阿鼻地獄・閻婆度処)
- 43:「利き刃、道に満ちて、その足脚を割く。」(阿鼻地獄・閻婆度処)
- 44:「炎の齒ある狗あり、来りてその身を噛む。」(阿鼻地獄・閻婆度処)
- 45:「燗煨ありて膝に齊し。かのもろもろの有情、出でて舎宅を求めんが為に遊行してここに至る。足を下すとき、皮肉及び血、並に即ち消け爛る。」(別処・燗煨)
- 46:「その中に陥ち入るに、首足俱に没す。また屍糞泥の内に、多くもろもろの虫あり。嬢矩吒と名づく。皮を穿ちて肉に入り、筋を断ちて骨を破り、髓を取りて食らう。」(別処・死屍糞泥)
- 47:「足を下す時、皮肉筋血、悉く皆消け爛る。」(別処・刀劍刃路)
- 48:「往きてかの陰に趣き、纔にその下に坐るに、微風逐い起こりて刃の葉墮落し、その身の一切の支節を斫り截つに、すなわち地にたおる。くろき狗あり、背・胎をつかみ撃いて、これをはみ食らう。」(別処・刃葉林)
- 49:「鉄設粒末梨の林あり。かのもろもろの有情、舎宅を求めんが為に、便ちここに来り趣き、遂にその上に登る。これに登る時に当たって、一切の刺鋒、悉く廻りて下に向き、これを下らんと欲する時、一切の刺鋒、また廻りて上に向く。」(別処・鉄設粒末梨林)
- 50:「鉄のくちばしある大なる鳥ありて、かの頭上に上り、あるいはそのかたに上り、眼精を探り啄みて、これをはみ食らう。」(別処・鉄設粒末梨林)
- 51:「沸れる熱き灰水、その中に弥満つ。かのもろもろの有情、舎宅を尋ね求めて、かしこより出で已りて、来りてこの中に墮つ。猶し豆を以てこれを大なるかまに置き、猛く熾んなる火を燃いて、これを煎り煮るが如し。湯の騰り湧くに随いて、周旋して廻り復る。河の兩岸において、もろもろの獄卒あり。手に杖索および大網を執りて、行列して住ち、かの有情を遮りて出づることを得しめず。或いは索を以て羈け、或いは網を以て漉う。」(別処・広大河)

- 52: 「広大なる熱鉄の地の上に置き、かの有情を仰けて、これに問うて言わく、「汝等、いま何ののぞむ所をか欲するや」と。かくの如く答えて言わく、「我等、いま竟に覚知することなし。しかも種種の飢苦の為に逼らる」と。時にかの獄卒、即ち鉄の鉗を以て、口をはさんで開けしめ、便ち極熱の焼け燃えたる鉄丸を以てその口中に置く。余は前に説けるが如し。もし彼答えて、「我今、ただ渴の為に逼らる」と言わば、その時、獄卒、すなわち洋銅を以てその口に灌ぐ。」(別処・広大河)
- 53: 「面目有ることなくして手足は猶しかなえの脚の如し。熱き火中に満ち、その身を焚熱す。」(餓鬼道・鑊身餓鬼)
- 54: 「世人の病に依りて、水辺・林中に祭を設くるに、この香気を嗅ぎて、以て自ら活命す。」(餓鬼道・食氣餓鬼)
- 55: 「長き髪面を覆い、目見る所なく、河辺に走り趣いて、もし人河を渡りて脚下より遺し落せる余水あれば、速かに疾く接し取りて以て自ら活命す。あるいは人の、水を掬びて亡き父母に施すことあらば、則ち少分を得て、命存立することを得る。もし自ら水を取らんとすれば、水を守る諸の鬼、杖を以てうち打つ。」(餓鬼道・食水餓鬼)
- 56: 「生まれて樹中に在り、せまりて身を押しさるること賊木虫の如く、大いなる苦悩を受く。」(餓鬼道・樹中住餓鬼)
- 57: 「頭髮垂れ下がりて、遍く身体に纏わり、その髪、刀の如くその身を刺し切る。」(餓鬼道)
- 58: 「昼夜におのおの五子を生むに、生むに随いてこれを食えども、なお常に飢えて乏し。」(餓鬼道)
- 59: 「一切の食、皆くうことあたわず。ただ自ら頭を破り脳を取りて食う。」(餓鬼道)
- 60: 「飢渴常に急にして、身体枯渴す。たまたま清流を望み、走り向かいてかしこに趣けば、大力の鬼ありて杖を以てむかえ打つ。或いは変じて火と作り、或いは悉く枯れ涸く。」(餓鬼道)
- 61: 「たまたまわずかの食に逢いて食いはめば、変じて猛焰となり身を焼きて出ず。」(餓鬼道)
- 62: 「かくの如き等の類、強弱相害す。」(畜生道)
- 63: 「もろもろの水性の属は漁者の為に害せられ、もろもろの陸行の類は獵者の為に害せらる。」(畜生道)
- 64: 「象・馬・牛・驢・駱駝・騾等の如きは、或いは鉄の鉤にてその脳をきられ、或いは鼻の中を穿たれ、或いは轡を首に繋ぎ、身に常に重きを負いて、もろもろの杖捶を加えらる。」(畜生道)
- 65: 「ただ水・草を念いて、余は知る所なし。」(畜生道)
- 66: 「もろもろの竜の衆は、三熱の苦を受けて昼夜に休むことなし。或いはまた蟒蛇は、そ

の身長大なれども聾・おろかにして足なく、宛転として腹行し、もろもろの小虫の為にすい食わる。」(畜生道)

67:「雷鳴もし鳴れば、これ天の鼓なりと謂いて怖畏周章し、心大いに戦き悼む。また諸天のために侵害せられ、あるいは身体を破り、あるいはその命を夭す。」(阿修羅道)

68:「命終の後は、塚の間に捐捨すれば、一二日乃至七日を経るに、その身はれ脹れ、色は青瘀に変じて、臭く爛れ、皮は穿けて、膿血流れ出づ。くまたか・鷲・鴉・梟・野干・狗等、種種の禽獸、つかみ掣いて食いはむ。禽獸食い已りて、不浄潰え爛れば、無量種の虫蛆ありて、臭き処に雑出す。(中略)白骨と成り已らば、支節分散し、手足・髑髏、おのおの異なる処にあり。風吹き、日曝し、雨灌ぎ、霜封み、積むこと歳年あれば、色相変異し、遂に腐れ朽ち、碎末となりて塵土と相和す。」(人道・不浄相)

69:「一には頭上の花鬘忽ちに萎み、二には天衣、塵垢に著され、三には腋の下より汗出で、四には両の目しばしばくるめき、五には本居を楽しまざるなり。この相現ずる時、天女・眷属、皆悉く遠離して、これを棄つること草の如し。林間に偃れ臥し、悲しみ泣いて歎じて曰く(後略)」(天道・五衰)

『正法念処経』より

70:「二山あり、山は甚だ堅韌にして鉄の炎火燃え、両相び勢いをなして一時に俱に來り、地獄人にせまり、せまり已りてこれを磨し、その身散尽して物として見るべきなく、この如く磨しおわりてまた還りて生まれ、また以て二山前の如く摻磨す。」(叫喚地獄)

71:「(舌が)口中より出で、閻魔羅人は熱鉄の犁を執り、その犁は炎燃えて耕破して道を作り、熱炎の銅汁のその色甚だ赤きを以てその舌に灑ぐ。舌中に虫を生じ、その虫に炎の口あり。還りてその舌を食い、彼の妄語の人は罪業力の故に舌に大苦を受け、口に入るるあたわず。」(大叫喚地獄)

72:「悪業を以ての故に自身に蛇を生じ、一切身中を処処に遍く行きて遍くその筋を挽き、地獄の因縁にて遍く身分を食い、脾・腸を食い、内に在りて宛転す。」(大叫喚地獄・受堅悩不可忍耐処)

73:「悪業を以ての故に彼処に則ち炎の牙の師子有り、彼の悪師子は彼の妄語せる地獄の罪人を取り、(中略)彼の師子のために挙げて食われ、挙げて食われるれば則ち死し、これを下せば則ち活き、またその一切の身分を食い、食いおわらばまた生じ、生じおわらばまた食い、悪業を以ての故に彼の師子の齒の機関中に炎火を充滿せしめ、この如き齒を以て彼の罪人を食う。」(大叫喚地獄・双逼悩処)

74:「面目・手足・穿穴有ることなくして猶しかなえの脚の如く、熱火中に満ち、その身を

焚熱すること火の林を焼くが如くにして、飢渴の熱惱あり。」(餓鬼道・鑊身餓鬼)

75:「唯塔廟を待み、および天を祀れる有信の人の諸の供養を設くるに、その香気に因り、及び余の気を嗅ぎて、以て自ら活命す。また気を嗅ぐ諸の餓鬼等有り。諸の世人の多病の因縁を以て、水辺・林中・巷陌・交道に諸の祭具を設くれば、その香気に因りて、以て自ら活命す。」(餓鬼道・食氣餓鬼)

76:「長髪面を覆いて目に見る所なし。飢渴に身を焼かれて走りて河辺に趣き、もし人の河を渡りて脚下に遺落せし余水の泥垢のしたたりを、速く疾く接取して以て自ら活命し、もしくは余の人有りて河の側に在り、水を掬いて命の父母に過ぎたるに施し、則ち少分を得て、この因縁を以て命は存立することを得る。もし自ら水を取らば、水を守れる諸の鬼は杖を以てうち打ち、身の皮剥脱して苦痛忍び難く、哀叫し悲しみさけびて河側を走る。」(餓鬼道・食水餓鬼)

77:「未だ起たざる間に、鳥・鷄・雕・鷲は競いてその目を啄み、その身の肉を食い、分張して搗み裂きて身骨を破散す。」(餓鬼道・曠野餓鬼)

78:「生まれて樹中に在り、悪業を以ての故に寒ければ則ち大いに寒く、熱ければ則ち大いに熱く、せまりて身を圧されて賊木虫の如くに大苦悩を受け、身体萎熟し、諸の虫蟻のためにその身をついばみ食われ、もし食を以てこれを樹に棄つる有らば、得てこれを食いて以て自ら活命す。」(餓鬼道・樹中住餓鬼)

79:「大熱鉄搏は口より中に入り、地獄人の如く等しくして異なるなく、熱鉄を呑みくらいて大苦悩を受け休息有ることなし。」(餓鬼道・殺身餓鬼)

『阿毘達磨順正理論』より

80:「瘰鬼と言うは、謂わく、この鬼の咽に、悪業力の故に大瘰を生ず。」(餓鬼道・瘰鬼)

『地藏菩薩発心因縁十王経』より

81:「一切の衆生の命終に臨む時、閻魔法王は閻魔卒を遣す。一を奪魂鬼と名け、二を奪精鬼と名づけ、三を縛魄鬼と名く。即ち三魂を縛して門関の樹下に至る。樹に荆棘有り。宛ら鋒刃の如し。二鳥栖み掌る。一を無常鳥と名付け、二を跋目鳥と名く。」(死天山)

82:「これより亡人向って死山に入り、陰坂に杖を尋ね、路石に鞋を願う。然れば即ち男女葬送するにおいて三尺の杖を具え、頭に地藏の状ならびに随求陀羅尼を書し、鞋一具を具し、魄神の辺に置く。」(死天山)

83:「渡る所に三有り。一には山水瀬、二には江深淵、三には有橋渡なり。」(奈河津)

84:「官前に大樹有り。衣領樹と名づく。影に二鬼を住す。一を奪衣婆と名づけ、二を懸衣

翁と名づく。婆鬼は盜業を警めて両手の指を折り、翁鬼は義無きを悪んで頭足を一所に逼め、尋いで初開の男をして其の女人を負わしめ、牛頭、鉄棒をもって二人の肩を挟み、追うて疾瀨を渡し、悉く樹下に集む。婆鬼は衣を脱せしめ、翁鬼は枝に懸けて罪の低昂を顕す。」(奈河津)

85:「二江の岸上官庁の前において、悪猫群集し、大蛇並びに出で来る。」(奈河津)

86:「左に高台有り。台の上に秤量幢有り。業匠の構巧みにして、七の秤量を懸け、身口の七罪を量り、軽重を紀すことを為す。(中略)この秤量の点目において三の別有り。一には斤の目を断ちて重罪と為す。重中に軽を開きて二八獄の罪と為す。二には両の目を断ちて中罪と為し、餓鬼の罪と為す。三には分の目を断ちて、下罪と為し、畜生の罪と為す。先ず不妄語戒を破り、余の造悪に従いて秤の前に至る。時に秤の錘、自動して自然に昂低す。亡人に課して言わく、「汝が造る所の罪、秤目、重きに定まれり」と。亡人欺咳して曰く、「我未だ秤に昂らず。闇に何ぞ重と為すや。我敢えて信ぜず」と。爾の時に訪羅、罪人を取りて秤の盤上に置くに、秤目の如し。亡人口を閉づ。」(五官王宮・秤量舎)

87:「(閻魔王国の四方の鉄門の)左右に檀茶幢有り。上に人頭の形を安んず。人能く人間を見ること掌中の菴羅果を見るが如し。右は黒闇天女幢、左は太山府君幢なり。爾の時に世尊、大衆に告げて言わく、「諸の衆生に、同生神、魔奴闇耶というもの有り。左の神は悪を記す。形、羅刹の如し。(中略)右の神は善を記す。形、吉祥の如し。」(閻魔王宮・檀茶幢)

88:「光明王院、中殿の裏において、大鏡台有りて光明王鏡を懸く。浄頗梨鏡と名づく。(中略)亡人を髪をつかみて右繞して見せしむ。即ち鏡の中において前生に作す所の善福悪罪を現す。」(閻魔王宮・光明王院)

『仏説目連救母經』より

89:「この時獄主、鉄叉もて(目連の母を)挿し起こし、釘打ちて地に落とす。百の毛孔の中より尽く皆流血し、更に鉄枷刀劍を著く。困遶して放出し、兒と相見ゆ。」

『仏説盂蘭盆經』より

90:「大目乾連始めて六通を得て、父母を度し哺乳の恩に報いんと欲す。即ち道眼を以て世間を觀視し、其の亡き母の餓鬼中に生まるるを見る。飲食見えず皮骨連立す。目連悲しみ哀れみ、即ち鉢に飯を盛り、往きて其の母に餉す。母、鉢飯を得、便りて以て左手で飯を障ぎ、右手で飯を搏み食せんとするに、未だ人の口にせざるに化して火炭と成り、遂に食するを得ず。」

* []番号は付録テキストにおける関連箇所の番号に対応する



見取り図1 禅林寺本十界図 (作図：近藤真有)

[地蔵幅]

28:地蔵菩薩 29:秦広王 30:初江王 31:宋帝王 32:五官王 33:閻羅王 34:變成王 35:太山王
 36:平等王 37:都市王 38:五道転輪王 39:引き立てられる母親 40:浄頗梨鏡[88] 41:業秤[86]
 42:檀茶幢[87] 43:亡者に獣皮を着せる 44:亡者の足を潰す 45:釜が割れて蓮池となる 46:
 奈河橋[83] 47:奪衣婆[84] 48:奈河津[83] 49:地獄で母と再会する目連[89] 50:地蔵菩薩 5
 1:亡者を串焼きにする[26] 52:亡者を岩板で潰す[12] 53:牛頭を戴き多眼を有する獄卒[32]
 54:亡者の舌を引き伸ばす[36] 55:銅狗[31] 56:火を吹く毒竜[33] 57:刀葉樹[15] 58:亡者
 を弓や鉾で追い立てる[11] 59:亡者に銅汁を飲ませる[20] 60:亡者の舌を抜く[24] 61:亡者
 を背後から槍で突く 62:熱鉄丸を飲む餓鬼 63:餓鬼(海渚餓鬼?) 64:渡河者の足から零れる
 滴を飲む餓鬼[55] 65:飲水が火となる餓鬼[60] 66:木と一体化した餓鬼[78] 67:食物が火と
 なる餓鬼[61] 68:赤布を握る餓鬼 69:子を食らう餓鬼[58]

[墨書]

L:初七日秦広王大日 M:二七日初江王普賢 N:三七日宋帝王弥勒 O:四七日五官王□□ P:五七
 日閻羅王地蔵 Q:六七日變成王釈迦 R:七ノ日太山王阿弥陀 S:百ヶ日平等王薬師 T:一周忌
 都市王勢至 U:第三年五道転輪王□□ V:餓鬼道

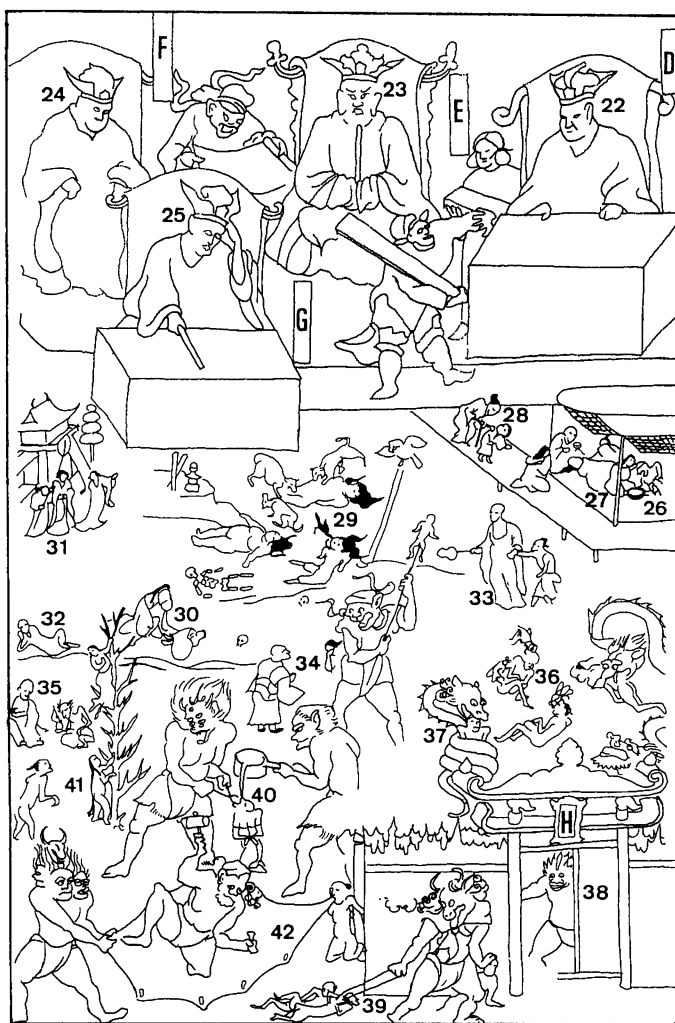


[阿弥陀幅]

1:阿弥陀如来 2:比丘 3:善見城 4:天の軍勢 5:阿修羅の軍勢 6:天道の遊樂 7:天人五衰[69]
 8:生苦 9:病苦 10:稻荷社 11:奏樂 12:老苦 13:(求不得苦?) 14:愛別離苦 15:死苦 16:火
 車来迎 17:野辺送り 18:野辺[68] 19:五陰盛苦 20:怨憎会苦 21:鹿狩り[63] 22:食物連鎖
 (蛙・蛇・猪)[62] 23:白鳥狩り[63] 24:鳥に背を啄まれ草を食む馬[63・65] 25:荷を負い鞭打
 たれる牛[64] 26:魚取り[63] 27:山賊

[墨書]

A:修羅道 B:天道 C:人生苦 D:病苦 E:老苦 F:(求不得苦?) G:愛別離苦 H:死苦 I:五盛陰苦
 J:怨憎会苦 K:畜生



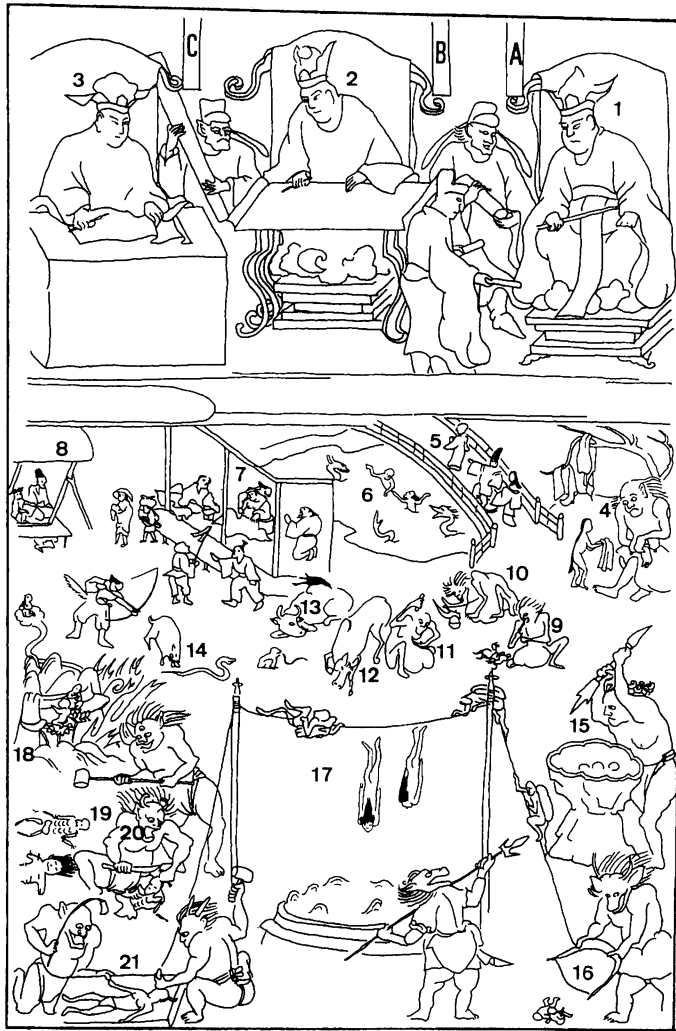
見取り図2 水尾本六道十王図

[左幅]

22:太山王 23:平等王 24:「斗市王」 25:五道転輪王 26:病苦 27:死苦 28:老苦 29:不浄相[68]
 30:愛別離苦 31:天道の遊楽 32:天人五衰[69] 33:地藏による救済 34:地獄で母と再会する
 目連[89] 35:餓鬼となった母に飯を与える目連[90] 36:亡者を啄む嘴のある虫[34] 37:大蛇
 が亡者に巻き付く[39] 38:阿鼻地獄門 39:亡者を阿鼻地獄へ引きずる 40:亡者に銅汁を飲ま
 せる[37] 41:刀葉樹[49] 42:亡者の舌を引き伸ばす[32・36]

[墨書]

D:七々日太山王薬師 E:百箇日平等王観音 F:一周忌斗市王勢至 G:第三年五道転輪王阿弥陀
 H:阿鼻大城



[右幅]

1: 秦広王 2: 初江王 3: 宗帝王 4: 脱衣婆 5: 奈河橋[83] 6: 奈河津[83] 7: 生苦 8: 求不得苦 9: 子を食らう餓鬼[58] 10: 食物が火となる餓鬼[61] 11: 自らの脳を食らう餓鬼[59] 12: 草を食む馬[65] 13: 鳥に背を啄まれる牛[62] 14: 食物連鎖(ミミズ・蛙・蛇・猪・獵師)[62] 15: 亡者を臼で搗く[12] 16: 亡者を篩にかける 17: 熱鉄繩を亡者に渡らせる[09] 18: 釜が割れて蓮池となる 19: 皮を剥がれた亡者に熱湯をそそぐ[29] 20: 亡者の皮を剥ぐ[29] 21: 墨繩に沿って亡者を刻む[08]

[墨書]

A: 初七日秦広王大日 B: 二七日初江王釈迦 C: 三七日宗帝王文殊



見取り図3 旧前田家本十王地獄図 (作図：近藤真有)

[左幅]

27:不動明王 28:秦広王 29:文殊菩薩 30:宋帝王 31:地藏菩薩 32:閻魔王 33:薬師如来 34:太山王 35:勢至菩薩 36:都市王 37:骨朶で亡者を責める 38:亡者に刀で斬りつける 39:浄頗梨鏡[88] 40:二亡者を引き回す 41:裁きを受ける亡者 42:二亡者の髪を掴んで引き回す 43:刀葉樹[15] 44:二山に挟み潰される亡者[12] 45:鋸で解体される亡者[08] 46:亡者を撃で刻む[08] 47:亡者に墨縄を引く[08] 48:亡者を篩にかける 49:亡者を臼で搗く[12] 50:奈河津 51:奈河橋 52:地藏による救済 53:奪衣婆[84] 54:檀茶幢[87]

[墨書]

M:秦広王 N:不動明王 O:文殊菩薩 P:宋帝王 Q:地藏菩薩 R:閻魔王 S:太山王 T:薬師如来 U:都市王 V:勢至菩薩 W:等活地獄在此間浮提下縦広一万由旬以人/間五十年為四天王一日一夜其寿五百歳以四天王天寿為此獄一日一夜/其寿五百歳殺生之者墮此中/黒繩地獄者在等活下縦広同前以人間/一百歳為切利天一日一夜其寿一千歳以/切利天寿為一日夜此獄一千歳殺生/偷盜之者墮此中 X:衆合地獄 Y:衆合地獄者在黒繩下縦広同前以人/間二百歳為夜摩天一日一夜其寿(二千)/歳以(彼)天寿為此地獄一日(一)夜其寿/二千歳殺生偷盜邪淫之者墮此中/叫喚地獄者在衆合下縦広同前以人/間(四百)歳為都率天一日一夜其寿四/千歳以都率天寿為地獄一日夜而其/寿四千歳偷盜淫飲酒者墮此中/以□□大地獄中各□□/地獄如其經説 Z:三途大河



[右幅]

1: 釈迦如来 2: 初江王 3: 普賢菩薩 4: 五官王 5: 弥勒菩薩 6: 變成王 7: 観音菩薩 8: 平等王 9: 阿弥陀如来 10: 五道転輪王 11: 縛られた亡者 12: 引き立てられる母親 13: 亡者に獣皮を着せる 14: 亡者の腕を潰す 15: 作善を提示する人物 16: 剣の山 17: 炉から銅汁を取り出す[20] 18: 亡者に銅汁を飲ませる[20] 19: 氷原に降る岩で潰される亡者 20: 観音菩薩 21: 亡者を背後から槍で突く 22: 熱鉄の門[31] 23: 銅狗[31] 24: 亡者の舌を耕す[71] 25: 熱鉄縄を亡者に渡らせる[09] 26: 刀葉樹(女性亡者用)

[墨書]

A: 釈迦 B: 二七日初江王 C: 普賢 D: 四七日五官王 E: 六七日變成王 F: 百箇日平等王 G: 観音菩薩 H: 阿弥陀 I: 第三年五道転輪王 J: 大叫喚地獄者在叫喚下縦広同前以人/間八百歳為化楽天(一日一夜其)寿(八)千/歳以彼天寿為此獄一日一夜其(寿八千歳)/殺盜淫飲酒妄語者(墮此中)/焦熱地獄者在大叫(喚之下)縦広同前以/人間千六百歳為他化天一日一夜其寿萬/六千歳以(他)化天寿為日夜此獄寿(又)然/殺盜淫飲酒妄語邪見之者墮此中 K: 八寒地獄 L: 大焦熱地獄者在焦熱之下縦広同前/以六地獄根本別処一(切)諸(苦)十倍具受其/寿(半中)劫殺盜淫飲酒妄語邪見并汚淨/戒(尼之者)中墮此中/阿鼻地獄者在大焦熱之下欲界最低之/処縦広(八萬)由(旬逆五逆)罪撥無因果誹/謗大乘犯(四)重(禁虛食信施)者墮此中此/無間獄寿一中劫



見取り図4 出光美術館本六道絵（作図：村松加奈子）

[第2幅]

14: (宋帝王?) 15: (五官王?) 16: 首枷をつけて亡者を連行する 17: 骨朶で亡者を責める 18: 落下する亡者[30] 19: 熱鉄繩を亡者に渡らせる[09] 20: 地藏による救済 21: 銅狗[31] 22: 地獄で母と再会する目連[89] 23: 火車



[第1幅]

1:(秦広王?) 2:(初江王?) 3:籠の中の亡者を鳥が啄む 4:亡者を篩にかける 5:亡者を臼で搗く[12] 6:亡者を圧搾する 7:死出の山 8:奈河橋 9:奈河津[83] 10:奪衣婆[84] 11:杖で亡者を追い込む 12:刀葉樹[15] 13:賽の河原



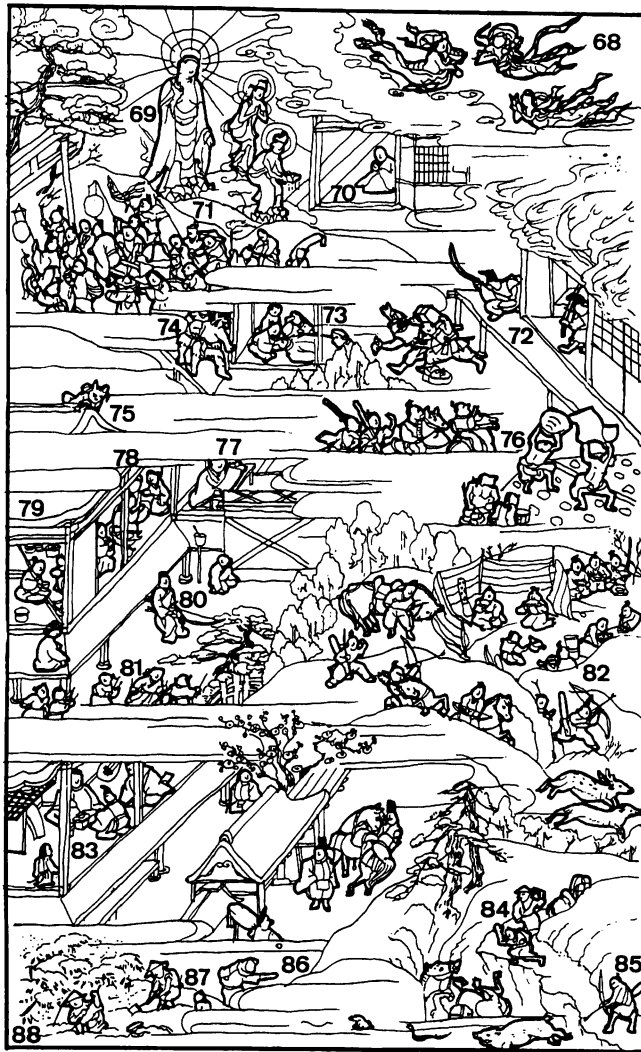
[第4幅]

39: (平等王?) 40: (都市王?) 41: (五道転輪王?) 42: 業秤[86] 43: 亡者に獣皮を着せる 44: 二亡者を引き回す 45: 作善を提示する人物 46: 衣の受け渡しをする亡者 47: 十一面観音による救済 48: 鋸で解体される亡者[08] 49: 亡者を鉗で責める[24] 50: 冷風で亡者の背の皮を剥く 51: 地藏による救済 52: 地藏による救済 53: 餓鬼 54: 食物連鎖(猪・豹)[62] 55: 犬の喧嘩[62] 56: 馬の背をついばむ鳥[62] 57: 亡者に獣の尾をつける 58: 食物が火となる餓鬼[61] 59: 飲水が火となる餓鬼[60] 60: 滴が刺さり木の実を食べられない餓鬼 61: 共食いする餓鬼



[第3幅]

24: (変成王または太山王?) 25: 閻魔王 26: (変成王または太山王?) 27: 亡者を尋問する 28: 檀茶幢[87] 29: 浄頗梨鏡[88] 30: 訴状をくわえる動物 31: 業秤[86] 32: 籠の中の亡者を戟で責める 33: 豆?を数える 34: 亡者を岩板で潰す[12] 35: 亡者に銅汁を飲ませる[20] 36: 亡者を河中へ投げ込む[14] 37: 亡者の舌を耕す[71] 38: 二山に挟み潰される亡者[12]



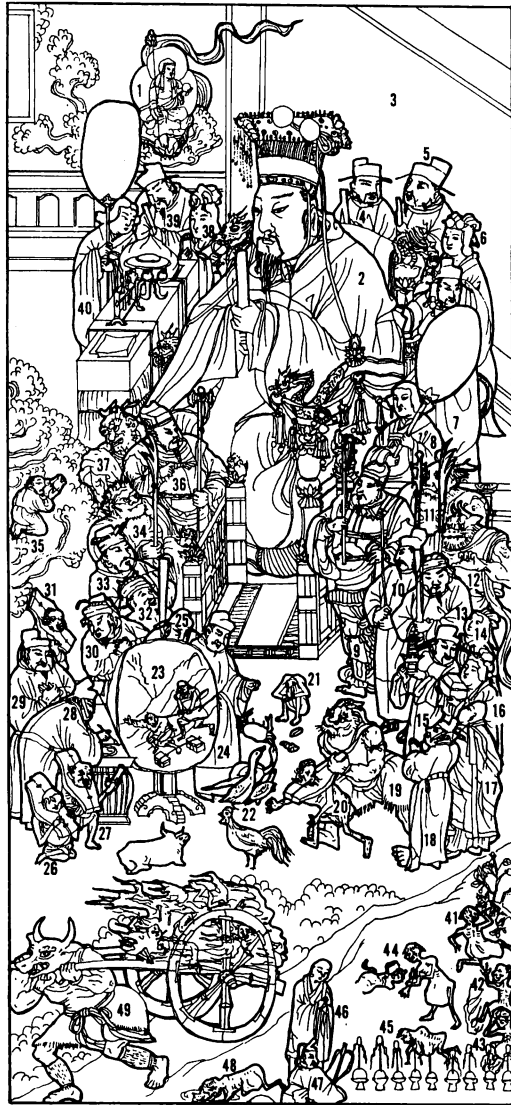
[第6幅]

68:天道 69:阿弥陀三尊来迎 70:往生者 71:野辺送り 72:怨憎会苦 73:死苦 74:閻魔卒[81]
 75:疫鬼 76:五陰盛苦 77:読経僧 78:生苦 79:祝い支度 80:鳴弦 81:竹馬遊び 82:鹿狩り[63]
 83:愛別離苦 84:荷馬の転落[64] 85:食物連鎖(ミミズ・蛙・蛇・猪・猟師)[62] 86:老菜子 87:
 郭巨 88:孟宗



[第5幅]

62:阿弥陀の影迎 63:帝釈天 64:天の軍勢[67] 65:蓮華に變ずる阿修羅の武器 66:阿修羅王
67:阿修羅の軍勢[67]



見取り図5 総持寺本六道十王図 (作図：村松加奈子)

[閻魔王幅]

1:被帽地藏菩薩 2:閻魔王 3:背障(山水) 4:判官 5:判官 6:侍女 7:判官 8:注善童子または注悪童子 9:將軍 10:使者 11:鬼卒 12:鬼卒 13:使者 14:供養者 15:供養者 16:供養者 17:供養僧 18:供養者 19:亡者を連行する鬼卒 20:亡者 21:亡者 22:告訴する動物 23:浄頗梨鏡 [88] 24:司官 25:司官 26:亡者 27:亡者 28:司官 29:使者 30:使者 31:亡者 32:使者 33:使者 34:鬼卒 35:作善を提示する亡者 36:將軍 37:鬼卒 38:侍女 39:判官 40:注善童子または注悪童子 41:果実が火となる餓鬼[61] 42:炎に驚く餓鬼 43:食物が火となる餓鬼[61] 44:共食いする餓鬼 45:祭りの香気を嗅ぐ餓鬼[54] 46:比丘(目連?) 47:陰陽師 48:飲水が火となる餓鬼[60] 49:火車



[都市王幅]

50: 勢至菩薩 51: 都市王 52: 背障(山水) 53: 判官 54: 侍女 55: 判官 56: 鬼卒 57: 注善童子または注悪童子 58: 鬼卒 59: 鬼卒 60: 將軍 61: 鬼卒 62: 使者 63: 亡者 64: 亡者 65: 骨朶で亡者を責める鬼卒 66: 亡者 67: 獄卒 68: 亡者 69: 獄卒 70: 司官 71: 將軍 72: 使者 73: 鬼卒 74: 鬼卒 75: 侍女 76: 注善童子または注悪童子 77: 判官 78: 亡者 79: 兩婦地獄 80: 熱鉄繩を亡者に渡らせる[09]



[五道転輪王幅]

81:天道 82:人道 83:阿修羅道 84:畜生道 85:餓鬼道 86:五道転輪王 87:侍女 88:判官 89:注善童子または注悪童子 90:判官 91:塚 92:供養者 93:將軍 94:鬼卒 95:亡者 96:司官 97:亡者 98:亡者 99:亡者 100:亡者 101:鬼卒 102:使者 103:使者 104:將軍 105:判官 106:注善童子または注悪童子 107:鬼卒 108:判官 109:侍女 110:落下する亡者[30] 111:亡者 112:鬼卒 113:鬼卒 114:亡者の皮を剥ぐ鬼卒[29] 115:老ノ坂 116:背障(山水)



見取り図6 長岳寺本六道十王図（作図：村松加奈子）

〔第1幅〕

1: 葬送〔82〕 2: 死天山の門関の樹下〔81〕 3: 死天山南門 4: 険坂に杖を尋ね路石に鞋を願う〔82〕



〔第3幅〕

16:不動明王 17:秦広王 18:骨朶で亡者を責める 19:石女地獄 20:亡者の股を割く二獄卒 21:両婦地獄 22:毒竜[85] 23:竜王 24:貝 25:魚 26:亀 27:牛 28:馬 29:馳 30:兎 31:蝸牛 32:鶉 33:餓鬼道 34:餓鬼となった母に飯を与える日連[90] 35:喉に瘤のある餓鬼[80] 36:血盆地獄 37:等活地獄刀輪処[03] 38:亡者を臼で搗く[12]

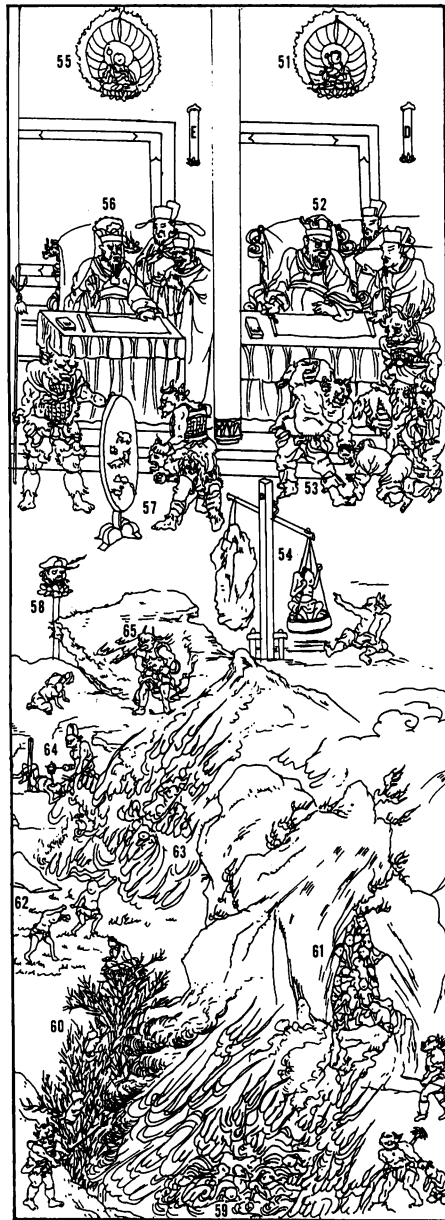
〔墨書〕

A:第一秦広王宮



[第2幅]

4: 険坂に杖を尋ね路石に鞋を願う[82] 5: 奪衣婆[84] 6: 懸衣翁[84] 7: 衣領樹[84] 8: 奈河津[83] 9: 山水瀬[83] 10: 江深淵[83] 11: 有橋渡[83] 12: 悪猫[85] 13: 初開の男に背負わせる[84] 14: 奈河橋[83] 15: 賽の河原



[第5幅]

51: 普賢菩薩 52: 五宮王 53: 亡者に獣皮を着せる 54: 業秤[86] 55: 地藏菩薩 56: 閻魔王 57: 浄頗梨鏡[88] 58: 檀茶幢[87] 59: 炎の立つ川に漂う亡者[14] 60: 刀葉樹[15] 61: 二山に挟み潰される亡者[12] 62: 熱鉄の地で亡者を走らせる[20] 63: 炎に包まれる亡者[22] 64: 亡者に銅汁を飲ませる[20] 65: 目から炎を発する獄卒[19]

[墨書]

D: 第四五宮王宮 E: 第五閻魔王国

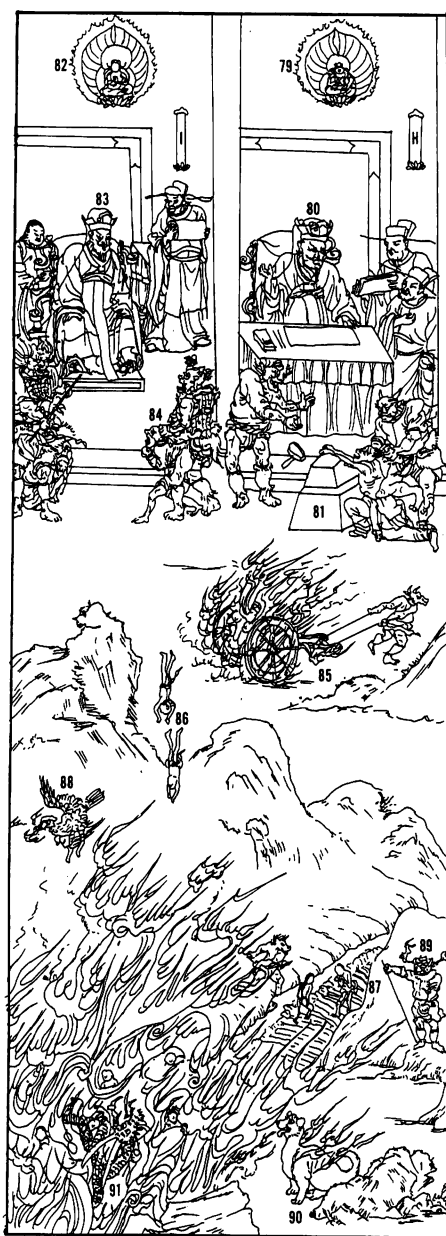


[第4幅]

37: 等活地獄刀輪処[03] 38: 亡者を臼で搗く[12] 39: 釈迦如来 40: 初江王 41: 亡者を尋問する 42: 文殊菩薩 43: 宋帝王 44: 二亡者を引き回す 45: 阿修羅道[67] 46: 熱鉄繩を亡者に渡らせる[09] 47: 黒繩地獄の目連 48: 亡者に墨繩を引く[08] 49: 亡者を斧で解体する[08] 50: 亡者を篩にかける

[墨書]

B: 第二初江王宮 C: 第三宋帝王宮



[第7幅]

79: 観音菩薩 80: 平等王 81: 亡者の腕を潰す 82: 勢至菩薩 83: 都市王 84: 裁きを受ける亡者
 85: 火車 86: 落下する亡者[30] 87: 地獄をつなぐ階段 88: 飛行する閻婆[42] 89: 牛頭を戴く
 獄卒[32] 90: 銅狗[31] 91: 毒竜[33]

[墨書]

H: 第八平等王庁 I: 第九都市王庁

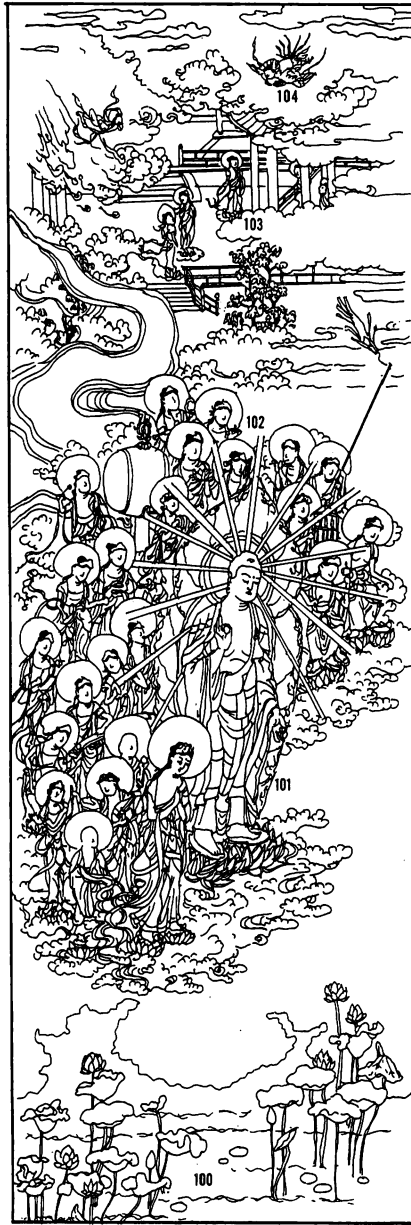


[第6幅]

62:熱鉄の地で亡者を走らせる[20] 66:弥勒菩薩 67:变成王 68:引き立てられる母親 69:薬師如来 70:太山王 71:亡者の足を伸ばす 72:亡者の舌を抜く[24] 73:炎に包まれる亡者[22] 74:地獄の通路 75:亡者の目を抜く[24] 76:亡者を串焼きにする[26] 77:亡者を熱鉄の地に寝かせ打ちすえる[25] 78:亡者を釜ゆでにする[26]

[墨書]

F:第六变成王庁 G:第七太山王庁



[第9幅]

100:蓮池 101:来迎する阿弥陀 102:二十五菩薩 103:阿弥陀浄土 104:迦陵頻伽

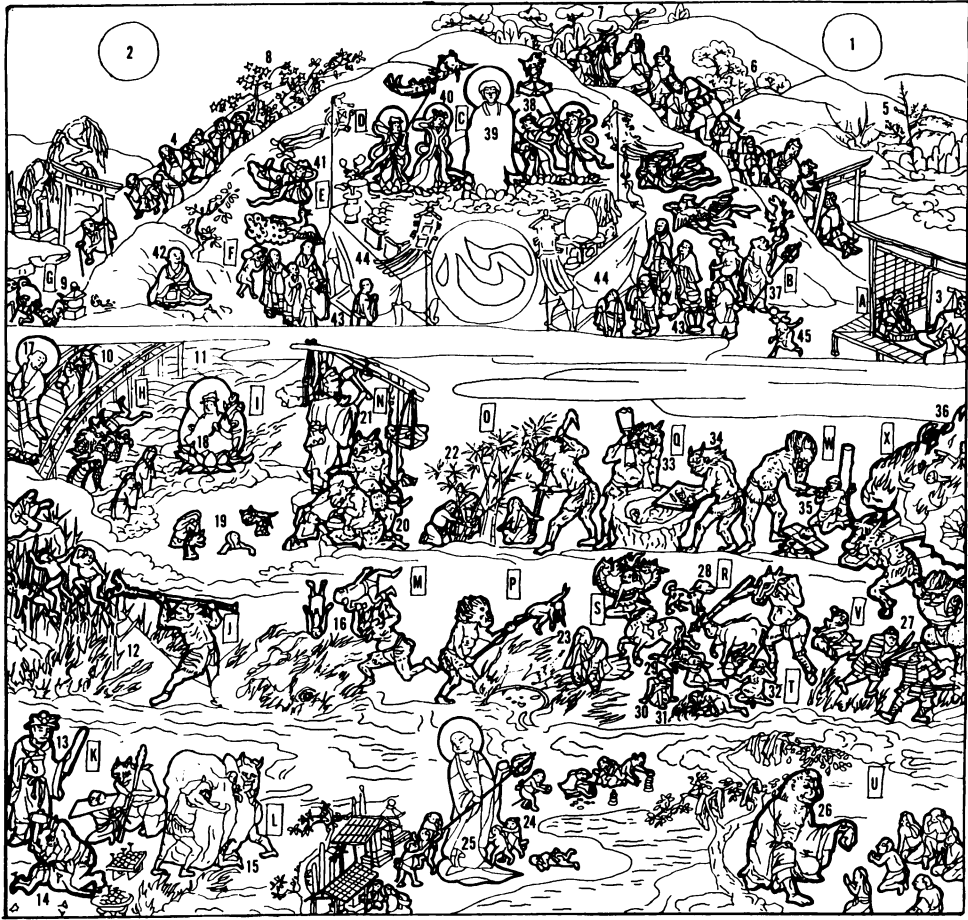


[第8幅]

92: 阿弥陀如来 93: 五道転輪王 94: 作善を提示する人物 95: 寒地獄 96: 橋 97: 救済される亡者 98: 蓮台を捧げる観音 99: 天人

[墨書]

J: 第十五道転輪王庁



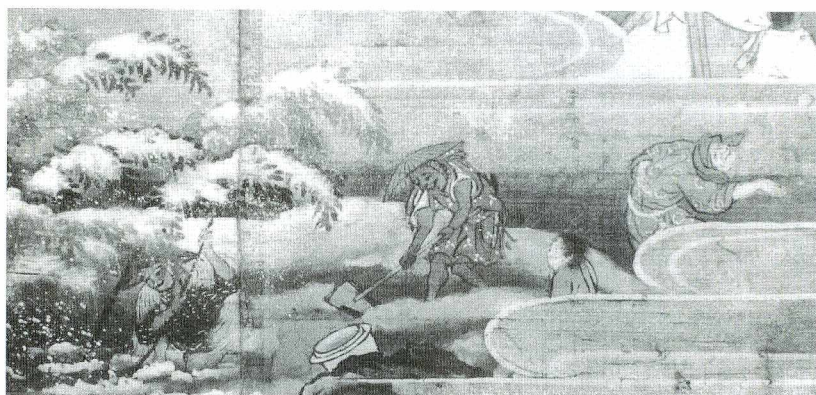
見取り図7 六道珍皇寺旧本熊野観心十界図

1:日輪 2:月輪 3:出産 4:老ノ坂 5:梅 6:桜 7:松 8:楓 9:野辺[68] 10:奈河橋 11:奈河津 12:剣の山 13:閻魔王 14:釘抜き念仏 15:二山に挟み潰される亡者[12] 16:亡者を火中に投じる 17:地藏による救済 18:如意輪観音による救済 19:血盆地獄 20:亡者に膿血を飲ませる 21:業秤[86] 22:石女地獄 23:地獄で母と再会する目連[89] 24:賽の河原 25:地藏菩薩 26:奪衣婆[84] 27:阿修羅道 28:畜生道 29:子を食らう餓鬼[58] 30:自らの足をかじる餓鬼 31:飲水が火となる餓鬼[60] 32:食物が火となる餓鬼[61] 33:亡者を臼で搗く[12] 34:亡者を篩にかける 35:亡者の舌を抜く[24] 36:火車 37:羅漢 38:観音菩薩 39:阿弥陀如来 40:勢至菩薩 41:天人 42:比丘 43:供養僧 44:供養壇 45:亡者

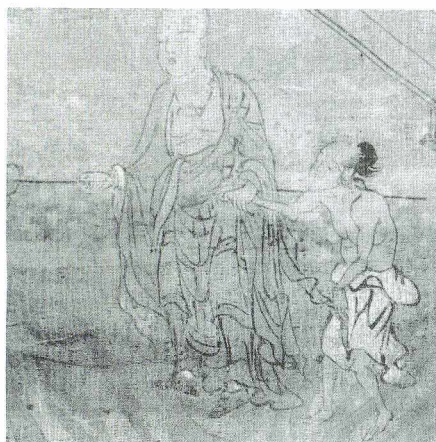
【墨書】

A:人道 B:声聞 C:佛 D:菩薩 E:天道 F:縁覚 G:苦□□□ H:(未読) I:血盆地 J:剣山 K:黒縄 L:衆合 M:永沈 N:業秤 O:不産女 P:阿鼻 Q:等活 R:畜生道 S:嫉妬炎 T:餓鬼道 U:(未読) V:修羅道 W:悪口両舌 X:大焦熱

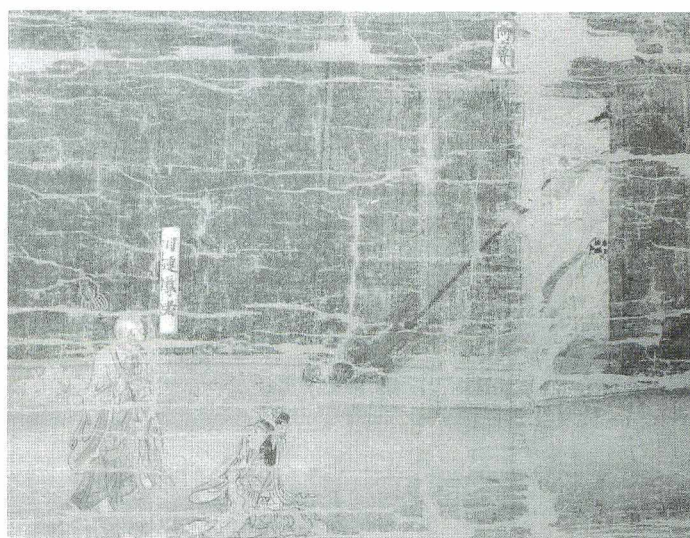
* [] 番号は付録テキストにおける関連箇所の番号に対応する



01: 出光美術館本六道絵 (16C) / 第6幅 / 孟宗・郭巨・老萊子



02: 水尾本六道十王図 (14C) / 左幅 /
地藏に導かれ現世へ往還する亡者



03: 極楽寺本六道絵 (13C) / 中幅 / 阿鼻地獄での目連母子の再会 [89]



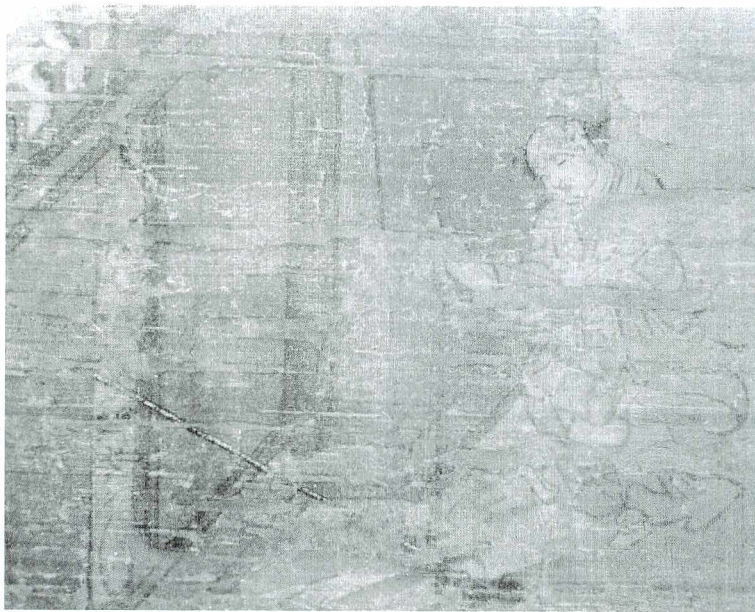
04: 極楽寺本六道絵 (13C) /
左幅/ 畜生道での目連母子
の再会



05: 長岳寺本六道十王図 (16C) / 第4幅/
黒縄地獄での目連母子の再会



06: 長岳寺本六道十王図 (16C) / 第3幅/
餓鬼道での目連母子の再会 [90]



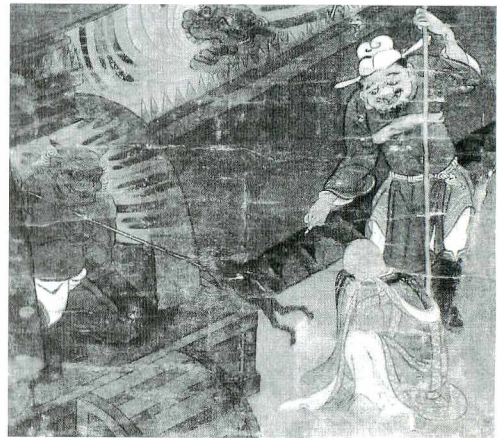
07: 禅林寺本十界図 (13C) / 地藏幅 / 阿鼻地獄での目連母子の再会 [89]



08: 水尾本六道十王図 (14C) / 左幅 / 餓鬼道での目連母子の再会 [90]



09: 水尾本六道十王図 (14C) / 左幅 /
阿鼻地獄での目連母子の再会 [89]



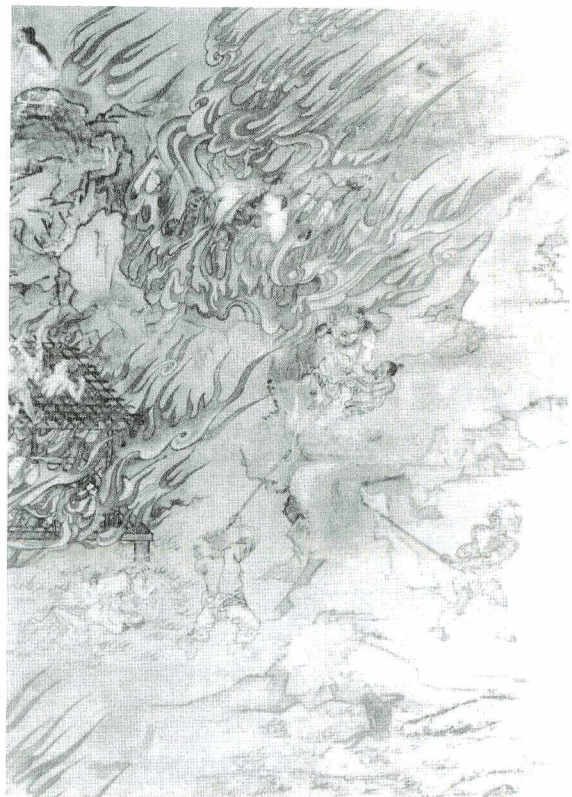
10: 向嶽寺本六道十王図 (15C) / 宋帝王幅 /
阿鼻地獄での目連母子の再会 [89]



11: 出光美術館本六道絵 (16C) / 第2幅 / 黒縄地獄での目連母子の再会



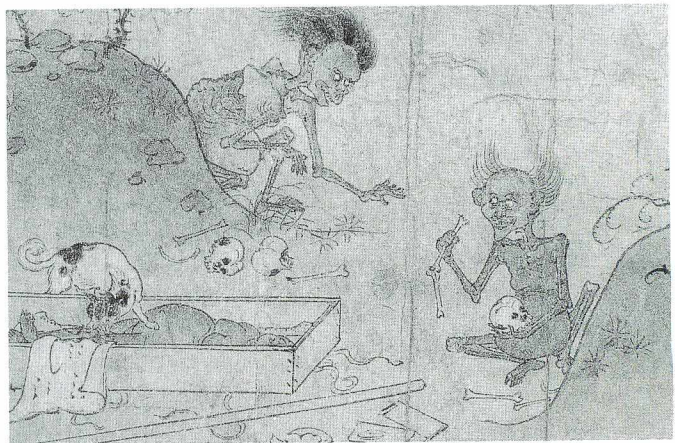
12:長岳寺本六道十王図(16C)/第7幅/
地獄を繋ぐ階段



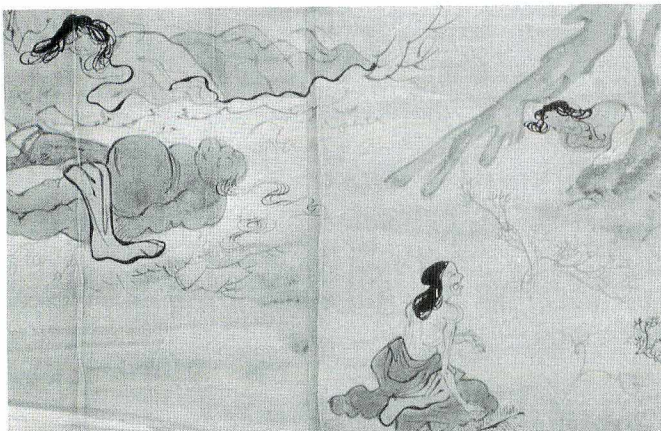
13:長岳寺本六道十王図(16C)/第6幅/
地獄の通路



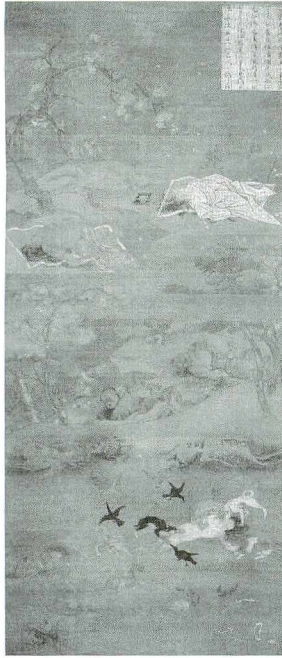
14:長岳寺本六道十王図(16C)/第8幅/
浄土への橋



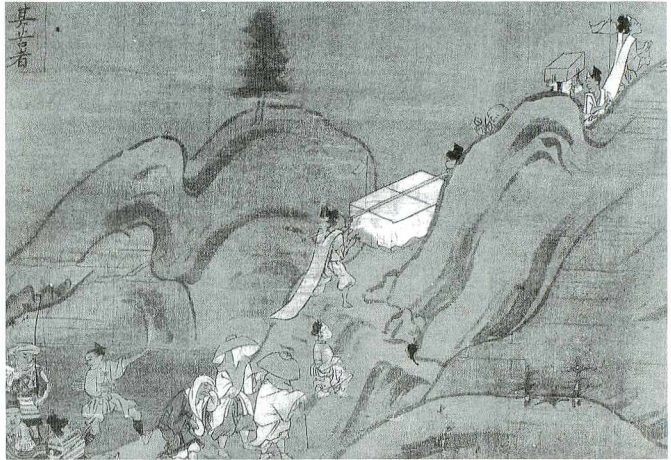
15:河本家本餓鬼草紙(12C)/
疾行餓鬼



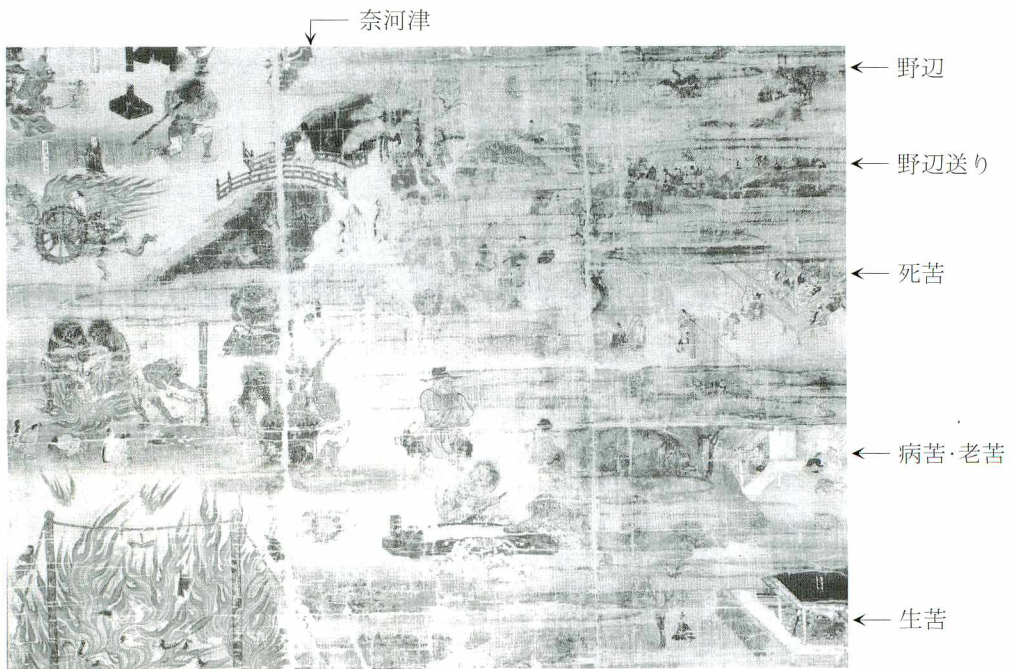
16:承久本北野天神縁起絵巻
(13C)/巻8/天人五衰[69]



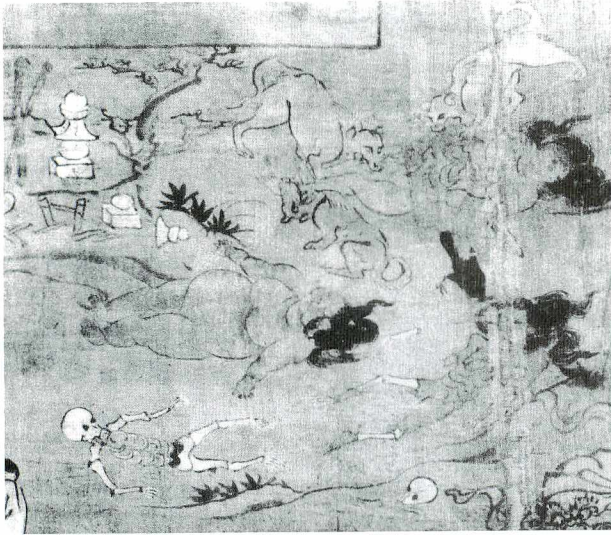
17: 聖衆来迎寺本六道絵
(13C) / 人道不浄相幅
[68]



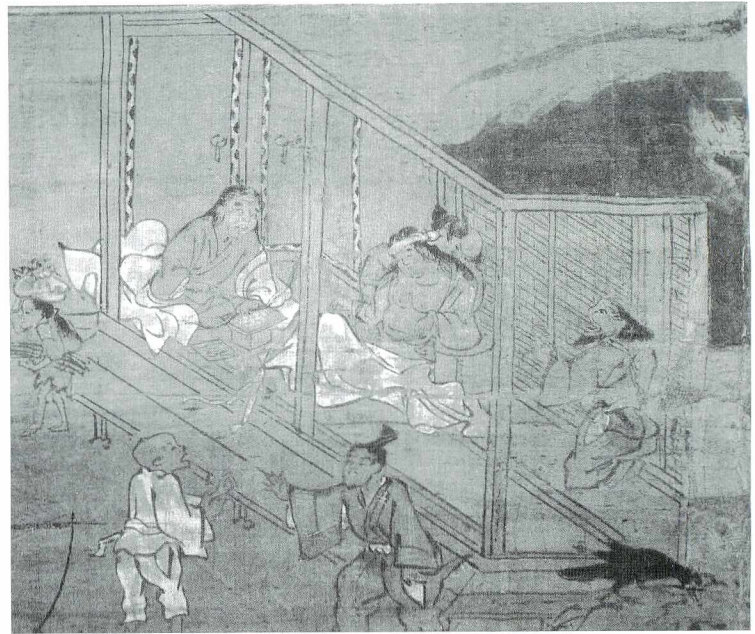
18: 聖衆来迎寺本六道絵 (13C) / 人道苦相幅 (1) / 死苦



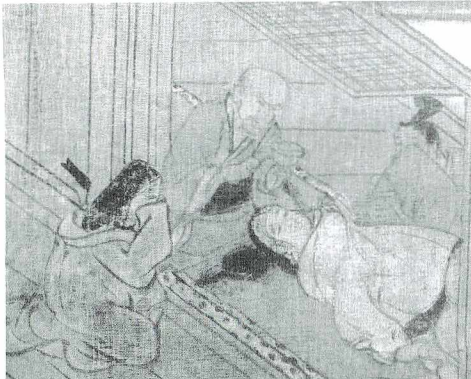
19: 極楽寺本六道絵 (13C) / 右幅 / 人道



20:水尾本六道十王図(14C) /
左幅/人道不浄相[68]



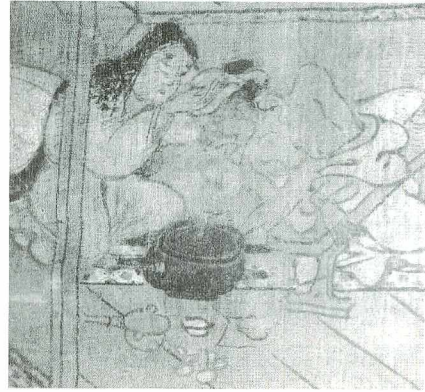
21:水尾本六道十王図(14C) /右幅/生苦



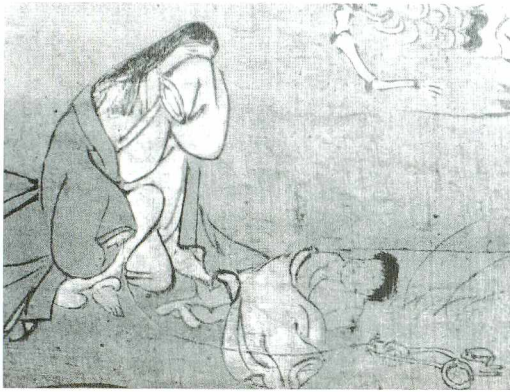
22:水尾本六道十王図(14C) /左幅/死苦



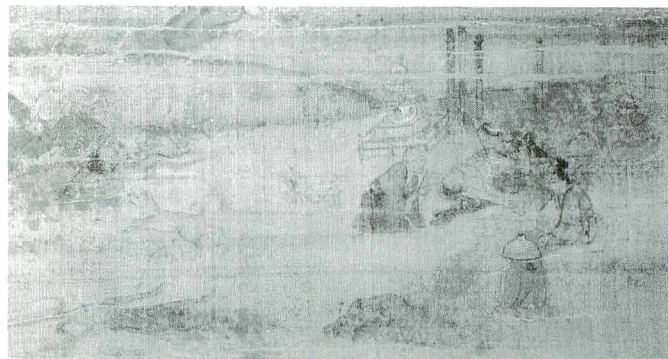
23:水尾本六道十王図(14C)/左幅
/老苦



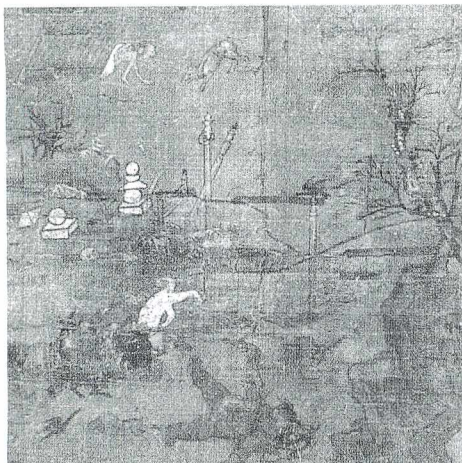
24:水尾本六道十王図(14C)/左幅/
病苦



25:水尾本六道十王図(14C)/左幅/愛別離苦



26:極楽寺本六道絵(13C)/右幅/野辺[68]



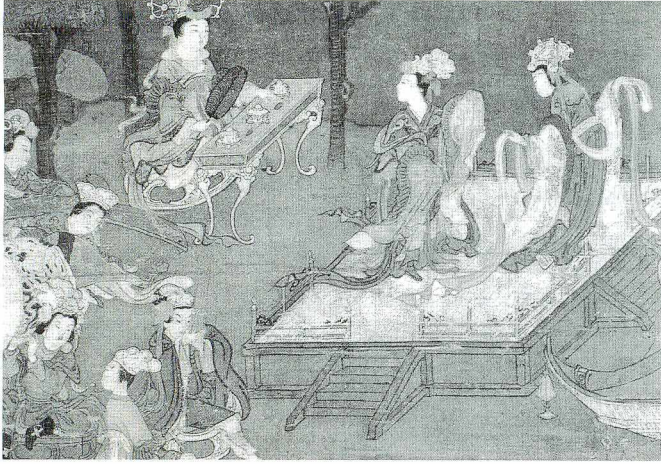
27: 香雪美術館本二河白道図 (13C) / 野辺
[68]



28: 水尾本六道十王図 (14C) / 左幅/ 天道の遊楽



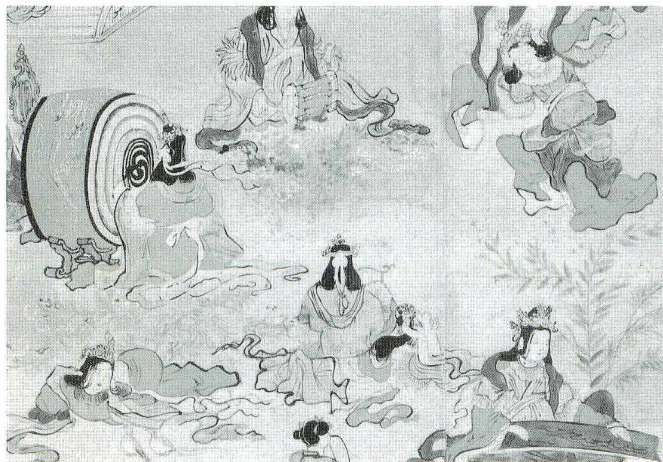
29: 水尾本六道十王図 (14C) / 左幅/ 天人の衰滅 [69]



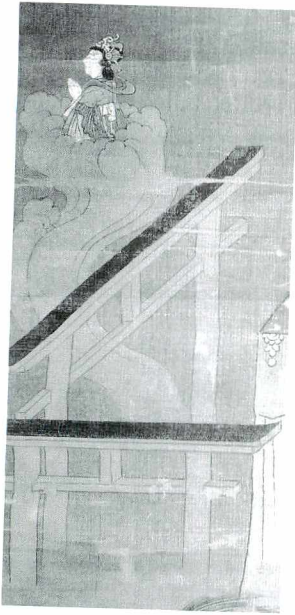
30: 聖衆来迎寺本六道絵 (13C) /天道幅/天道の遊楽



31: 聖衆来迎寺本六道絵 (13C) /天道幅/天人の衰滅[69]



32: 承久本北野天神縁起絵巻 (13C) /巻8/天道の遊楽

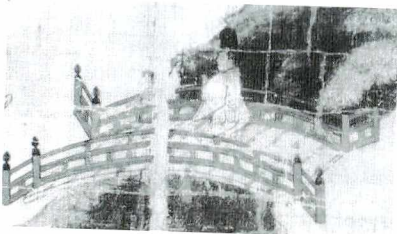


33: 二尊院本十王図 (15C)
/太山王幅/
天道へ転生する女性



34: ペリオNo. 2003敦煌本十王経図巻 (10C) /奈河

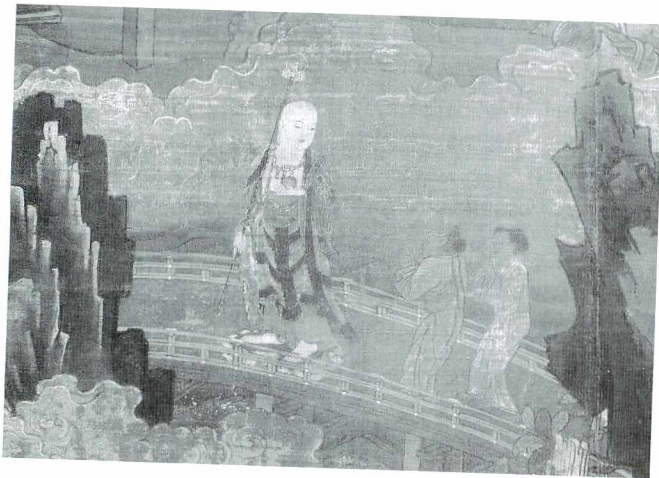
茅一七日過泰廣王
 猶日 一七六人中薩身
 且向初王齋點檢
 由朱朱渡奈
 猛羊隊隊教



36: 極楽寺本六道絵 (13C) /右幅/奈河橋 [83]



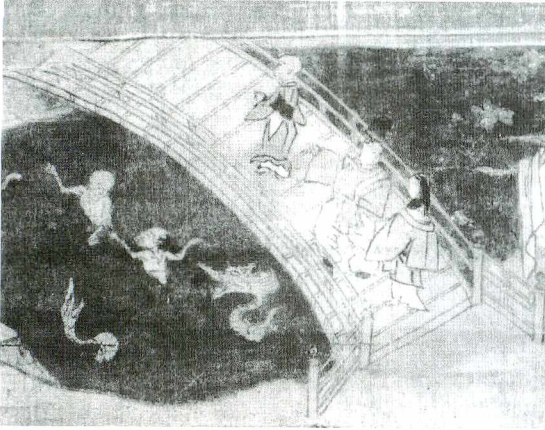
35: 禅林寺本十界図 (13C) /地蔵幅/奈河橋 [83]



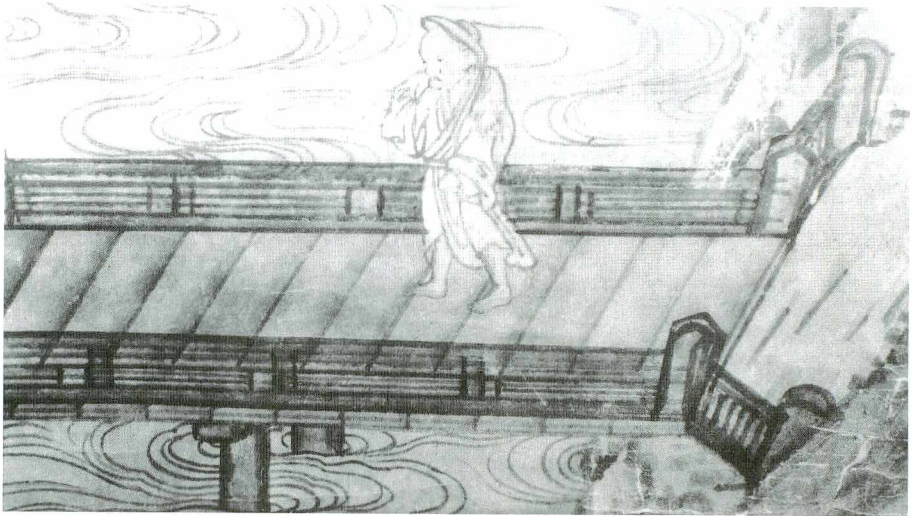
37: 出光美術館本六道絵 (16C) /第1幅/奈河橋



38: 旧前田家本十
王地獄図 (14C)
/左幅/奈河橋



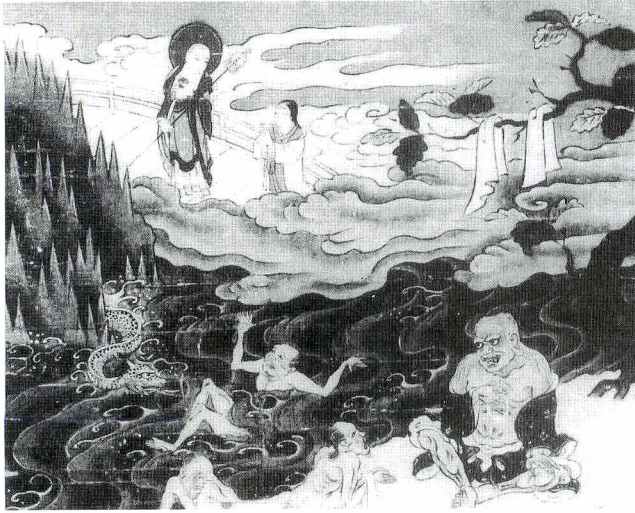
39:水尾本六道十王図(14C)/右幅/奈河橋
[83]



40:長岳寺本六道十王図(16C)/第2幅/奈河橋[83]



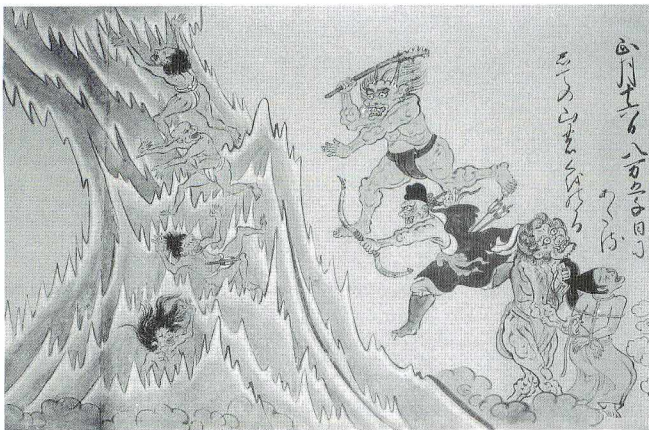
41:『十王讃歎修善鈔図絵』(1853)/死出の山路



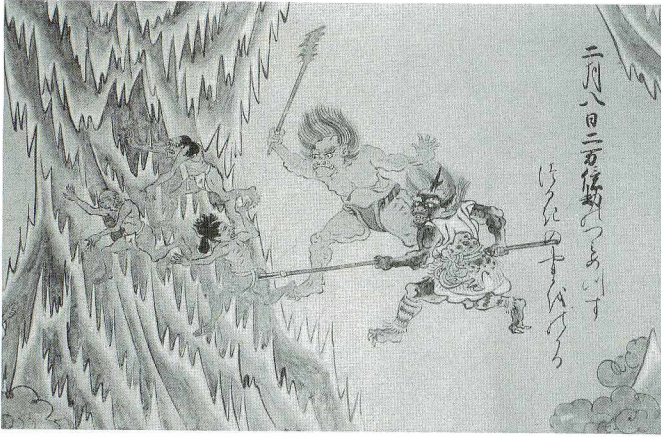
42: 向嶽寺本六道十王図 (15C) / 秦広王幅 / 剣の山



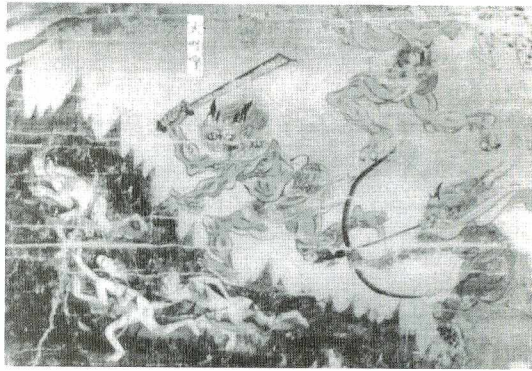
43: 東京個人蔵本往生要集絵巻 (15C) / 剣の山



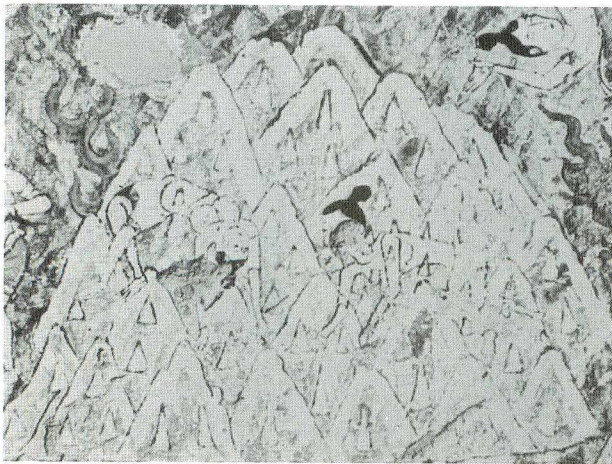
44: 奈良国立博物館本矢田地蔵毎月日絵 (16C) / 死出の山



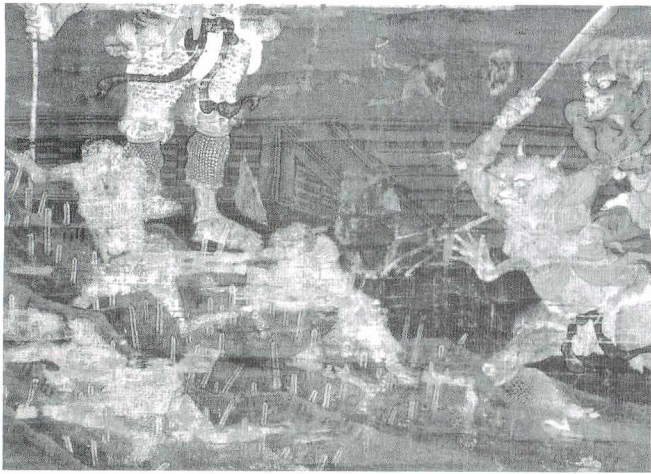
45: 奈良国立博物館本矢田地蔵毎月日絵 (16C) / 剣の山



46: 極楽寺本六道絵 (13C) / 中幅 / 「叫喚地獄」 (剣の山)



47: ベゼクリク第8寺院本堂壁画六道図 (9-10C) / 剣の山



48: 誓願寺本十王図 (13C) / 秦広王幅/ 剣の山



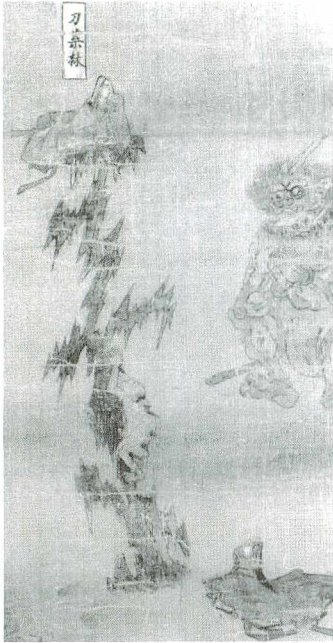
49: 知恩院本地蔵本願
經变相図 (1575-7)
/ 刀山地獄



50: 聖衆来迎寺本六道絵 (13C) /
衆合地獄幅/ 刀葉樹 [15]



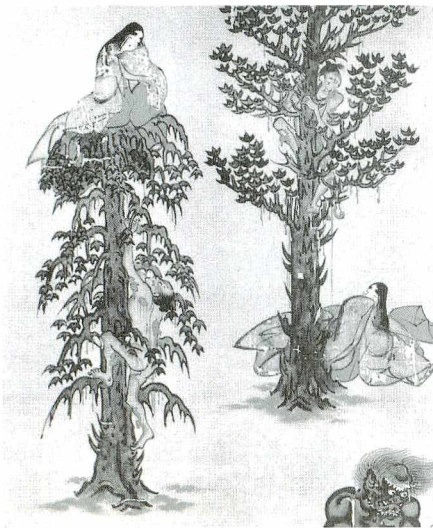
51: 禅林寺本十界図 (13C)
/ 地藏幅/ 刀葉樹 [15]



52: 極樂寺本六道絵 (13C) /
左幅/刀葉樹 [15]



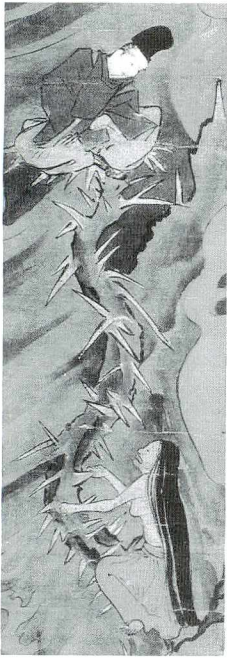
53: 立本寺本法華經金字宝塔曼荼羅
(13C) / 卷1/刀葉樹 [15]



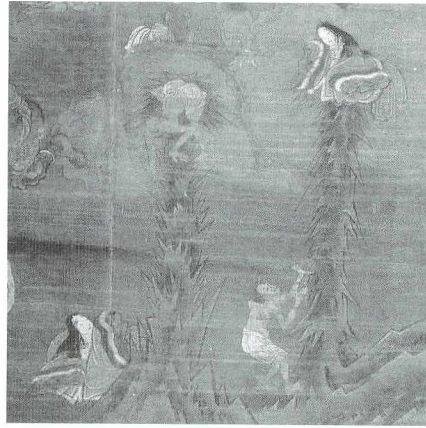
54: 春日権現験記絵卷 (1309) / 卷6/
刀葉樹 [15]



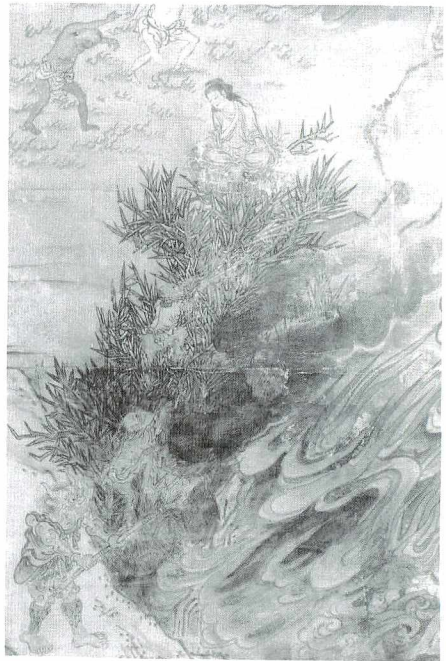
55: 旧前田家本十王地
獄図 (14C) / 左幅/
刀葉樹 [15]



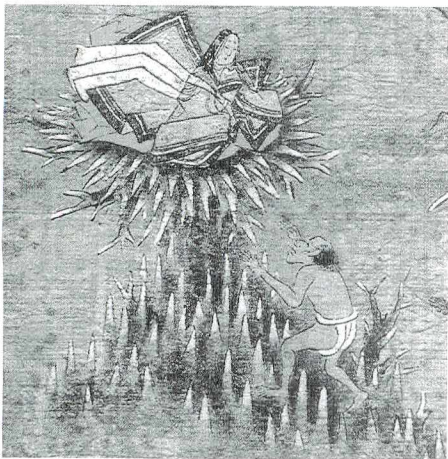
56: 旧前田家本十王
地獄図 (14C) /
右幅/刀葉樹



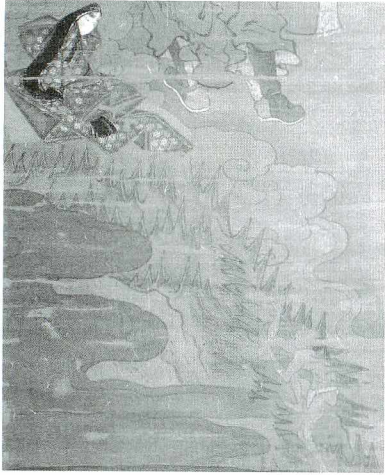
57: 出光美術館本六道絵 (16C) / 第1幅/
刀葉樹 [15]



58: 長岳寺本六道十王図 (16C) / 第5幅/
刀葉樹 [15]



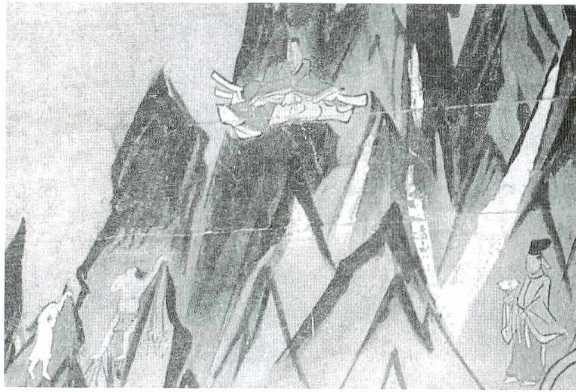
59: 東京個人蔵本往生要集絵巻 (15C) /
刀葉樹 [15]



60: 二尊院本十王図 (15C) /
初江王幅/ 剣の山



61: 六道珍皇寺旧本熊野観心十界図 (16C) / 劔山



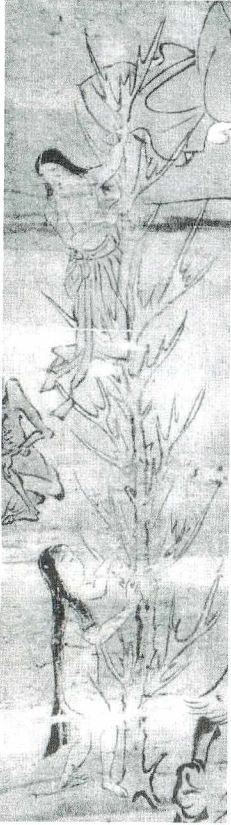
62: 来迎寺本立山曼荼羅 (17-8C) / 劔岳の女



63: 相真坊 A 本立山曼
荼羅 (19C) /
劔岳の女



64: 長寿寺本六道十王図 (15C) / 第1幅/ 劔の山



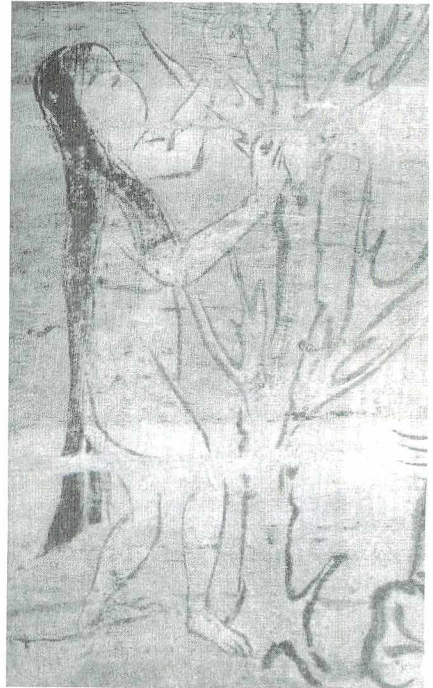
65: 水尾本六道十王
図 (14C) / 左幅 /
刀葉樹 [49]



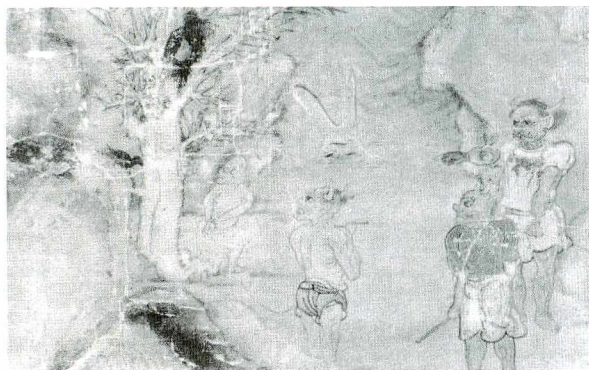
66: 水尾本六道十王
図 (14C) / 左幅 /
刀葉樹上の女 [49]



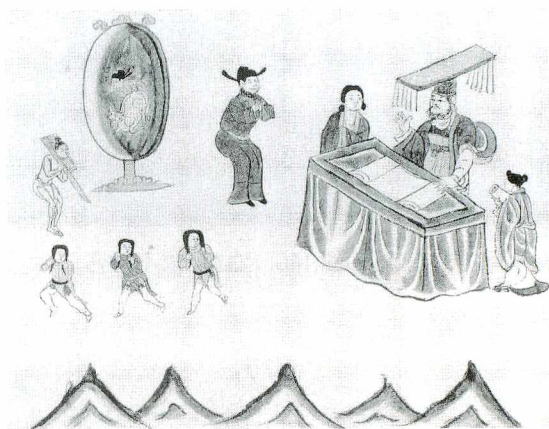
68: 長岳寺本六道十王図 (16C) / 第1幅 / 葬送 [82]



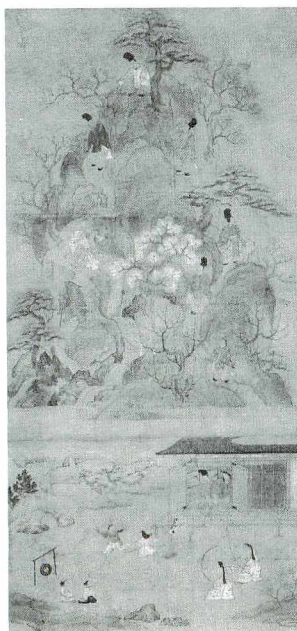
67: 水尾本六道十王図 (14C) / 左幅 /
刀葉樹を上ろうとする人物 [49]



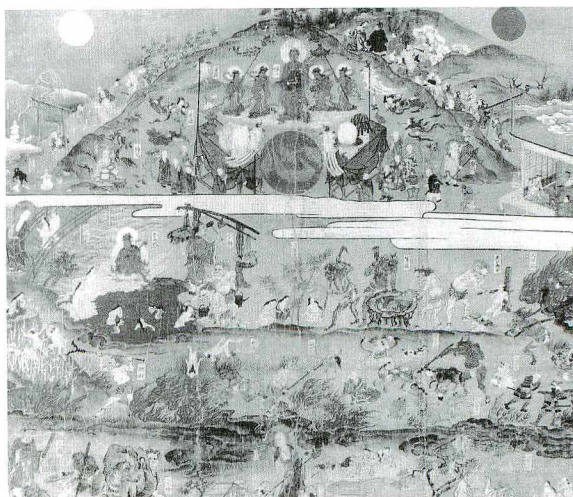
69: 長岳寺本六道十王図 (16C) /
第1幅/死天山門関の樹下[81]



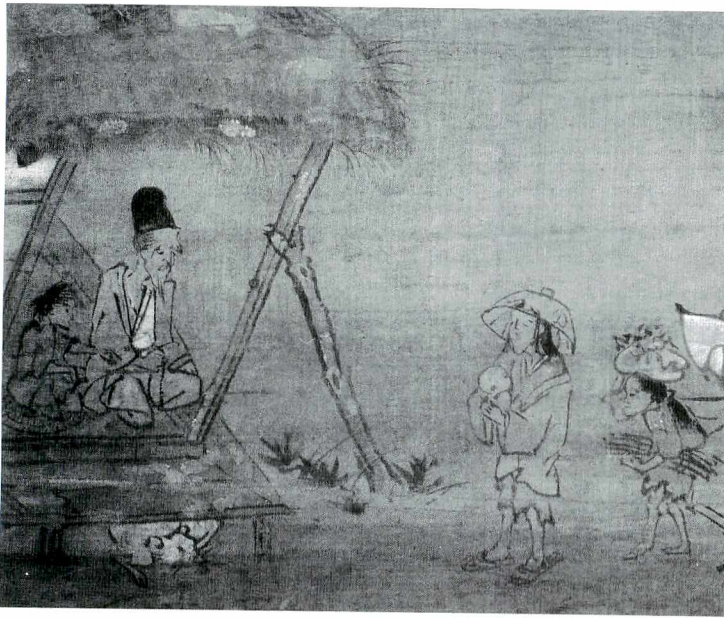
70: ペリオNo. 2003敦煌本十王経図巻 (10C) /閻魔王庁



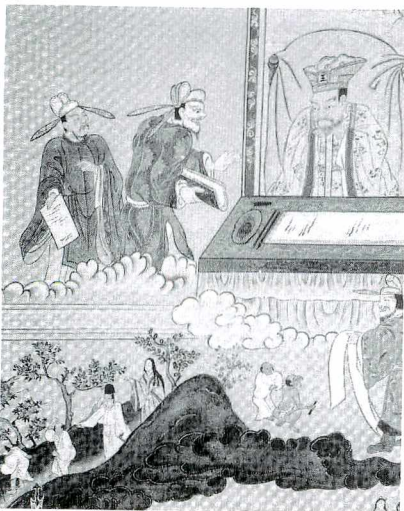
71: 東京国立博物館本おいの
のさか図 (15C)



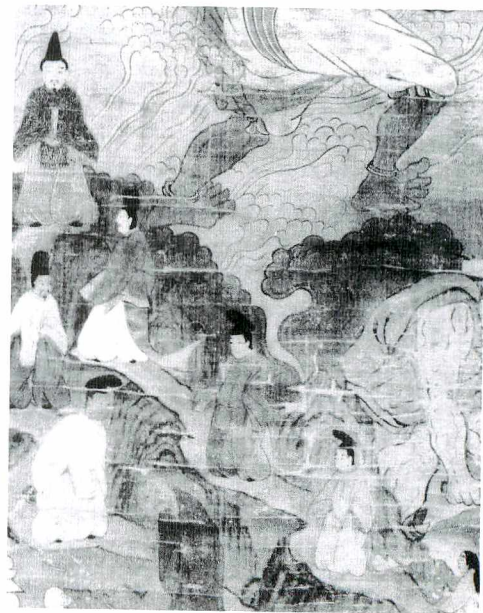
72: 六道珍皇寺旧本熊野観心十界図 (16C)



73: 水尾本六道十王図 (14C) / 右幅 / 求不得苦



75: 松禅寺本六道十王図 (17C) / 第1幅 / 老ノ坂



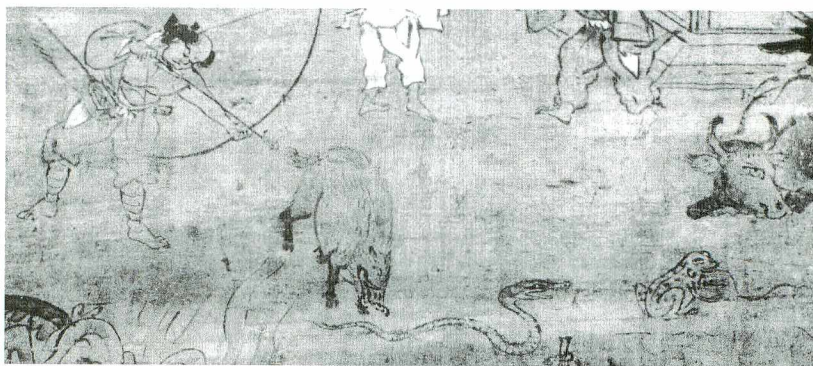
74: 総持寺本六道十王図 (16C) / 五道転輪王幅 / 老ノ坂



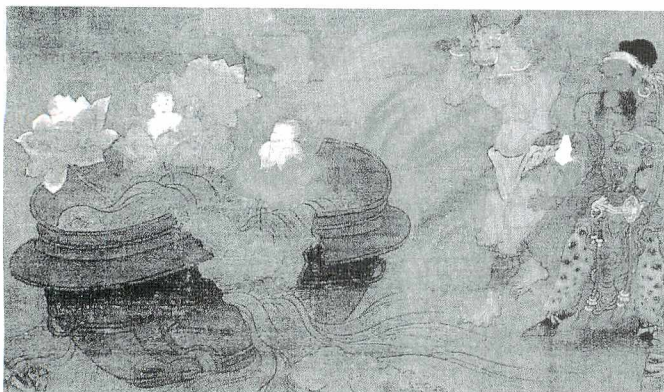
76: 水尾本六道十王図 (14C) / 右幅 /
釜が割れて蓮池となる



77: 水尾本六道十王図 (14C) / 右幅 /
鳥に背を啄まれる牛 [62]



78: 水尾本六道十王図 (14C) / 右幅 / 食物連鎖 (ミミズ・蛙・蛇・猪) [62]



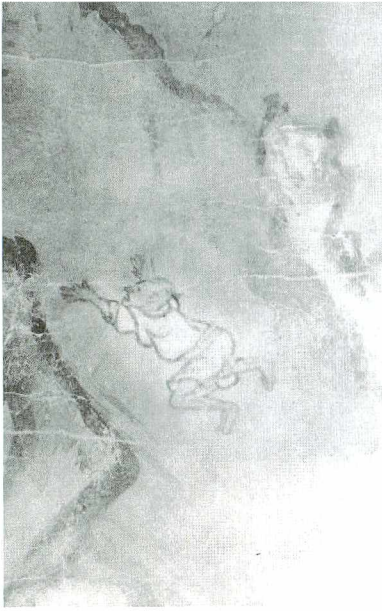
79: 聖衆来迎寺本六道絵 (13C) /
優婆塞戒經所説念仏利益図/
釜が割れて蓮池となる



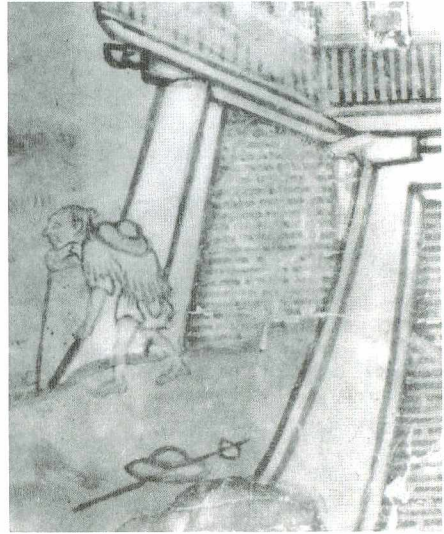
80: 極楽寺本六道絵 (13C) / 中幅/
釜が割れて蓮池となる



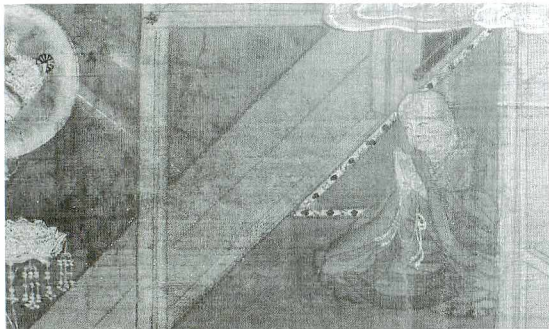
81: 長岳寺本六道十王図 (16C) / 第4幅 / 阿修羅道 [67]



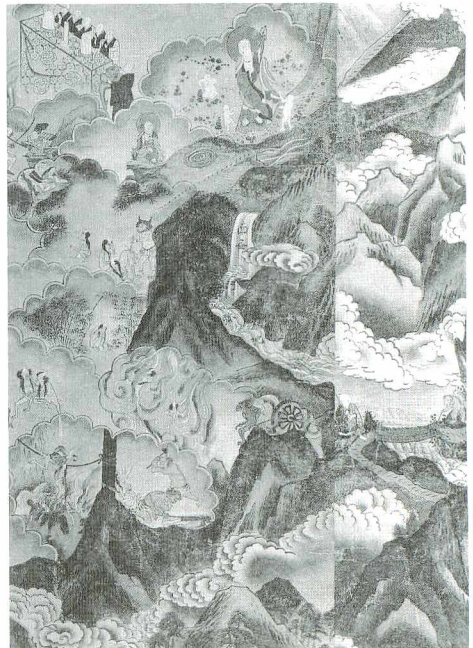
82:長岳寺本六道十王図(16C)/第1幅/陰坂に杖を尋ね路石に鞋を願う[82]



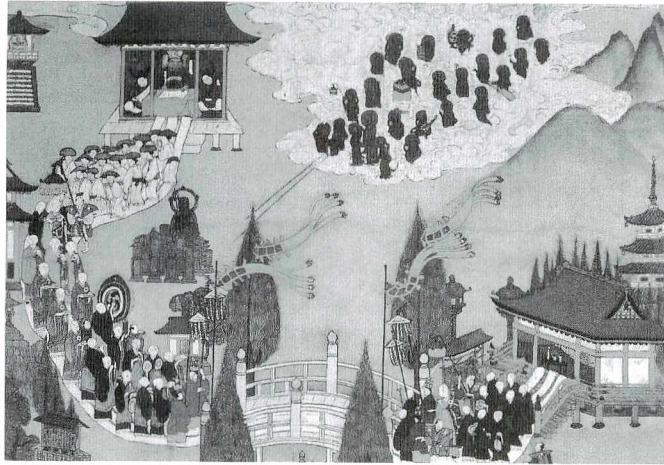
83:長岳寺本六道十王図(16C)/第1幅/死天山南門[82]



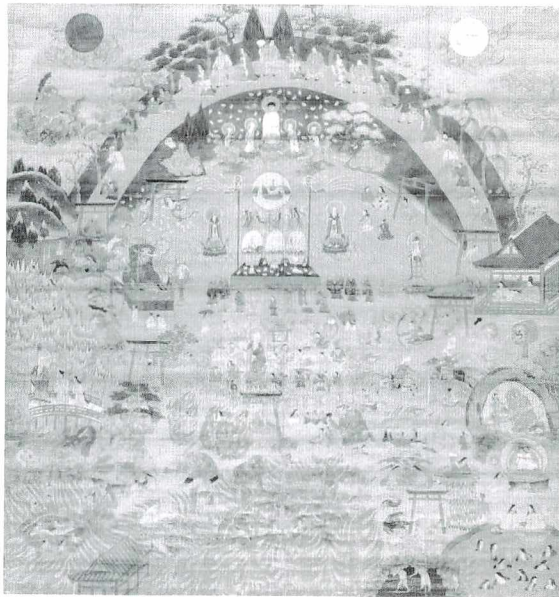
84:出光美術館本六道絵(16C)/第6幅/往生者



85:佐伯宗義氏本立山曼荼羅(19C)/他界の階段



86: 日光坊本布橋灌頂図 (19C)



87: 浄土寺本熊野観心十界図 (18C)

六道絵の図像構成に関する研究

著 者 鷹 巢 純（愛知教育大学助教授）
発 行 富山県立山博物館
〒930-1406 富山県中新川郡立山町芦峯寺93-1
TEL：076-481-1216 FAX：076-481-1144
印 刷 中村印刷工業株式会社
〒930-0339 富山市東町2-3-2
TEL：076-424-4616 FAX：076-425-6084
発 行 日 2000年3月31日